

秋田県文化財調査報告書第474集

臼 館 跡

—一般国道13号院内道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012・3

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろさか）遺跡
出土の「岩偶」です。
縄文時代中期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

うす　だて　あと
臼　館　跡

—一般国道13号院内道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書—

2012・3

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の整備や国道の建設は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道13号院内道路建設事業に先立って、平成22年度に湯沢市において実施した白館跡の発掘調査成果をまとめたものです。

調査の結果、縄文時代前期の竪穴建物跡と多くの土器・石器などが見つかり、当時の人々の生活の一端が明らかになりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、御協力いただきました国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所、湯沢市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　　言

- 1 本報告書は、平成22年度に行った白館跡の発掘調査成果を収めたもので、一般国道13号院内道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査として実施した。
- 2 調査の内容については既にその一部を遺跡見学会や遺跡発掘調査報告会、『秋田県埋蔵文化財センター年報』などによって公表しているが、本報告書を正式のものとする。
- 3 本報告書に使用した図は、国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所提供的工事路線計画図1,000分の1地形図と、国土地理院発行の50,000分の1地形図「湯沢」「稲庭」である。
- 4 報告書に掲載した剥片石器や残核、剥片の接合資料の実測・トレース図作成は株式会社アルカに委託した。その版組みもアルカによるものである。
- 5 本報告書の整理作業については、現場で調査を担当した遺構などについて、担当者が原則として遺構第二原図を作成した。遺構第二原図トレースの指示は加藤竜が行った。

土器関係では、掲載物の選別、実測図とトレース図作成の指示と分類は主に柴田陽一郎が行った。石器関係では、掲載物の選別、実測図とトレース図作成の指示と分類は主に加藤竜が行った。挿図のレイアウト・版下作成などの指示と遺物写真撮影は柴田が行った。

本文の執筆は、現場で担当した遺構については、担当者から提出された原稿をもとに、柴田が一部加・除筆した。他の分担は以下のとおりである。

柴田陽一郎 第1章第1節・第2節、第2章第1節、第3章第1節～第4節、第4章第1節・第3節1、第6章

加藤竜 第4章第3節2

本報告書の全体の編集は柴田が行った。

- 6 本書の第2章第2節歴史的環境は、秋田県教育委員会『新屋敷遺跡——一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書II』(秋田県文化財調査報告書389集-2005年3月刊行)所収の原稿を一部加・除筆したものである。また、第2章第1節遺跡の位置と立地は、上記報告書所収の原稿をベースにし、本遺跡の立地を加味して改変したものである。
- 7 本報告書の作成にあたり、以下の方々からご指導・ご助言をいただいた。記して感謝申し上げます。

(敬称略・五十音順)

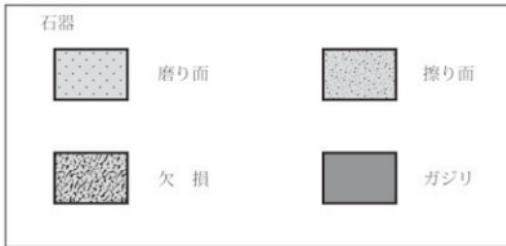
角張淳一、栗林友生、今野寛子、山内信弘

凡　例

- 1 遺構については、検出順にその種類を示す略記号と通し番号を付したが、後に遺構ではないと判明したものは欠番とした。
- 2 遺構に使用した略記号は以下の通りである。

S I (竪穴建物跡) S B (掘立柱建物跡) SK (土坑) SK F (フラスコ状土坑)
S N (焼土遺構) SK P (柱穴様ピット) P (柱穴)
- 3 本報告書で使用した土色の色調表現は、『新版 標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財団法人日本色彩研究所色票監修 2003年版に拠った。
- 4 遺物実測図の挿図中の土器は算用数字の1からの通し番号とし、石器は算用数字の前に「S」を付して1からの通し番号とした。

岩石肉眼鑑定の一覧表中の未掲載石器には、上記とは別に算用数字の1からの仮の通し番号とした。
- 5 石器の挿图表題中の末尾には、「剥」「核」「礫」「接」「他」の漢字を付して、石器資料の性格を表示している。(剥)は剥片石器、(核)は石核、(礫)は礫石器、(接)は接合資料、(他)は帰属の判断がつかない資料である。
- 6 繩文土器の拓本は、断面の左側に外側、右側に内面を配している。
- 7 計測値の単位は長さ・幅・厚さがcm、重さがgである。
- 8 磨石器実測図の挿図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。なお、剥片石器などについては挿図中に凡例を示した。



※石材の面をすっているものに「磨」の字を、石材の辺・稜をすっているものに「擦」の字をあてた。「磨」は「みがく」から、「擦」は「擦り切る、擦り潰す」ことを想定して使い分けた。

目 次

序

例言	iii
凡例	iv
目次	v
挿図目次	vii
表目次	ix
図版目次	x

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地	2
第2節 歴史的環境	6

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観	13
第2節 調査の方法	13
第3節 調査の経過	14
第4節 整理作業の経過と方法	16

第4章 調査の記録

第1節 基本層序	17
第2節 検出遺構と出土遺物	22
1 竪穴建物跡	22
2 掘立柱建物跡	22
3 土坑	23
4 フラスコ状土坑	33
5 焼土遺構	35
6 柱穴様ピット	37

第3節 遺構外出土遺物	101
1 繩文土器	
(1) I群 前期の土器	101
(2) II群 中期の土器	103
(3) III群 後期の土器	103
(4) IV群 晩期の土器	103
(5) V群 時期不明の土器	103
2 石器	
(1) 剥片石器類	103
(2) 碓石器類	107
(3) 石製品	109
3 その他	
(1) 中世の磁器	110
(2) 近世の磁器	110
第5章 自然科学的分析	
第1節 放射性炭素年代測定・樹種同定・テフラの分析	175
第2節 岩石肉眼鑑定	182
第6章 まとめ	195
図版	
報告書抄録・奥付	

挿図目次

- 第1図 遺跡位置図
第2図 地形区分図
第3図 遺跡周辺の地形分類図
第4図 遺跡周辺の表層地質図
第5図 周辺遺跡
第6図 白館跡周辺地形図
第7図 グリッド配置及び現況地形図
第8図 基本土層断面図作成位置図
第9図 基本土層断面図(1)
第10図 基本土層断面図(2)
第11図 S I 95竪穴建物跡平面図・断面図
第12図 S B91掘立柱建物跡平面図・断面図
第13図 S K01土坑遺物出土状況図
第14図 S K3・5・12・14・15・22・33・39・42・
51・78土坑平面図・断面図
第15図 S K41・43・61・62・64・67・69・74・77・80
土坑平面図・断面図
第16図 S K63・84・85・86・87・89・90・96土坑平
面図・断面図
第17図 S K100・104土坑遺物出土状況図・平面
図・断面図
第18図 S K94・97・101・103・109・110土坑平面
図・断面図
第19図 S K F 26・31・68・72・99 フラスコ状土坑
平面図・断面図
第20図 S N 66・79・88・92・93・102 焼土遺構平面
図・断面図
第21図 S N 105～108・111・112 焼土遺構平面
図・断面図
第22図 遺構外土器出土状況図(1)
第23図 遺構外土器出土状況図(2)
第24図 遺構内出土土器(1)
第25図 遺構内出土土器(2)
第26図 遺構内出土土器(3)
第27図 遺構内出土土器(4)
第28図 遺構内出土土器(5)
第29図 遺構内出土土器(6)
第30図 遺構内出土石器(1)核
第31図 遺構内出土石器(2)剥
第32図 遺構内出土石器(3)剥・他
第33図 遺構内出土石器(4)剥・他
第34図 遺構内出土石器(5)接
第35図 遺構内出土石器(6)核・接
第36図 遺構内出土石器(7)接
第37図 遺構内出土石器(8)剥・核・接
第38図 遺構内出土石器(9)接
第39図 遺構内出土石器(10)核・接
第40図 遺構内出土石器(11)接
第41図 遺構内出土石器(12)核・接
第42図 遺構内出土石器(13)接
第43図 遺構内出土石器(14)接
第44図 遺構内出土石器(15)接
第45図 遺構内出土石器(16)核
第46図 遺構内出土石器(17)接
第47図 遺構内出土石器(18)核
第48図 遺構内出土石器(19)接
第49図 遺構内出土石器(20)核・接
第50図 遺構内出土石器(21)接
第51図 遺構内出土石器(22)剥・核
第52図 遺構内出土石器(23)接・核
第53図 遺構内出土石器(24)接
第54図 遺構内出土石器(25)接
第55図 遺構内出土石器(26)接
第56図 遺構内出土石器(27)核・接
第57図 遺構内出土石器(28)接
第58図 遺構内出土石器(29)核
第59図 遺構内出土石器(30)核
第60図 遺構内出土石器(31)礫
第61図 遺構内出土石器(32)礫
第62図 遺構内出土石器(33)礫
第63図 遺構内出土石器(34)礫
第64図 遺構内出土石器(35)礫

第65図	遺構外出土石器(36)礫
第66図	遺構外出土土器(1)
第67図	遺構外出土土器(2)
第68図	遺構外出土土器(3)
第69図	遺構外出土土器(4)
第70図	遺構外出土土器(5)
第71図	遺構外出土土器(6)
第72図	遺構外出土土器(7)
第73図	遺構外出土土器(8)
第74図	遺構外出土土器(9)
第75図	遺構外出土土器(10)
第76図	遺構外出土土器(11)
第77図	遺構外出土土器(12)
第78図	遺構外出土土器(13)
第79図	遺構外出土土器(14)
第80図	遺構外出土土器(15)
第81図	遺構外出土土器(16)
第82図	遺構外出土土器(17)
第83図	遺構外出土土器(18)
第84図	遺構外出土土器(19)
第85図	遺構外出土石器(1)剥
第86図	遺構外出土石器(2)剥
第87図	遺構外出土石器(3)剥
第88図	遺構外出土石器(4)剥・他
第89図	遺構外出土石器(5)剥・他
第90図	遺構外出土石器(6)剥
第91図	遺構外出土石器(7)剥
第92図	遺構外出土石器(8)剥
第93図	遺構外出土石器(9)剥
第94図	遺構外出土石器(10)剥
第95図	遺構外出土石器(11)剥
第96図	遺構外出土石器(12)剥
第97図	遺構外出土石器(13)剥
第98図	遺構外出土石器(14)剥
第99図	遺構外出土石器(15)剥
第100図	遺構外出土石器(16)剥
第101図	遺構外出土石器(17)剥
第102図	遺構外出土石器(18)剥
第103図	遺構外出土石器(19)剥
第104図	遺構外出土石器(20)剥・核
第105図	遺構外出土石器(21)礫
第106図	遺構外出土石器(22)礫
第107図	遺構外出土石器(23)礫
第108図	遺構外出土石器(24)礫
第109図	遺構外出土石器(25)礫
第110図	遺構外出土石器(26)礫
第111図	遺構外出土石器(27)礫
第112図	遺構外出土石器(28)礫
第113図	遺構外出土石器(29)礫
第114図	遺構外出土石器(30)礫
第115図	遺構外出土石器(31)礫
第116図	遺構外出土石器(32)礫
第117図	遺構外出土石器(33)礫
第118図	遺構外出土石器(34)礫
第119図	遺構外出土石器(35)礫
第120図	遺構外出土石器(36)礫
第121図	遺構外出土石器(37)礫
第122図	遺構外出土石器(38)礫・他
第123図	重鉱物組成及び火山ガラス比
第124図	火山ガラスの屈折率
第125図	石材組成(1)
第126図	石材組成(2)
付図	遺構配置図

表 目 次

- 第1表 白館跡の周辺遺跡
- 第2表 柱穴様ピット一覧
- 第3表 遺構土層注記一覧(1)
- 第4表 遺構土層注記一覧(2)
- 第5表 遺構内出土土器一覧
- 第6表 遺構内剥片石器類・礫石器一覧
- 第7表 遺構外出土土器一覧(1)
- 第8表 遺構外出土土器一覧(2)
- 第9表 遺構外剥片石器一覧(1)
- 第10表 遺構外剥片石器一覧(2)
- 第11表 遺構外礫石器一覧(1)
- 第12表 遺構外礫石器一覧(2)
- 第13表 石器・石製品の器種別・分類別出土点数
- 第14表 放射性炭素年代測定及び樹種同定結果
- 第15表 曆年較正結果
- 第16表 重鉱物・火山ガラス比分析結果
- 第17表 遺構内礫石器一覧
- 第18表 遺構外礫石器一覧(1)
- 第19表 遺構外礫石器一覧(2)
- 第20表 未掲載石材鑑定表(1)
- 第21表 未掲載石材鑑定表(2)
- 第22表 未掲載石材鑑定表(3)
- 第23表 未掲載石材鑑定表(4)
- 第24表 器種別石材組成

図版目次

- 図版1 空中写真(1)
- 図版2 空中写真(2)
- 図版3 空中写真(3)
- 図版4 調査区の様子(1)
- 図版5 調査区の様子(2)
- 図版6 調査区の様子(3)
- 図版7 調査区の様子(4)
- 図版8 基本土層
- 図版9 検出遺構(1)
- 図版10 検出遺構(2)
- 図版11 検出遺構(3)
- 図版12 検出遺構(4)
- 図版13 検出遺構(5)
- 図版14 検出遺構(6)
- 図版15 検出遺構(7)
- 図版16 検出遺構(8)
- 図版17 検出遺構(9)
- 図版18 検出遺構(10)
- 図版19 検出遺構(11)
- 図版20 検出遺構(12)
- 図版21 遺構内出土遺物(1)
- 図版22 遺構内出土遺物(2)
- 図版23 遺構内出土遺物(3)
- 図版24 遺構内出土遺物(4)・遺構外出土遺物(1)
- 図版25 遺構外出土遺物(2)
- 図版26 遺構外出土遺物(3)
- 図版27 遺構外出土遺物(4)
- 図版28 遺構外出土遺物(5)
- 図版29 遺構外出土遺物(6)
- 図版30 遺構外出土遺物(7)
- 図版31 遺構外出土遺物(8)
- 図版32 遺構外出土遺物(9)
- 図版33 遺構外出土遺物(10)
- 図版34 遺構外出土遺物(11)
- 図版35 遺構外出土遺物(12)
- 図版36 遺構外出土遺物(13)
- 図版37 重鉱物・火山ガラス
- 図版38 炭化材

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

一般国道13号は、福島市を起点として秋田市に至る総延長303.7kmの主要幹線道路として、重要な役割を果たしてきた。しかし近年、湯沢・横手両市街地を中心に、交通量の増加と車両の大型化に伴う交通渋滞が慢性化し、騒音・振動等による沿道住民の生活環境の悪化も指摘されていた。このような諸問題を解消するために、1984（昭和59）年度には横手南バイパス、1985（昭和60）年度には湯沢バイパスの建設事業が着手された。その後種々検討が加えられて、一般国道13号湯沢横手道路が高規格幹線道路として整備が進められてきた。この道路は冬季の安全性向上、走行安定性の向上、速度低下による時間損失の解消と災害に強いネットワークの形成を図るものである。湯沢横手道路は、横手IC～十文字IC間、十文字IC～湯沢IC間、湯沢IC～雄勝こまちIC間が順次に開通し、全線で共用を開始している。

院内道路も高規格幹線道路で、起点の湯沢市上院内から終点である下院内間の約3kmのバイパスである。安全で円滑な交通を確保し、堆雪スペースや歩道幅を広げて安全の確保を図るために、平成15年度より新規に事業化され、現在も工事進行中である。

計画路線内には埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることから、道路工事に先立って国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所より、文化財保護法に基づく埋蔵文化財包蔵地の確認と今後の対応について秋田県教育委員会に調査の依頼があった。これを受け秋田県教育委員会は、計画路線内の分布調査及び確認調査を平成21（2009）年10月から11月にかけて実施し、記録保存が必要な埋蔵文化財包蔵地については、発掘調査を実施することになった。

第2節 調査要項

遺跡名	臼館跡（うすだてあと）（遺跡略号 9UD）
遺跡所在地	秋田県湯沢市下院内字焼山18外
調査期間	平成22年6月15日～9月30日
調査面積	5,600m ²
調査主体者	秋田県教育委員会
調査担当	秋田県埋蔵文化財センター 副主幹：柴田陽一郎 文化財主任：加藤 竜 調査・研究員：巴 亜子・高橋由直
調査総務担当	主査：久米 保 主任：高村智恵子（調査当時）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局湯沢河川国道事務所 湯沢市教育委員会

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地(第1・3~5図)

臼館跡の所在する秋田県湯沢市の旧雄勝町地域は、秋田県の南東部、山形・宮城両県との県境に位置する。この地域を東西に二分するように役内川が北流し、JR横堀駅の西約1.5kmで町北部を流れる雄物川に合流する。雄物川はさらに旧湯沢市域の相川付近との境で高松川と合流し、その扇状地が町の北端部を覆っている。また、雄物川に併行してJR奥羽本線と国道13号が秋田ー山形方面に、役内川に平行して国道108号が旧鳥海町（現由利本荘市）ー宮城方面に走る。旧雄勝町地域は北西ー南東方向約32km、北東ー南西方向約15kmにわたり、その面積は約306.02km²である。

臼館跡は院内地地区に所在し、北緯39° 2' 58"、東経140° 25' 39"、JR院内駅の東約1kmに位置する。周辺地域の土地利用は、水田、地林、果樹園等があり、水田が多くを占める。

遺跡周辺の地形は、山地・火山地、丘陵地、低地の3つから形成されるが、丘陵地はより北方の湯沢市と羽後町に存在し、遺跡周辺では見られない（第2~4図）。臼館跡は鳥帽子山山地（I 1）の北端に立地し、遺跡周辺をみると、西部には出羽山地である大仙山山地（I g）、姥井戸山山地（I h）、北部は大黒森山山地（I j）、檜山山地（I m）が、雄物川低地（III a）を間に挟んで連なる。鳥帽子山山地（I 1）の東部にはおよそ70~100万年前に噴火し、その火山噴出物によって一帯を形成した火山地である小比内山火山地（I q）、小比内山火山山麓地（I r）が、役内川低地（III c）を間に挟んで連なる。ちなみに雄物川低地には新屋敷遺跡、役内川低地には館堀城跡が立地する。

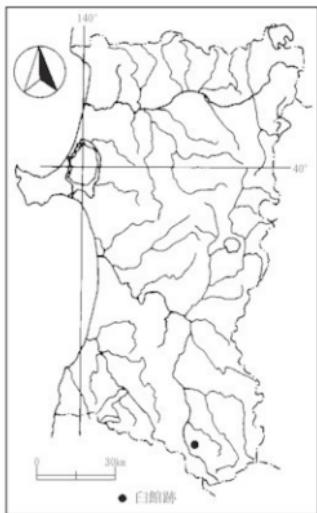
遺跡近隣地域に限定すると、大仙山山地（I g）の主峰、大仙山は標高920.2m、姥井戸山山地（I h）の主峰、姥井戸山は標高926.9mである。地質は大仙山層などでは尾根部で玄武岩、凝灰岩が、谷部で安山岩溶岩、同質火山碎屑岩で構成されているグリーンタフ山地で、起伏量300~400m、最大は姥井戸山の西で465mに達する大・中起伏山地である。

（I m）は、湯沢市との境に位置する檜山を主峰とした、出羽山地の一部である。起伏量は200~300mの中起伏山地であるが、（III a）に面した一部では400m以上の大起伏山地を呈する。地質は飯沢層をなす輝石安山岩及びその火山碎屑岩、女川層を成す酸性軽石凝灰岩、火山礫凝灰岩からなる。

雄物川低地は湯沢断層によって形成された断層谷であり、同時に雄物川によって削り出された河谷低地でもある。本低地東部には、小型の扇状地が南北にいくつも連なり、いわゆる複合扇状地が発達している。この複合扇状地は傾斜が3°未満と緩やかなものである。また、国道13号に併行して点在する砂堆地は、集落の立地などから見ても、河川の流路変更に伴って取り残された自然堤防と考えることができる。地質は第四紀にもたらされた沖積低地堆積物が主である。

高松川低地（III b）、役内川低地（III c）も、断層谷であると共に、両河川によって削り出された河谷低地である。旧河道の縁辺部には、河道の氾濫によって沖積段丘崖が形成されている。

臼館跡は鳥帽子山山地（I 1）の北端で、地形は中起伏山地（起伏量400~200m-M a）、表層地質は酸性軽石凝灰岩（泥岩を伴う-O t）の台地上に立地している。臼館跡の標高は約176~251mで、調査区は176~193mである。



第1図 遺跡位置図

地形区分図説明

- I 山地・火山地
- I a : 朝日森山地 I b : 大森山山地
- I c : 菅森山地 I d : 加無山山地
- I e : 鷹山山地 I f : 前森山山地
- I g : 大仙山山地 I h : 姥井戸山山地
- I i : 莖倉山山地 I j : 大黒森山山地
- I k : 太平山山地 I l : 烏帽子山山地
- I m : 檜山山地 I n : 東鳥海山山地
- I o : 三本鎗山山地 I p : 御岳山山地
- I q : 小比内山山地 I r : 小比内山火山山體地

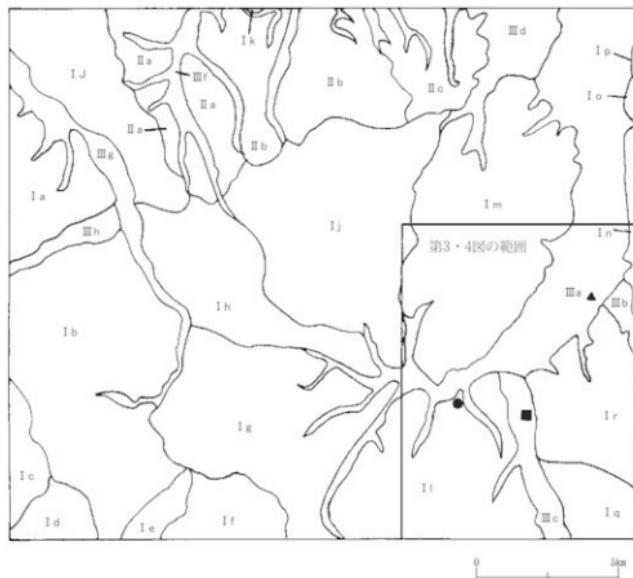
II 丘陵地

- II a : 仙道丘陵地 II b : 飯沢丘陵地
- II c : 田沢丘陵地

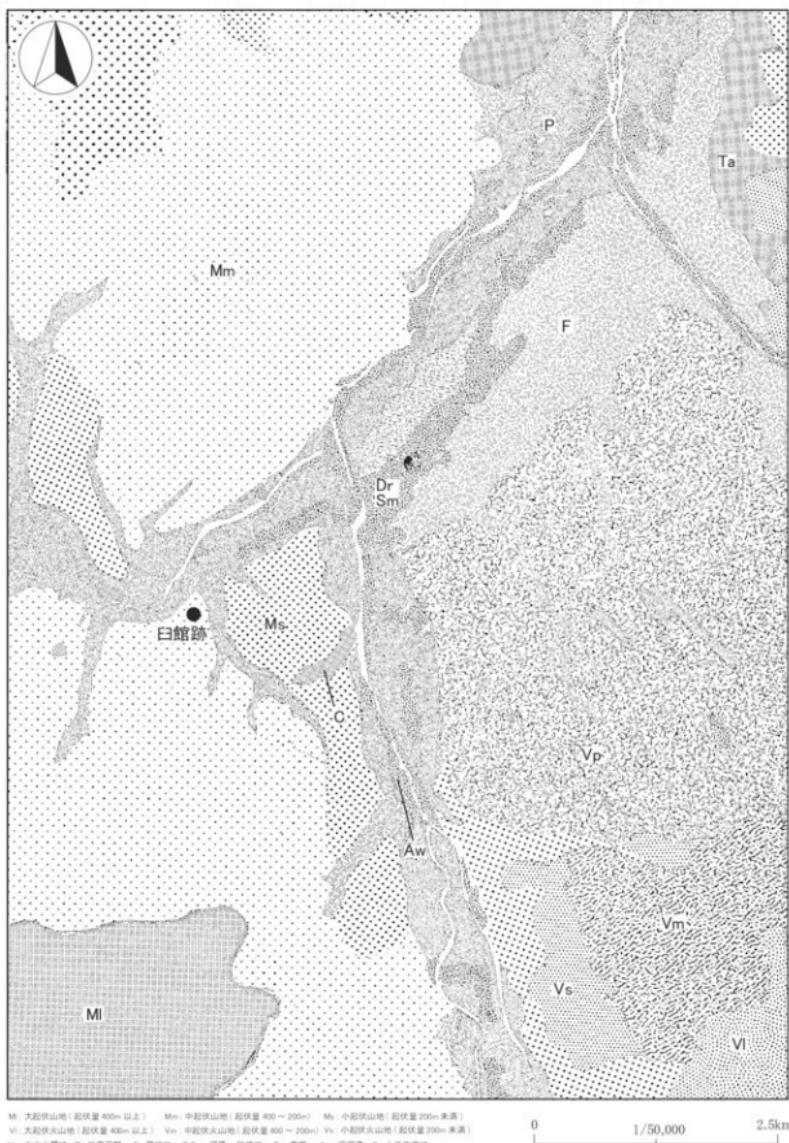
III 低地

- III a : 雄物川低地 III b : 高松川低地
- III c : 役内川低地 III d : 作内川扇状低地
- III e : 西馬音内川低地 III f : 仙道川低地
- III g : 銚子川低地 III h : 丁川低地

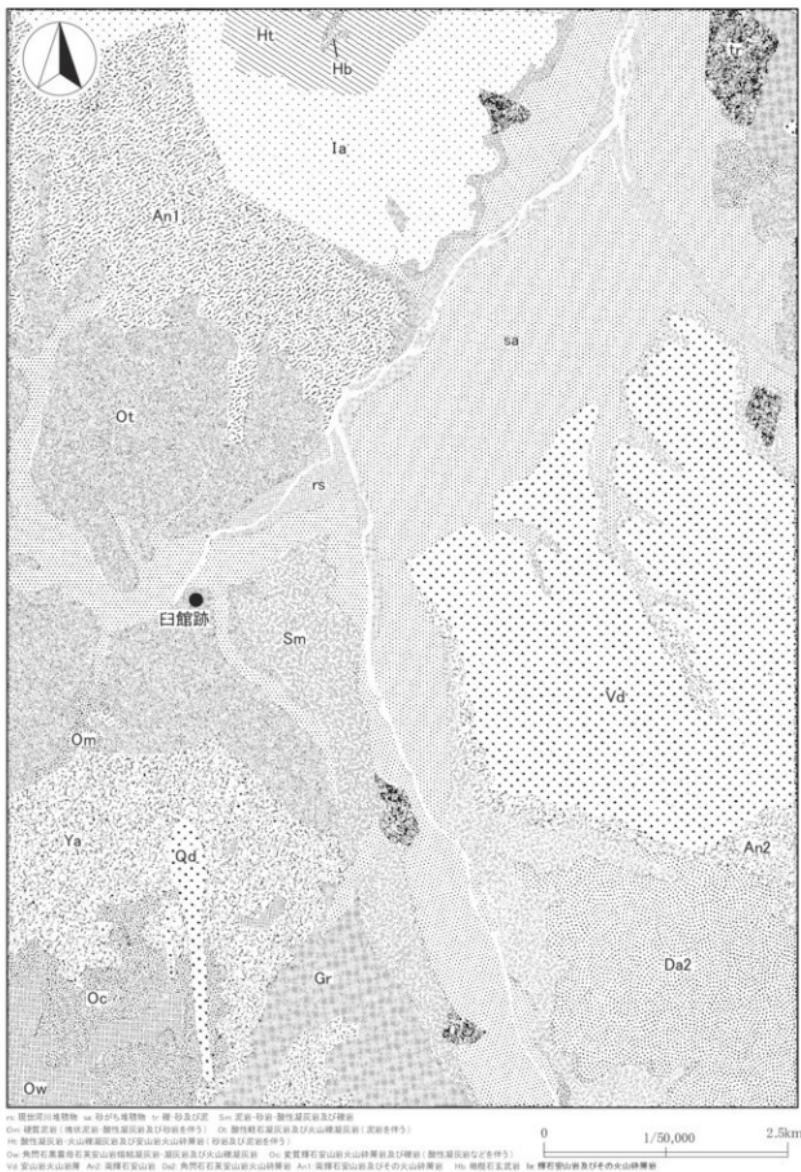
- 白館跡
- 鶴堀城跡
- ▲ 新屋敷遺跡



第2図 地形区分図



第3図 遺跡周辺の地形分類図



第4図 滑走路周辺の表層地盤図

第2節 歴史的環境

臼館跡周辺では、縄文時代から近世までの遺跡が確認されており、その殆どが縄文時代と中世の遺跡である。これらは雄物川とその支流である役内川流域の低地や丘陵地、山麓などに立地している。また当地域は古代から交通の要所であり、有屋峠・雄勝峠を越えて山形県最上郡金山町・真室川町、鬼首峠から宮城県大崎市（旧鳴子町）、松の木峠から由利本荘市（旧鳥海町）へ通じている。雄勝峠は国道13号、鬼首峠と松の木峠は国道108号にあたり、今日でも県内外への出入り口として重要な役割を担っている。ただし駅家設置の際に開通した有屋峠道は、慶長8（1063）年に羽州街道が雄勝経由となつたため閉鎖された。以下に、発掘調査の実施された遺跡を中心に当遺跡周辺の歴史的な環境を概観したい。なお、文中・挿図中・表中にある（7-15）等の表記は、『秋田県遺跡地図（県南版）』に掲載された遺跡の地図番号と一致する（第5図・第1表）。

図幅中における縄文時代の遺跡は、雄物川流域を上流から辿っていくと、院内地区の丘陵上に岩井堂洞窟（66-6）、釜ノ上I遺跡（66-7）・釜ノ上II遺跡（66-8）・下馬場遺跡（66-9）などが確認されている。これらのうち岩井堂洞窟遺跡は、1962（昭和37）年、県内埋蔵文化財の一斉調査を機に発見され、1963（昭和38）年から1976（昭和51）年まで8次にわたり、凝灰岩壁に形成された大小4つの洞窟が調査された。調査の結果、縄文土器（早期・前期・後期・晚期）・弥生土器・石器・土師器などが出土し、特に縄文時代早期の押型文土器や貝殻沈線文系上器などは県内でも数少ない貴重な資料であり、1977（昭和52）年には国指定史跡として登録されている。横堀・小野地区近辺には雄物川により形成された自然堤防上に現集落が展開しており、ここでは小野熊野神社遺跡（66-10）・小野I遺跡（66-11）・小野II遺跡（66-12）が確認されている。さらに下流の三閑地区では堀ノ内遺跡が2003（平成15）年とその翌年に発掘調査が行われている。この遺跡は雄物川に注ぐ龍沢川の旧河道に沿う微高地上に立地しており、調査の結果、多数の土坑・土器埋設遺構・柱穴のほか配石遺構・焼土遺構などが検出され、縄文時代後期から晩期にかけて営まれた墓域であることが判明した。長戸呂遺跡も堀ノ内遺跡と同様、一般国道13号湯沢横手道路の建設に先立ち、2003（平成15）年に調査が行われた遺跡である。この遺跡は寺田川もしくは御返事川の旧河道沿いに立地しており、調査の結果、旧河道に沿って土器埋設遺構や配石遺構などが検出され、縄文時代後期の祭祀関連遺跡とされた。雄物川支流に目を転じると、役内川右岸に九十九沢遺跡（66-27）があるほか、図幅外ではあるが秋の宮山居野で発見された魚形文刻石は通称「鮭石」と呼ばれ、県指定有形文化財となっている。高松川流域では、三ツ村遺跡（66-17）・中山遺跡（7-15）・外ノ目遺跡（7-16）などが確認されている。当遺跡周辺では、現在まで縄文時代遺跡の発掘調査が少なく、その様相は不明確であった。しかし堀ノ内遺跡や長戸呂遺跡の調査で、後期以降に低地が墓地や祭祀域として利用されていくことが判明し、土地利用状況の一端を垣間見ることのできる貴重な情報が追加されたと言えよう。

弥生時代の遺構は確認されていないが、前述の岩井堂洞窟遺跡では、ほぼ完形に復元可能な土器が出土しており、岩陰が生活の場として利用されていた可能性がある。また洞窟内では土師器も出土しており、その出土状態から、古代には祭祀の場として利用されたと考えられている。

古代の遺跡を伴う遺跡は未発見であるが、古代における当地域の動向に関しては『続日本紀』などの文字資料により窺い知ることができる。それによると、奈良時代の天平5（733）年には出羽権が

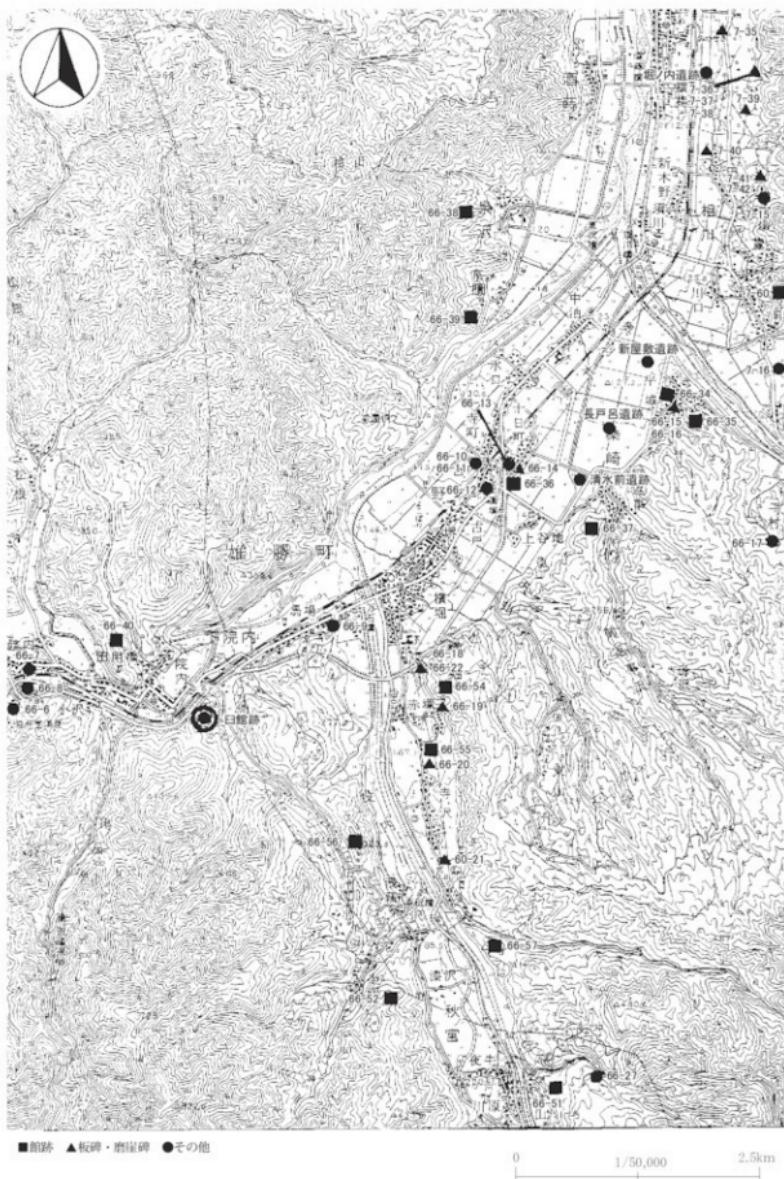
庄内地方から秋田高清水岡に移され、間もなく秋田県内陸部の横手盆地にも律合体制が及び、雄勝郡が建郡されたと記されている。また、天平宝字3（759）年には平鹿郡の建郡と雄勝城築城の際、有屋峠を通じて平戸駅家（山形県最上郡金山町）と雄勝駅家（雄勝郡羽後町）を結ぶ中間の雄勝町にも横河駅家が設けられたと記されている。こうして国府からの通路が整備されるとともに、横手盆地の積極的な開発が進み、多くの集落が形成され、現在の旧雄勝町地区一帯も令制下に入ったことが窺われる。なお、横河駅家が設けられた場所は未だ特定されていないが、横堀の寺沢地区には大伝馬などの地名があり、その名残とも考えられている。

中世以降、当地域は小野寺氏や最上氏の影響下にあり、これらに関係すると目される城館跡が多数存在する。図幅中では、雄物川流域に鶴沼城（66-34）・平城館（66-35）・桐木田館（66-36）・御返事城（66-37）・泉沢館（66-38）・小野城（66-39）・法領館（66-40）・臼館、役内川流域に樋山館（66-51）・影平館（66-52）・草井崎城（66-54）・館堀城（66-55）・浅萩館（66-56）・穴小屋址（66-57）、高松川流域に相川城（7-60）などが確認されている。鶴沼城は奥羽山脈から続く丘陵据部の微高地に立地し、1979（昭和54）年に実施された発掘調査の結果、多数の掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡と、これらを囲む堀跡が検出され、中世後半には平城、江戸時代初期～中期頃には集落として機能していたと考えられている。桐木田館（遺跡）は雄物川とその支流寺田川によって形成された自然堤防上にあり、1980・1981（昭和55・56）年の2か年にわたって調査された。掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・集石遺構・溝跡・堀跡・土橋が検出され、中世前半には竪穴建物群が、後半には方形居館が、近世以降には掘立柱建物跡群が成立していたと考えられる。役内川沿いの河谷低地に立地する館堀城は1999（平成11）年に調査が行われ、堀に囲まれた掘立柱建物跡・竪穴状遺構・火葬墓・溝跡などから、中世の平地居館であることが判明した。なお、雄勝地区の山裾部には板碑が多く分布しており、これらが古代に横河駅と雄勝城を結んでいた駅路を踏襲し、中世に開発された交通路を示すとする意見もある。

中世の当地域における領地支配の変遷は文献資料などから以下のように捉えられている。文治5（1189）年の奥羽合戦の後、雄勝郡は下野国都賀郡に本拠をもつ小野寺氏に与えられた。13世紀後半に雄勝郡に入部したのは庶流の経道で、稲庭を中心とした領地經營に当たり、西馬音内や湯沢に一族を配して惣領的支配体制を固め、孫道有の代には北方の平賀郡・山本郡（後の仙北郡）の一部を領有するに至った。室町時代末期には平鹿郡沼館、次いで横手へと本拠地を移し、永禄年間（1558～1570）には山形の最上地方を支配下に入っていた。しかし天正年間（1573～1592）後半には、逆に最上氏に侵入されることになり、慶長年間（1596～1615）初めには雄勝郡の大部分が最上氏の領地となつた。当領域で発掘された中世遺跡は、その年代観から殆どが小野寺氏の領地支配に関連するものと考えられる。

参考文献

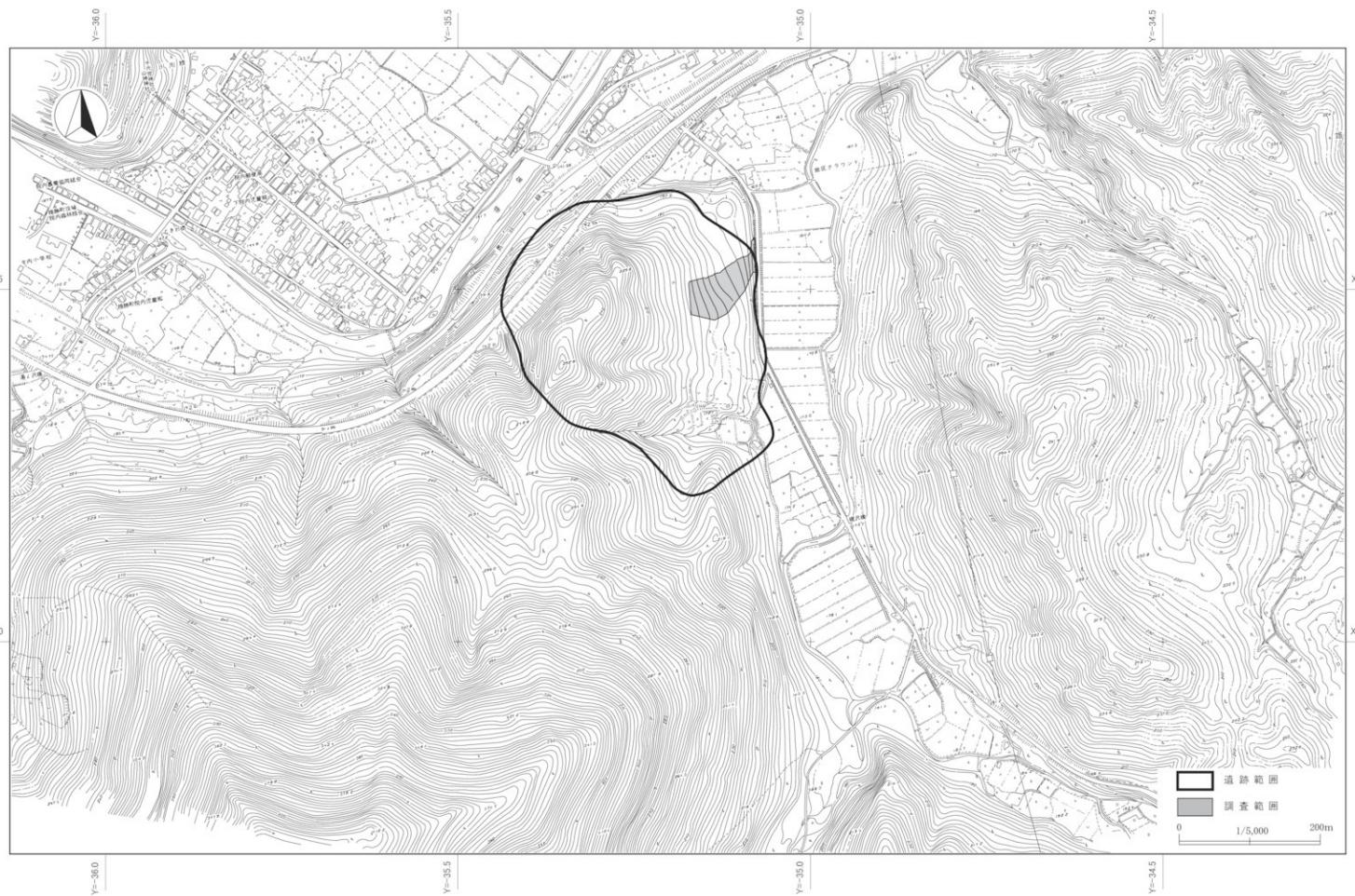
- 秋田県『土地分類基本調査 湯沢』 1979(昭和54)年
- 秋田県教育委員会・雄勝町教育委員会『岩井堂岩陰遺跡発掘調査報告書』秋田県文化財調査報告書第16集 1969(昭和44)年
- 秋田県教育委員会『鶴沼城跡』秋田県文化財調査報告書第73集 1980(昭和55)年
- 秋田県教育委員会『桐木田遺跡』秋田県文化財調査報告書第95集 1982(昭和57)年
- 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(県南版)』1987(昭和62)年
- 秋田県教育委員会『館堀城跡』秋田県文化財調査報告書第320集 2001(平成13)年
- 秋田県教育委員会『秋田県埋蔵文化財センター年報22(平成15年度)』 2004(平成16)年
- 斎藤寅則『湯沢叢書8 羽州街道の変遷』建設省東北建設局湯沢工事事務所 1998(平成10)年
- 山下孫継『岩井堂洞窟 第4洞穴第8次発掘調査報告書』ニュー・サイエンス社 1979(昭和54)年
- 秋田県教育委員会『新屋敷遺跡——一般国道13号湯沢横手道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ—』
- 秋田県文化財調査報告書第389集 2005(平成17)年



第5図 周辺遺跡

第1表 眓館跡の周辺遺跡

番号	遺跡名	所在地	種別	主な遺構・遺物
7-15	中山	湯沢市相川字中山	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石器
7-16	外ノ目	湯沢市相川字新坊	遺物包含地	縄文土器片(後期)、石器、石礫
7-35	立石	湯沢市八反田字八反田	板碑	
7-36	正和5年碑	湯沢市上闇字鍋ケ沢	板碑	種子、月輪に胎蔵界大日(アーンク)
7-37	貞和3年碑	湯沢市上闇字鍋ケ沢	板碑	種子、阿弥陀(キリーグ)
7-38	延文5年碑	湯沢市上闇字鍋ケ沢	板碑	種子、阿弥陀(キリーグ)
7-39	建武元年双式碑	湯沢市相川字岩の沢	板碑	種子、阿弥陀(キリーグ)、蓬台
7-40	貞和4年碑	湯沢市相川字田畠	板碑	種子、积迦如来(バク)、貞和4年
7-41	無紀年碑	湯沢市相川字中山	板碑	種子、阿弥陀(キリーグ)、积迦如来(バク)の2尊
7-42	無紀年碑	湯沢市相川字中山	板碑	種子、阿弥陀三尊(キリーグ、サ・サーク)、蓬台
7-60	相川城	湯沢市相川字古駒山	館跡	
66-6	岩井堂洞窟	湯沢市上院内字岩井堂	洞窟	縄文土器(早期・前期・中期・後期・晚期)、石器、弥生式土器、土器
66-7	釜ノ上I	湯沢市上院内字釜ノ上	遺物包含地	縄文土器片(前期)、石器、搔器、丸石、石甃
66-8	釜ノ上II	湯沢市上院内字釜ノ上	遺物包含地	縄文土器片(前期)、石器
66-9	下馬場	湯沢市下院内字下馬場	遺物包含地	縄文土器片(中期)、フレーク、打製石斧、石鍬
66-10	小野熊野神社	湯沢市小野字小野	遺物包含地	縄文土器片(中期)
66-11	小野I	湯沢市小野字小野	遺物包含地	縄文土器片、石器、石斧
66-12	小野II	湯沢市小野字小野	遺物包含地	縄文土器片(前期)
66-13	桐木田の井戸	湯沢市小野字桐木田	史跡	井戸
66-14	迹っこ石	湯沢市小野字桐木田	板碑	板碑3基
66-15	桐善寺紀年碑	湯沢市桑ヶ崎字平城	板碑	板碑3基
66-16	無紀年碑	湯沢市桑ヶ崎字平城	板碑	阿弥陀、金剛界大日
66-17	三ツ村	湯沢市桑ヶ崎字蟹賀	遺物包含地	石器
66-18	嘉慶元年碑	湯沢市横彌字板橋	板碑	金剛界大日、胎蔵界大日
66-19	貞和碑	湯沢市横彌字鶴屋	板碑	板碑1基
66-20	嘉慶2年碑	湯沢市寺沢字脛ノ内	板碑	嘉慶2年丁卯3月
66-21	応永7年碑	湯沢市寺沢字田中	板碑	梵字、阿弥陀三尊
66-22	磨崖碑	湯沢市横彌字板橋	磨崖碑	[県指定史跡]
66-27	十九沢	湯沢市秋ノ宮字九十九沢	遺物包含地	
66-34	鶴沼城	湯沢市桑ヶ崎字平城	館跡	擬立柱建物跡、井戸跡、土坑、堀跡、溝跡、陶磁器類、漆器、木製品、石製品
66-35	平城館	湯沢市桑ヶ崎字平城	館跡	
66-36	桐木田館	湯沢市小野字桐木田	館跡	擬立柱建物跡、豊穴状遺構、土坑、堀跡、土塙、溝跡、陶磁器類、石製品
66-37	御返事城	湯沢市桑ヶ崎字御返事	館跡	
66-38	泉沢館	湯沢市大字泉沢	館跡	
66-39	小野城	湯沢市泉沢字古館	館跡	
66-40	法宿館	湯沢市下院内字館山	館跡	
66-51	祇山館	湯沢市秋ノ宮字九十九沢	館跡	
66-52	影平館	湯沢市秋ノ宮字影平	館跡	
66-54	草井崎城	湯沢市横彌字鶴ノ沢	館跡	
66-55	館脳城	湯沢市寺沢字館脳	館跡	擬立柱建物跡、豊穴状遺構、土坑、堀跡、溝跡、陶磁器類、漆器、木製品、石製品、鉢貝
66-56	浅萩館	湯沢市寺沢字浅萩館	館跡	
66-57	穴小屋址	湯沢市寺沢字黒森	館跡	
	脣ノ内	湯沢市上闇字脣ノ内	遺物包含地	土器埋設遺構、配石遺構、土坑、燒土遺構、縄文土器(後期・晚期)、土製品、石器、石製品
	新屋敷	湯沢市桑ヶ崎字荒星敷	居館跡	擬立柱建物跡、豊穴状遺構、柱穴列、溝跡、井戸跡、柱穴、中国・国産陶磁器、須恵器系中世陶器、かわらけ
	長戸呂	湯沢市桑ヶ崎字長戸呂	遺物包含地	土器埋設遺構、配石遺構、擬立柱建物跡、縄文土器片(中期・後期)、石器
	清水前	湯沢市桑ヶ崎字清水前	遺物包含地	土器



第6図 臼館跡周辺地形図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

白館跡はJR院内駅から東約1kmの下院内地区の、雄物川とその支流大槻沢川の合流点近くに所在する。ここは標高約180～250mの出羽山地を形成する鳥帽子内山地の北端で、表層地質が酸性軽石凝灰岩の丘陵地に立地している。丘陵の頂上には南北に連なる曲輪が現況の地形でも確認できることから、これまで中世の城跡と考えられてきた。今回の調査区は遺跡の東端、標高176～193mの丘陵裾部に当たる。調査の結果、中世の遺構は見つからなかったが、縄文時代前期・後期・晩期の遺物とともに、竪穴建物跡・掘立柱建物跡・土坑・フラスコ状土坑などの遺構が見つかった。

調査区の地形はその大部分が東に向かって下る急な斜面となっているが、中央部には沢が入り込み、沢に沿って幅の狭い平坦面が北東に延びている。この狭い平坦面で、縄文時代前期と考えられる竪穴建物跡が1棟見つかった。後世に半分ほど削られているが、本来は直径6mほどの円形であったと推定される。竪穴建物跡の中に炉は見つかっていないが、屋根を支えるための柱を据えた柱穴を確認した。平坦面から斜面にかけては、食料などを蓄えるための貯蔵穴と考えられている、底が広く口のすぼまったフラスコ状土坑が見つかっている。

平坦面沿いの沢では縄文時代の土器や石器が多量に出土している。出土した土器の大半は縄文時代前期のもので、この時期に遺跡が活発に利用されていたことを示している。遺物の中で特に注目されるのが磨製石斧の未製品である。磨製石斧の完成品は少なく、上手く出来たものは遺跡の外に持ち出されたと考えられる。その他、石籠や石匙などの材料となる剥片とその原石が集中していた土坑も1基（SK100）見つかっている。白館跡の縄文人たちが石器作りと深く関わりながら暮らしていたことが窺われる。

平坦面では、縄文時代前期の他に後・晩期の遺構と遺物も僅かに確認されている。掘立柱建物跡は6本の柱が亀甲形に並んだもので、1棟のみ見つかっている。詳しい時期は分からぬが、秋田県内の縄文時代後・晩期の遺跡で発見される建物と柱の並びが似ている。掘立柱建物跡と同じ場所にある土坑の中からは、完形に近い後期中頃の土器が出土したことから土坑墓と考えられる。

今回の調査地点は、縄文時代前期・中期・後期・晩期に亘って利用されていたことが分かった。

第2節 調査の方法

遺構精査や表土以下の掘り下げは移植笠・スコップなどを使用して人力で作業を行った。調査方法は、計画的な調査計画立案と遺構・遺物の検出地点を把握するため、グリッド法を採用した。設定方法は、調査区付近に設置されていた測量基準点から国家座標第X系（世界測地系）に整合する任意の点（X=-105.50、Y=-35.10）を導き出し、これをグリッド原点MA50とし、これを通る第X系座標北を求め、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西南北に沿って4×4mのグリッドを設定し、東西方向には東から西へ4mごとに「L F・L G・・・・L T・

MA・MB・・・MS・MT」という2文字のアルファベットを、南北方向には南から北へ4mごとに「39・40・・・48・49・50・・・69・70」という2桁の数字を与え、このアルファベットと数字の組み合わせからなる記号を各グリッドの名称とした。なお、グリッド杭は4m間隔の東西基線と南北基線の交点全てに打設し、前記のグリッド名称を南東隅の杭に記入した。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で行った。平面図・断面図の縮尺は1/20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1/10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロ、リバーサル、カラーフィルム及び、デジタルカメラを使用した。遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入したラベルとともに取り上げた。遺構内出土のものは、適宜出土地点の位置を記録した。

第3節 調査の経過

調査は6月15日から10月30日まで行った。

・第1週 6月15日（火）～6月18日（金）資材搬入とコンテナハウス周辺の環境整備を行った後、調査区内の環境整備を行い、調査を開始した。調査区内の環境整備は草刈りと枝葉の除去で、完了後に調査区現況の写真撮影を行った。調査は先ず埋め戻された調査確認トレンチを掘り上げ、他にもトレンチを追加設定して掘り下げ、調査区内全体の堆積状況の把握に努めた。調査区全域にわたって人工改変による段状地形が認められるため、簡易な現況地形図の作成も併せて行った。

・第2週 6月21日（月）～6月25日（金）

週前半にベルトコンベアの搬入及び設置を完了し、先週に引き続いて確認調査トレンチと追加トレンチの掘り下げを行い、トレンチ排水を搬出した。調査区東側ではトレンチ掘削により堆積状況を確認できたため、調査区東側境界から西に向かって表土除去を開始した。

・第3週 6月28日（月）～7月2日（金）

先週、調査区東側境界から西に向かって表土除去を開始したが、今週から南東方向にも向かって表土除去を行った。

人工的な段状地形簡易作図のレベリングを終了した。

東側斜面の基本土層断面図作成を行った。

・第4週 7月5日（月）～7月9日（金）

調査区北東側から南西側に向かって表土除去を行った。

表土除去が終了した所は、ほどなく遺物包含層（Ⅲ層）や地山面まで掘り下げ、遺構検出と遺構精査に入った。

南東側斜面の基本土層断面図作成は終了した。

・第5週 7月12日（月）～7月16日（金）

調査区北東側から南西側に向かって表土除去を行っている。遺構確認調査で遺構・遺物が多いと報告されている、中央部付近の最も低くなっている部分にも一部入った。

表土除去が終了した所は、ほどなく遺物包含層（Ⅲ層）や地山面まで掘り下げ、遺構検出と遺構精査を行った。

・第6週 7月20日（火）～7月23日（金）

調査区北東側から南西側に向かって粗掘を進めている。遺構・遺物が多いと予想されている、最も低い中央部付近の粗掘にも先週から一部入った。ここは表土～地山まで1.5mほどもある所が多く、第Ⅲ層の遺物包含層がよく残った。

遺構精査は北東側～東側で全面的に進めた。

・第7週 7月26日（月）～7月30日（金）

今週は粗掘りと遺構精査を併行して行った。

粗掘り調査区南側平坦面については完了し、中央部沢地付近を先週から継続して進めた。

遺構精査は北東側の急斜面で検出したフ拉斯コ状土坑群、南東側平坦面で検出した土坑群及び柱穴様ピット群を中心に進めた。

・第8週 8月2日（月）～8月6日（金）

中央部沢地付近の粗掘りと遺物包含層の掘り下げ、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地付近では遺物包含層の掘り下げを進め、良好な出土状況を示す遺物のみ、写真撮影と実測を行った。

遺構精査は、北東側の急斜面で検出したフ拉斯コ状土坑群、南側平坦面で検出した土坑群及び柱穴様ピット群を中心に進めた。

・第9週 8月9日（月）・8月10日（火）

中央部沢地付近の粗掘りと遺物包含層の掘り下げ、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地ではMK46区付近の沢頭部で遺物包含層が良好に残存していることを確認した。また他の部分では遺物包含層の掘り下げを継続して進めた。

遺構精査は北東側の急斜面で検出したフ拉斯コ状土坑群と南側平坦面で検出した土坑群及び柱穴ピット群について完了し、中央部沢地付近で新たに検出した遺構の精査を進めた。

・第10週 8月18日（水）～8月20日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、南側平坦面の遺構精査を併行して行った。

中央部沢地では粗掘りをほぼ終了し、土層断面図の作成と遺物包含層の掘り下げ、遺物の取り上げを継続した。

遺構精査は南側平坦面及び中央部沢地で新たに検出したものについて、作業を継続して進めた。

・第11週 8月23日（月）～8月27日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、南側平坦面の遺構精査、西側斜面で粗掘りと遺構検出を併行して行った。

中央部沢地では、遺物包含層残存部の土層断面図作成をほぼ終了し、土層ベルトの取り外しと遺物包含層の掘り下げを進めた。

遺構精査は中央部沢地検出分については完了し、南側平坦面において作業を継続した。

西側斜面では新たに土坑2基を検出し、精査を進めた。

・第12週 8月30日（月）～9月3日（金）

中央部沢地付近の遺物包含層の掘り下げと、西側斜面の遺構精査、西側斜面で粗掘りと遺構検出を併行した。中央部沢地では、遺物包含層残存部の土層断面図作成を終了した土層ベルトの取り外しと

遺物包含層の掘り下げを進めた。

遺構精査は南側平坦面において作業を継続している。西側斜面では土坑2基の精査を継続した。

2日、空中写真撮影を行う。

- ・第13週 9月6日（月）～9月11日（土）

西側斜面ではベルトコンベアを再設置して粗掘りを進め、同時に遺構確認作業を行った。今のところ遺構は確認されておらず、出土遺物も非常に少ない。

遺構精査は、南側平坦面で検出したS I 95竪穴建物跡及び西側斜面で検出したSK100土坑を除き、精査を完了した。

11日には遺跡見学会を行い、雨天の中116名の参加者を得た。

- ・第14週 9月13日（月）～9月17日（金）

西側斜面において粗掘りと遺構確認作業を行い、全て終了した。西側斜面で新たに確認した遺構は土坑1基のみである。

その他、遺構が集中する南側平坦面周辺を中心に、再度遺構確認を行い、新たに土坑3基、フ拉斯コ状土坑1基を検出した。残りの遺構と併せて精査を進めた。

- ・第15週 9月21日（月）～9月24日（月）

現場及び事務所周辺の後片付けを行い、大方の作業は終了した。この他、残りの遺構精査と地形測量を継続して進めた。

- ・第16週 9月27日（月）～9月30日（木）

先週南西側平坦面で新たに検出した焼土遺構群と西側斜面及び中央沢部で継続していた遺構精査、調査区全体の地形測量を完了し、調査を終了した。

9月29日には現場引き渡しを行い、30日には資材運搬などの撤収作業を行った。

第4節 整理作業の経過と方法

遺構関係の整理作業では、遺構調査段階で作製した原図をもとに、平面図・断面図を組み合わせて製図、レイアウトを行い、遺構図は縮尺を1/40、焼土遺構は縮尺を1/20で図示した。版面に収まらないものは、例外的に別縮尺で図示している。また、遺構内出土遺物については、出土遺構との関連性を重視する意味で極力図示した。遺物関係では、遺物の分類に当たって、各遺物全点観察を行い、種別や器種に漏れが生じないように注意した。土器については、可能な限り推定口径を復元して実測を行った。また、土器破片の分類では、胎土・焼成・原体・調整の種類などからできるだけ同一個体を抜き出し、別個体と思われる資料を報告書掲載資料として抽出した。

第4章 調査の記録

第1節 基本層序

今回の調査区は遺跡の東端、標高176～193mの丘陵裾部に当たる。

調査区の地形はその大部分が北東に向かって下る急な斜面となっているが、中央部には沢が入り込み、沢に沿って幅の狭い平坦面が北東に延びている。調査当時の状況は植栽された杉が伐採されて根が多く残っていた。現代には畑地として利用されていたようである。斜面上部には段状地形が残っており、当初は館跡に伴うものかと想定したが、出土遺物などから近・現代の盛土と判明した。

基本土層図作成用のトレーニングは、遺跡確認調査時のトレーニング調査部分、地形や測量用グリッドの方向も勘案しながら、「基本土層A」ラインから「基本土層J」ラインまで設定し、観察・図化した（第8図）。今回の報告では紙数の関係もあり部分的に限定して、遺跡の基本土層全体が分かる平坦面沿いの沢中央付近の一部について、挿図・土層注記表を掲載した（第9・10図）。

沢では縄文時代の土器や石器類が多量に出土している。出土した土器の大半は縄文時代前期のものである。その他、沢上面では石鏃や石匙などの材料となる剥片とその原石が集中して見つかった土坑も1基（SK100）見つかっている。以下、沢や平坦面の層名、土色、層厚、主な特徴について順番に記述し、詳細は挿図・土層注記表にゆずる。

「基本土層C・H」ラインのIa層は暗褐色土で、層厚は3～40cmの表土である。Ib層は地山由来のにぶい黄褐色土で、層厚は2～80cmである。段状地形の肩部ほど厚い事から、比較的新しい時期の盛り土の可能性もある。Ia層は黒褐色土で、層厚は2～10cm、Ib層は黒褐色土で、層厚は2～24cmである。Ia・Ib層からは近世以降の陶磁器が出土している。

IIc層は黒褐色土で、層厚は2～14cmである。この層は科学分析の結果、915年に十和田カルデラから噴出した十和田aテフラ（火山灰－「To-a」）であることが判明した。

IIIa層は黒褐色土で、層厚は2～16cmである。IIIb層はここでは見られない。

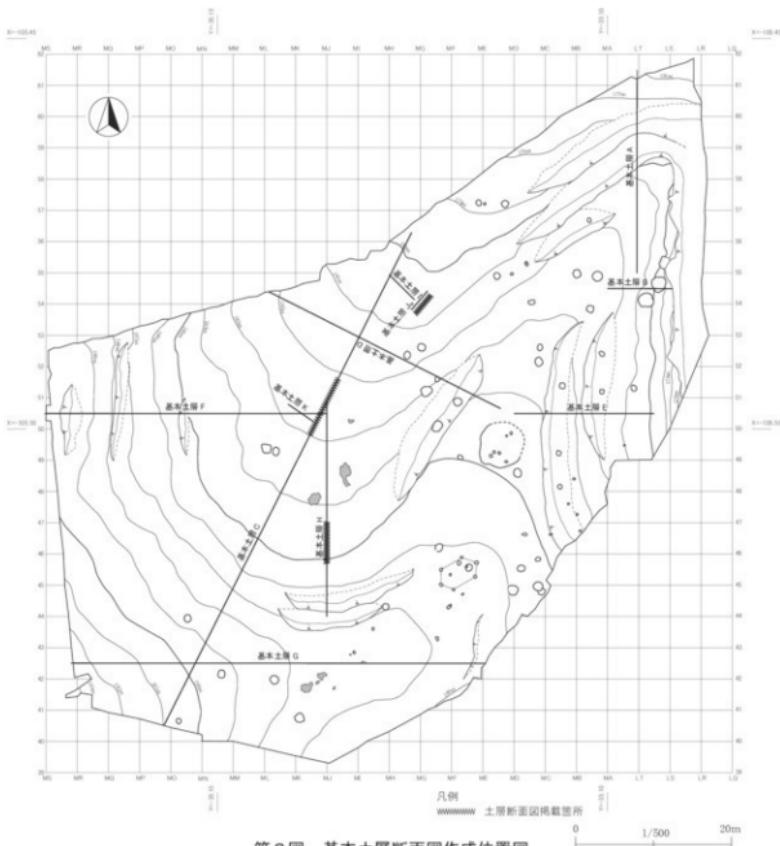
IIIc層は黒褐色土で、層厚は2～26cmの縄文時代の遺物包含層である。沢のMG53グリッドやその周辺で縄文時代前期の完形品や完形品に近い土器（第22・23図、図版8）や石器類が多く出土している。IIId層は黒褐色土で、層厚4～20cmである。IIIc層と同じ縄文時代の遺物包含層である。この層でも前期の土器や石器類を含むが、IIIc層よりは少ない。

IVa層は暗黒褐色土で、層厚4～16cmの地山漸移層である。IVb層は黄褐色土で地山である。なお、IIIb層は「基本土層J」ラインに見られ、褐色土で、層厚は4～20cmである。

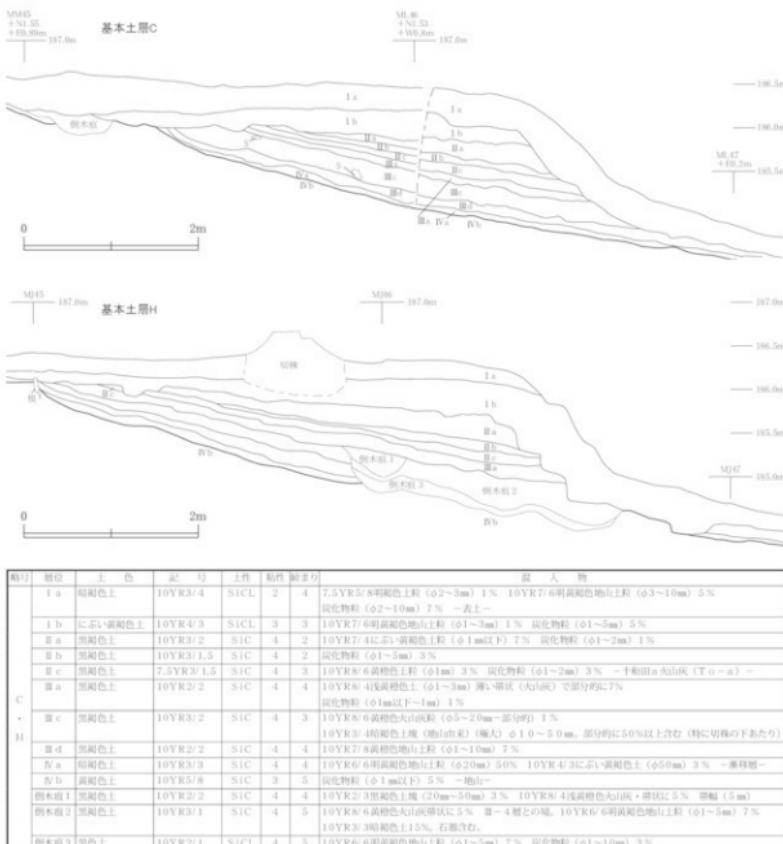
平坦面では縄文時代前期と考えられる竪穴建物跡が1軒、他に縄文時代後期と考えられる掘立柱建物跡1棟と遺物もわずかに確認されている。また、この遺構とほぼ同位置にある土坑（SK01）からは、後期中頃の土器が出土している。ここでは、表土が層厚10～20cm前後と薄い区域が目立ち、表土下で直ぐ遺構を検出した所もある。肩部は表土下の途中の基本層位が欠落し、IIIc層、IIId層、IVa層が残りIVb層へと続く。表土は最大80cmと大変厚い所が多く、近・現代の盛り土と推定される。



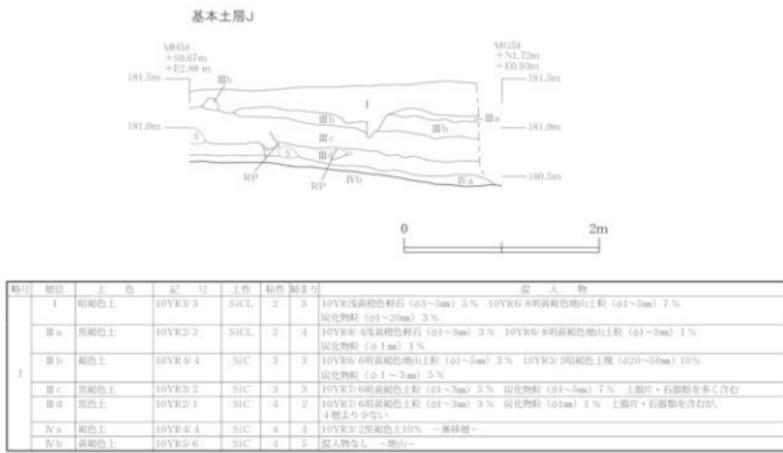
第7図 グリッド配置及び現況地形図



第8図 基本土層断面図作成位置図



第9図 基本土層断面図（1）

**土層注記凡例**

- ※1 「土色」・「土性」の表記は、新地盤學上色解（農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色解監修、2003）による。
※2 「粘性」・「密まり」の表記は、複合いづれか弱い方弱い方から1～5の数字を用いて示した。

第10図 基本土層断面図（2）

第2節 検出遺構と出土遺物

今回の調査では縄文時代の竪穴建物跡、掘立柱建物跡、土坑、フラスコ状土坑、焼土遺構、柱穴様ピットを検出した。遺構の土層断面図の土層注記は第3・4表に掲載した。遺物は出土状況・点数や掲載点数を記した。詳細は観察表に明記している。

1 竪穴建物跡

S 195 竪穴建物跡（第11図、図版10・11）

M C48～50グリッド、MD48～50グリッド、ME48・49グリッドに位置する。I層を除去後、Ⅲ層面において黒褐色の土が見られた。当初、Ⅲ層と考え掘り下げていたが、途中、楕円形のプランが確認され、竪穴建物跡の埋土と認定した。確認時においては竪穴建物跡内の埋土は4分の1程度しか残存していなかった。そのため、遺構の北東側半分のラインは推定のものである。

規模は長径推定6.40m、短径5.86mの楕円形を呈すると考えられる。確認面からの深さは残存部分では0.44mである。底面は、ほぼ平坦であり南北方向に緩やかに傾斜している。壁は立ち上がりが明瞭で、緩やかで直線的に立ち上がる。埋土は黒褐色土の有無により2層に分層した。2層は炭化物が多く見られ、石皿や磨製石斧の未製品が混入していたことなどから人為的に埋め戻した土である。1層は2層の埋め戻し後の窪んだところに自然堆積したものと考えられる。柱穴は6基検出したが、規則的な配置は見られなかった。P 6以外の5基は床面からの深さが16～18cmで、平面や形状もまたほぼ同じ規模であった。土層はP 1・5においては断面の左右で黒褐色の柱痕と埋め戻した明黄色の2層に分かれた。P 2～4は中心に暗褐色の柱痕があって、左右に明黄色の埋め戻し土が入っていた。また、P 6は確認調査段階で完掘していたため土層を確認出来なかった。

遺物は1層から土器片1点・剥片4点・礫1点が出土した。2層からは土器片8点・剥片39点・砾石器1点・石皿5点（図版10・11）・磨製石斧の未製品1点（図版10・11）が出土した。石皿と石皿の破片・磨製石斧の未製品は、建物跡の壁に沿うように並んでいた。土器は2点を図示した（第25図4・5、図版21）。4・5は2層から出土した。いずれも胴部で、焼成は硬質である。4は細く浅い斜位の沈線を、5は撚糸文を施している土器である。石器は磨製石斧の未製品（A 1類）1点（第60図S 61、図版24）、敲磨器類（B 4類）1点（第60図S 62、図版24）、敲磨器類（D 1類）1点（第60図S 63、図版24）、石皿（A類）5点（第61図S 64～67、第62図S 68）を図示した。遺構の構築時期は出土した遺物の年代から縄文前期中葉と考えられる。

2 掘立柱建物跡

S B91 掘立柱建物跡（第12図、図版3・9）

M E44・45グリッド、M F44・45グリッドにかけて位置する。I層除去後、IV層（地山）上面にてSK P38とSK P40の円形プランを確認し、柱穴であることが判明した。その後、その柱穴周辺のIV層（地山）面を10cm程度下げたところ、SK P60、SK P81の円形プランを確認した。さらに周辺のIV層（地山）面を数cm下げたところSK P82の円形プランとSK P83の不整楕円形のプランを確認し、亀甲形に6本の柱穴が並んだため、掘立柱建物跡とすることにしたものである。主軸方位は北

から56°東へ偏する。桁行方向の幅は約3m、棟方向の規模は約5.4mである。掘立柱建物跡の内側からは、SK01・SK80・SKP10・SKP45が確認されているが、新旧関係は不明である。

確認された柱穴の規模は、直径（長径）0.34～0.49m、深さは0.45～0.82mで、底面標高は185.58～186.0mであった。SKP40とSKP60では白色の明確な柱当りの痕跡がみられた。底面はどれもほぼ平坦で、壁の立ち上がりは明瞭で直線的に立ち上がっている。埋土は全ての柱穴で埋土の色や土層の粘性、締まり具合、混入物の割合などから2層～4層に分層することができた。また基本的には柱痕の片側または両側に、地山由来の明黄色の埋め戻しと考えられる土が堆積している。SKP83においては、柱の抜き取り穴と考えられる掘込みがあった。

遺物はSKP40から土器片3点、SKP82から土器片2点が出土している。このうちSKP40出土の土器2点を図示（第29図50・51、図版22）した。他は風化が激しく図示できなかった。50は口縁部で無文の土器、51は胴部に地文が縄文で楕円形の磨消縄文を施文する土器である。遺構の構築時期は土器から縄文時代後期と考えられる。

3 土坑

SK01土坑（第13図、図版3）

ME45グリッドに位置する。I層を除去後、IV層（地山）上面において、黒色の広がりを確認した。当初は倒木痕と考えていたが、黒色土の南側で土器片2点が確認され精査をすると円形のプランが確認されたため、土坑と判断した。SKP10と遺構の北西側で重複しており、SKP10がSK01より新しい。規模は長径0.95m、短径0.86mの円形を呈する。南西側で下端がやや上端より外側に出ている。確認面からの深さは0.34mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭で壁は直線的に立ち上がる。埋土は土層の色・混入物の種類・混入割合から3層に分層した。堆積の状態や遺物の出土状況からみて、土坑を掘り、3層（地山由来の土が少ない）を少し埋め、礫や土器をその上に配置し、それと一緒に2層（炭化物混じりの土）を埋め、最後に2層の土が沈降したところに1層（地山由来の土が多い）が自然堆積したと推測される。

埋土からは2～3層を中心に土器片139点・石皿や凹石などの礫4点が出土した。土器は4点を図示した（第24図1・2、第25図6・7、図版21）。石器は敲磨器類（D1類）1点（第62図S69、図版24）、石皿（A類）1点（第62図S70）を図示した。出土土器の1は3単位の波状口縁をもつ深鉢形土器で、底部から口縁部にかけて、外傾しながら直線的に立ち上がる器形である。口縁の波頂部中央にはそれぞれ円形の「ボタン」状突起を貼付している。胴部文様は口縁部下に斜縄文を施文後、横位に5条の沈線で文様帯を構成し、それぞれの「ボタン」状突起下の文様帯を縦位の「ノ」字状沈線で区画する。文様帯の下は無文である。底部外面は網代底となっている。2は粗製の深鉢形土器である。底部から胴部上半にかけて外傾しながら直線的に立ち上がり、上半から口縁部までは緩く外傾しながらほぼ直線的に立ち上がる。胴部上半に2箇所補修孔が残る。底外面は網代底となっている。6・7は斜縄文を施した波状口縁の深鉢形土器である。口唇部は平滑で、焼成は良く、硬質で、同一個体である。土器の属する時期は縄文時代後期中葉である。また、潰れた土器の上に大きい石皿などの礫を配置して土を埋め戻している点から考えて、この遺構は土坑墓と考えられる。

S K03土坑（第14図）

M B49グリッドに位置する。I層を除去後、IV層（地山）面にて暗褐色土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.60m、短径0.55mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.19mで、底面標高は183.37mである。底面は緩やかに湾曲しており、壁も緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物や地山粒を少量含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S K05土坑（第14図）

M B48グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて褐色土の楕円形プランを確認した。規模は長径0.62m、短径0.56mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.10mで、底面標高は183.55mである。底面は西側が一段窪んでおり、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒を少量含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S K12土坑（第14図、図版12）

M C48グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）上面にて、黒褐色の円形プランを確認した。規模は長径1.13m、短径0.97mの円形を呈する。確認面からの深さは0.58mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭である。壁は直線的に比較的急角度で立ち上がる。埋土は全体的に黒褐色土ではあるが、IV層（地山）由来の土の混入割合などから2層に分層した。

遺物は1層から土器片7点・石器剥片2点が出土した。土器は4点を図示した（第25図8～11、図版21）。8は鉢形土器の口縁部で、口縁部内外に3条の沈線を巡らし、口唇部に刻目を施す。地文は斜縄文で、内外にススが厚く残る。縄文時代晩期末葉の上器である。9は口縁部片で、地文、斜縄文である。横位の沈線と縦位の「ノ」字状沈線を施し、口縁部上端は無文で、折り返し口縁風に肥厚する縄文時代後期中葉の上器である。10は地文、斜縄文で、縦位の「ノ」字状の沈線を施すする土器である。11は縦位、もしくは斜位に大変細く浅い沈線を施す底部付近の土器である。帰属時期は出土土器から縄文時代晩期末葉である。

S K14土坑（第14図）

MA51グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にてにぶい黄褐色の方形プランを確認した。規模は長径0.56m、短径0.52mの方形を呈する。確認面からの深さは0.06mと極めて浅く、底面標高は181.74mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒を多量に含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S K15土坑（第14図）

MA52グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて黒褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.73m、短径0.54mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.11mで、底面標高は181.87mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒を少量含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剥片1点が出土したので縄文時代と思われるが、時期の判断が出来る遺物が出土しなかったため、詳しい時期は不明である。

S K22土坑（第14図、図版12）

M C 45グリッドに位置する。Ⅲ層除去後、Ⅳ層（地山）上面にて、暗褐色の楕円形のプランを確認した。規模は長径0.69m、短径0.52mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面は2段底になっており、平坦な底面の中央部のやや北東側が窪んでいる。壁は立ち上がりが明瞭で、南西側では直線的に比較的急角度に立ち上がり、北東側では直線的に緩やかに立ち上がる。埋土は上層の色と炭化物の混入割合により2層に分層した。1層には炭化物が比較的多く混入していた。

埋土中から縄文土器が1点出土した（第25図12、図版21）。細かい縄文を施し、内外とも黒色で、器厚が5mmと薄いことから縄文時代晚期に属すると判断される。

S K33土坑（第14図、図版12・15）

M C 44・45グリッドの境界に位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）上面にて、褐色の円形プランを確認した。当初は柱穴として調査していたが、サブトレンドを設定して掘り下げたところ、プランが広がり2層に分かれることが判明し、土坑であると判断した。SK78と重複しており、SK33がSK78より新しい。

規模は長径1.21m、短径1.13mの円形を呈する。確認面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦で、立ち上がりは明瞭で、壁は比較的急角度に立ち上がる。埋土は土色から2層に分層した。1層は比較的暗い褐色土で、2層は比較的明るい褐色土が主な埋土となっている。分層線が確認面・底面に対して斜めに傾斜して入っていることから、一括埋め戻しと考えられる2層を一度掘り返し、その後に1層を埋め戻したと推測できる。

埋土から土器片12点・石器の剥片17点が出土した。土器は2点を図示した（第25図13・14、図版21）。13は地文が無文で、浅い横位に沈線を格子目状に施し、口縁部を平滑に仕上げている土器である。縄文時代後期に属すると推定される。14は太めの撲糸文を施し、色調はにぶい黄橙色で、器厚は10mmとやや厚いことから、縄文時代中期に属すると推定される。以上のことから本遺構の構築時期は縄文時代後期と推定される。

S K39土坑（第14図、図版13）

M D 55グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の不整円形プランを確認した。規模は長径0.86m、短径0.84mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.23mで、底面標高は181.16mである。底面はほぼ平坦で、壁は北西側がほぼ垂直に、南東側は緩やかに湾曲して立ち上がる。埋土はⅣ層土の混入割合から、2層に分層した。2層はⅣ層土が多く混入している。また、斜堆積になっているため、自然埋土の可能性がある。

埋土から石器の剥片が2点出土した。縄文時代と思われるが、詳しい時期は不明である。

S K41土坑（第15図、図版13）

M A 54・55グリッドに位置する。I層除去後、Ⅳ層（地山）にてにぶい黄褐色の円形プランを確認した。規模は長径1.27m、短径1.26mの円形を呈する。確認面からの深さは0.25mで、底面標高は182.22mである。底面はほぼ平坦であるが、石皿（S 2）が置かれていたところのみ少し窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒の混入割合から3層に分層した。1層が最も多く混入しており、3層は壁面崩落土と考えられ、自然に埋没した可能性がある。

埋土から石器の剥片1点、礫石器1点（S 1）が出土した。他にS 2として取り上げた石器は石皿

で、土坑底面から出土した。礫石器は敲磨器類（D 1類）1点（第63図S72、図版24）、石皿（A類）1点（重さ30kg－第63図S71）である。石皿と敲磨器類の出土状況から2種類の石器はセットと考えられることから土坑墓と考えられる。縄文時代と考えられるが、詳細な時期の判断が出来る遺物が出土しなかつたため、その帰属時期は不明である。

S K42土坑（第14図）

M A53グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径0.90m、短径0.87mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.11mで、底面標高は182.48mである。底面は僅かに湾曲している。壁は東側は極めて緩やかに立ち上がるが、西側は緩やかに立ち上がる。埋土は混入物から2層に分層した。1層は炭化物粒や地山粒を含むが、2層は混入物を含まない。また、堆積状況から自然堆積である可能性がある。

埋土中から遺物は出土しなかつたため、帰属時期は不明である。

S K43土坑（第15図、図版13）

M B54・55グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて黄褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径1.02m、短径0.94mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.14mで、底面標高は182.40mである。底面はほぼ平坦であるが、中央部が僅かに窪んでいる。壁は北西側は比較的急角度で立ち上がり、南東側は極めて緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から剝片1点、繩文土器1点が出土した。土器を1点を図示した（第26図15、図版21）。橋状把手部分で、口縁直下には口縁に沿って横位に3条の複節縄文の側面圧痕、その下には楕円形の区画をした後、全面に縄文を施している。色はにぶい黄橙色で、器厚は10mm前後と厚く、硬質であることから、縄文時代中期後葉と推定される。

S K51土坑（第14図）

M A56グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて褐色の楕円形のプランを確認した。規模は長径0.58m、短径0.47mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.16mで、底面標高は181.49mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剝片1点が出土した。縄文時代と考えられるが、詳細な時期の判断が出来る遺物が出土していないため、その帰属時期は不明である。

S K61土坑（第15図、図版14）

M C53・54グリッドに位置する。I層除去中に土器のまとまりを確認した。その後、土器の周辺を精査したところ、暗褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.85m、短径0.55mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.22mで、底面標高は180.62mである。底面は西側はほぼ平坦であるが、東側が一段窪んでいる。壁はいずれも緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から土器2点、石器の剝片1点が出土した。土器を2点図示した（第26図16・18、図版21）。16は細かい縄文を施す薄い土器である。18は大きめの深鉢形土器で、全面に縄文を施している。これら土器の特徴から、遺構の構築時期は縄文時代晚期と推定される。

S K62土坑（第15図）

L T51グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ中に石核、石皿が出土した。周辺を精査したところ、にぶい黄褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.84m、短径0.69mの不整楕円形である。確認面からの深さは0.16mで、底面標高は180.66mである。底面は南側が僅かに窪んでおり、さらに壁が立ち上がる直前でも一段窪んでいる。壁は北側が緩やかに立ち上がるが、南側はやや緩やかに立ち上がっている。埋土は地山粒を含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から、石器の剥片1点、残核1点、礫石器（石皿）1点が出土している。石器は残核（第30図S 1、図版22）、石皿（A類—第63図S 73）を図示した。埋土中に石皿や石核が含まれていることから土坑墓の可能性が考えられる。縄文時代と思われるが、詳しい時期の判断が出来る土器が出土していないので、その詳細な時期は不明である。

S K63土坑（第16図、図版14）

M E49グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.68m、短径0.58mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦であるが、南から北にかけて緩やかに傾斜し、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物粒を含む單一層で、一括埋め戻し土と考えられる。

埋土中から縄文土器63点と不定形石器を含む剥片3点が出土した。土器は東側に集中して分布している。遺物がまとまって出土していること、埋土が單層であることから一括して埋め戻した土坑墓の可能性が考えられる。剥片石器は削器1点を図示した（第31図S 6、図版23）。土器は2点を図示した（第26図17、第27図20、図版21）。20はやや薄手の深鉢形土器で、胴部上半に斜位の縄文と口縁部に沿って3条の刺突列を施文する土器である。17は底部付近の破片で、20と同一個体と思われる。遺構の構築時期はこれら土器の特徴から縄文時代後期中葉と推定される。

S K64土坑（第15図）

M F46グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）上面にて、黄褐色の円形プランを確認した。しかし、南西側は切株の搅乱が入っているため、その部分の遺構の輪郭は推定のものとなっている。規模は長径1.06m、短径0.90mの円形を呈する。確認面からの深さは0.22mである。底面はほぼ平坦であるが、やや西側へ傾斜している。立ち上がりは明瞭で西側は緩やかに直線的に立ち上がり、東側は比較的急角度に湾曲しながら立ち上がっている。埋土は混入物の混入割合によって2層に分層した。2層は炭化物が比較的多く、IV層（地山）由来の土の埋め戻しと推測される。また1層には僅かではあるが、灰白色の砂質土が混入していた。

埋土からは石器剥片や石器9点が出土した。そのうち籠状石器1点を図示した（第32図S 7、図版23）。遺構の構築時期はこれらの遺物から縄文時代と考えられる。

S K67土坑（第15図、図版14）

M H44グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）上面にて、褐色の隅丸方形のプランを確認した。規模は長径0.90m、短径0.82mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.24mである。底面はほぼ平坦であるが、南西側でやや傾斜している。壁は明瞭で、西側では直線的に比較的急角度に立ち上がり、東側では湾曲しながらやや急角度で立ちあがる。埋土は地山粒を含む單一層で遺物と一緒に埋め戻されたものと推定される。埋土から土器8点・剥片1点・礫1点（S 1）が出土した。石

器は敲磨器類（C 1類）1点を図示した（第64図S 74、図版24）。土器は1点を図示した（第26図19、図版21）。深鉢形土器で、胴部上半で外反気味に立ち上がり、口縁部が内湾し、波状口縁となる器形である。口縁部には沈線によるクランク文、直線文と竹管状工具による刺突文を、胴部上半には「S」字状連鎖沈文を施文する土器である。

遺構の構築時期は出土土器から縄文時代前期中葉の大木2 b式期と推定される。

S K69土坑（第15図、図版3・15）

L S 53・54グリッドに位置する。I 層除去後、IV層（地山）面にて褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.93m、短径1.92mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは1.01mで、底面標高は182.64mである。底面はほぼ平坦であるが、南西側が少し窪んでいる。壁は南西側が半分程の深さまで一度ほぼ垂直に立ち上がり、そこからさらに緩やかに立ち上がる。南東側は上部に擾乱を受けしており、不明瞭ではあるが残存部分は緩やかに立ち上がっている。埋土は混入物などから5層に分層した。4・5層に地山塊が多量に混入しており、壁面または天井が崩落して堆積したものと考えられる。1～3層はその後流入した自然堆積土である。フラスコ状土坑であった可能性がある。

埋土から縄文土器9点、削器1点、不定形石器1点を含む剥片10点、礫石器1点が出土した。剥片石器は石鐵の未製品1点（第31図S 2、図版23）、削器1点（第32図S 8、図版23）、大型両面加工石器1点（第32図S 9、図版23）を図示した。礫石器は敲磨器類（D 1類）1点を図示した（第64図S 75、図版24）。土器は3点を図示した（第27図21・22・24、図版21・22）。21・22は細い粘土紐による隆線を貼付している。22は隆線上に刻目を施す。24は細く浅い短沈線を施文する土器である。

遺構の構築時期は出土土器から縄文時代前期中葉と推定される。

S K74土坑（第15図）

M B1グリッドに位置する。I 層除去後、IV層（地山）面にて黒褐色の隅丸方形プランを確認した。規模は長径0.72m、短径0.70mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.08mで、底面標高は183.18mである。底面はほぼ平坦であるが、東から西に緩く傾斜している。壁は緩やかに立ち上がるが、東側がやや緩やかである。埋土は炭化物粒・地山粒を含む単一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から礫石器が1点出土している。縄文時代と思われるが、時期の判定が出来る土器が出土していないので、その帰属時期は不明である。

S K77土坑（第15図）

M G 52グリッドに位置する。III層掘り下げ後、IV層（地山）面にてにぶい黄褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.0m、短径0.82mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.24mで、底面標高は181.51mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層した。1層は黒色土主体に地山粒混入しており、2層は地山類似土主体であり、人為的埋め戻しの可能性がある。

埋土からは遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S K78土坑（第14図、図版15）

M C 44グリッドに位置する。III層除去後、IV層（地山）上面にて、SK33の精査をしていたところ、SK33に接する形で褐色の円形プランを確認した。僅かに掘り下げたところ、土器片と礫がプラン

内に見えたことから土坑と判断した。SK33と重複し、SK78がSK33より古い。規模は長径0.92m、短径0.90mの円形を呈する。確認面からの深さは0.19mである。底面は平坦で、立ち上がりは明瞭で壁は西側は直線的に緩やかに立ち上がる。東側は直線的に比較的急角度に立ち上がる。埋土は炭化物・地山粒を含む單一層で、一括埋め戻しの可能性がある。埋土から土器片1点・石器の剥片4点・磨製石斧の未製品1点（S1-図版15）が底面の若干上から出土した。磨製石斧の未製品の出土から土坑墓の可能性も考えられる。石器は磨製石斧未製品（A1類）1点を図示した（第64図S76、図版24）。土器は1点を図示した（第27図23、図版21）。23は撫りの細かい斜縄文を施している土器で、器厚は5ミリと薄い。土器はその特徴から縄文時代の後期もしくは晩期に属すると考えられるものであるが、後期中葉のSK33と重複し、本遺構が古いことから、後期と推定される。

SK80土坑（第15図、図版16）

ME45グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）上面にて、褐色の楕円形プランを確認した。中央に大きい礫（S1-5kg）を置いている。規模は長径0.55m、短径0.46mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.17mである。底面はほぼ平坦である。壁は緩やかに湾曲し比較的急角度で立ち上がる。埋土は土色や混入物の割合から2層に分層した。1層は褐色土に地山粒・炭化物粒を僅かに含む層で、2層は地山由来と考えられるにぶい黄褐色土に炭化物・明褐色土が混入している。遺物と堆積状況から考えると、一括埋め戻した2層の上面中心部を掘り返し、礫を埋め、再び土を埋め戻したと推定される。

埋土中の2層直上（土坑底面よりやや上）から礫1点が出土したことや埋土の状況から土坑墓と考えられる。縄文時代と考えられるが、時期の判断が出来る遺物が出土していないので、詳細な時期は不明である。

SK84土坑（第16図）

MC52グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて褐色の隅丸方形プランを確認した。規模は長径1.19m、短径0.99mの隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.34mで、底面標高は183.20mである。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。埋土は2層に分層した。ともに地山土を主体とし、1層の方が地山が多く含まれる。層界は不明瞭で一連の埋め戻しによる堆積と考えられる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

SK85土坑（第16図）

MC52グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.80m、短径0.69mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.15mで、底面標高は183.20mである。底面は極めて緩やかに湾曲している。壁は南側では緩やかに立ち上がるが、北側では緩やかに立ち上がる。埋土は炭化物を含む單一層であり、地山由来土主体の一括した埋め戻し土である。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

SK86土坑（第16図）

ME50グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にてにぶい黄褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.04m、短径1.02mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.21mで、底面標高は183.40mである。底面はほぼ平坦であるが、中央が窪んでいる。壁は北東側が緩やかに立ち上がるが、南西側はやや急角度で立ち上がる。埋土は地山粒・炭化粒を含む單一層で、一括埋め戻

し土の可能性が高い。

埋土より縄文土器片1点、剥片1点、礫石器1点が出土しており、いずれも1層上位より出土している。出土遺物から縄文時代に埋没したものと考えられる。

S K87土坑（第16図）

M F 49・50グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にてにぶい黄褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.49m、短径1.10mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.28mで、底面標高は183.50mである。底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がるが、深さの半分前後でさらに外側へ開くように立ち上がる。埋土は2層に分層した。いずれも地山粒・炭化粒を少量含んでおり、一括埋め戻し土の可能性がある。

埋土から石器の剥片が1点出土している。縄文時代と思われるが、時期の判断が出来る土器が出土していないため、その帰属時期は不明である。

S K89土坑（第16図）

M K49グリッドに位置する。III層掘り下げ後、IV層（地山）面にて暗褐色・黒褐色・明黄褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.10m、短径0.81mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.26mで、底面標高は183.16mである。底面は平坦で壁は緩やかに立ち上がる。埋土は3層に分層した。2・3層は裏込め土である。

埋土を掘り下げていく段階で、3本の鉄の輪を確認した。一部歪んでいるが、輪はいずれも楕円形で長径0.42m、短径0.32mであった。土層断面の観察から「桶」状の断面形を示す1層と周りの2・3層との境に位置していたため、桶などを締める時に用いられる箍（たが）の可能性がある。2・3層は土坑の中に桶を入れ動かないようにした「裏込め」と想定される。帰属時期は不明であるが、比較的新しい時代のものであると考えられる。

S K90土坑（第16図）

M K・M L49グリッドに位置する。III層掘り下げ後、IV層（地山）面にて黒褐色の不整隅丸方形プランを確認した。規模は長径1.18m、短径1.08mの不整隅丸方形を呈する。確認面からの深さは0.22mで、底面標高は183.16mである。底面はほぼ平坦であるが、西から東にかけて緩く傾斜している。また、北西隅で地山に由来すると思われる礫が確認された。壁は緩やかに立ち上がり、埋土は地山粒を含む單一層であり、人為的な埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S K94土坑（第18図）

M F・M G52グリッドに位置する。III層掘り下げ後、IV層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径1.0m、短径0.94mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.40mで、底面標高は181.20mである。底面は全体的に北西から南東にかけて傾斜している。中央部がやや盛り上がり、両端が窪んでいる。壁は緩やかに立ち上がる。埋土は地山粒・塊の混入で2層に分層した。1層は地山粒・塊が多量に、炭化物が少量含まれる。2層は炭化物のみ含まれている。2層が底面一面に堆積していることから、2層堆積後の人为的な埋め戻しの可能性がある。

埋土から鉄製品が5点出土した。1点は板状の鉄を三角形に折り曲げた形をしており、内側には材が付着している。材を束ねるために使用された可能性がある。他の4点は腐蝕が激しく、どのような

ものかははつきりしない。

時期の判断が出来る遺物が出土しておらず、帰属時期は不明である。

S K96土坑（第16図）

M E57グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.76m、短径0.65mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.24mで、底面標高は178.60mである。底面は平坦で、壁はやや急角度で立ち上がる。埋土は地山粒の混入割合などで2層に分層した。1層より2層の方が地山粒を多く含んでいるため、2層は遺構の壁面崩落土と推定される。

埋土から縄文土器2点、石器の剥片が1点出土している。土器は2点を図示した（第27図25・26、図版22）。25は口縁部片で、器厚が4mmと薄い無文の土器である。26は斜縄文を施した土器である。出土の土器から遺構の構築時期は縄文時代晩期と推定される。

S K97土坑（第18図）

M D57グリッドに位置する。Ⅲ層掘り下げ後、Ⅳ層（地山）面にて黒褐色と暗褐色の不整楕円形のプランを確認した。規模は長径0.92m、短径0.89mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.4mで、底面標高は179.43mである。底面は平坦で、壁は南東側は緩やかに立ち上がるが、北西側は極めて埋土が薄く、地山面とほぼ同一面となる。埋土は地山粒の混入割合などで、2層に分層した。1層より2層の方が地山粒を多く含んでいる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S K100土坑（第17図、図版16・17）

M N40グリッドに位置する。I層除去後、Ⅳ層（地山）面にて石器の剥片が集中して出土した。周辺を精査すると、にぶい黄褐色と暗褐色の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.74m、短径0.62mの不整楕円形を呈する。確認面からの深さは0.34mで、底面標高は180.04mである。底面は平坦であるが、西から東にかけて傾斜している。壁は東側がほぼ垂直に近い角度で立ち上がるのにに対して、西側は湾曲しながら立ち上がる。埋土は混入物などから3層に分層した。1層は地山粒を、2層は炭化物、多量の遺物を含んでいる。3層に混入物は認められなかった。

埋土中（2層）には剥片石器や母岩を分割後の残核、多量の石器剥片・チップが含まれていた。その他に礫1点が出土している。チップ（大きさ1cm以下）を除いた総点数は、8,725点である。これらは一括して土坑の中に入れた様相を呈しており、平面的には東側にやや偏りが認められる。その他に礫1点が出土している。剥片石器は尖頭器未製品1点、削器1点、残核13点、接合資料24点を図示した（第34図S 22～第59図S 60、図版22）。礫石器は敲磨器類（D 3類）1点（第64図S 77、図版24）を図示した。接合の結果、母岩は20個体と判明した。

遺構の構築時期は上器が出土していないため明確ではないが、今回の調査では遺跡全体で、縄文時代前期中葉の遺物が主体を占め、この中には磨製石斧の未製品が多く出土し本遺跡が石器製作と深く関わる場所であったと考えられる。上記のように本遺構からは残核や多量の石器剥片などが出土している。ちなみに放射性炭素年代測定では縄文時代前期中葉という結果が得られている。これらの事を考え合わせると時期は縄文時代前期中葉と想定される。

S K101土坑（第18図）

M M42グリッドに位置する。I層除去後、Ⅳ層（地山面）にて黒褐色と暗褐色の楕円形プランを

確認した。規模は長径1.03m、短径0.88mの楕円形を呈する。確認面からの深さは0.39mで、底面標高は188.6mである。底面は中央部が一段高くなっている。また、壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がるが、南側は緩く湾曲しながら立ち上がる。埋土は地山粒の混入割合などから2層に分層した。2層は裏込め土であり、人為的な埋め戻し土である。

埋土を掘り下げていく段階で、3本の鉄の輪を確認した。欠損している部分もあるが、輪はいずれも楕円形で長径0.83m、短径0.58mであった。土層断面の観察から「桶」状の断面を示す1層と周りの2層との境に位置していたため、桶などを縮める時に用いられる箍（たが）の可能性がある。また、1層中からおはじきとビー玉の2点、礫1点が出土した。2層は土坑の中に桶を入れ動かないようにした「裏込め」と想定される。帰属時期は不明であるが、比較的新しい時代のものであると考えられる。

S K103土坑（第18図、図版18）

M F 51グリッドに位置する。Ⅲ層除去中に土器片のまとまりを確認し、Ⅲ層の黒色土を取り去ったところ、IV層（地山）上面に土器を中心とした円形の褐色のプランを確認した。規模は長径0.66m、短径0.57mの円形を呈す。確認面からの深さは0.10mである。底面は中央部を中心に緩やかに弧を描くように西側に傾斜している。壁は、西側では極めて緩やかに湾曲しながら立ち上がる。東側は立ち上がりが明瞭で直線的に緩やかに上端へ向かう。また、遺構の西側を確認時にやや掘り下げてしまった。埋土は炭化物・地山粒を含む單一層である。

埋土上面から縄文土器片27点が出土した。土器は1点を図示した（第27図27、図版22）。27は底部で、色調はにぶい黄橙色、胎土には砂粒を多く含む。遺構の構築時期は土器から縄文時代後期か、晚期と考えられる。

S K104土坑（第17図、図版18）

M F 51グリッドに位置する。S K 103の精査中に周辺のⅢ層黒色土を除去していたところ、IVb層（地山）上面にて東西に楕円形の褐色プランを確認した。規模は長径1.40m、短径1.23mの不整楕円形を呈す。確認面からの深さは0.54mである。また斜面にある遺構のため、断面ライン上端での高低差が0.32mある。Ⅲ層を掘り下げている時に1層の埋土を掘り下げてしまった。底面はほぼ平坦である。壁は東側では比較的急角度に湾曲しながら立ち上がる。底面から0.38mのところで傾斜角が変化して緩やかに外側へ広がっている。西側の壁は立ち上がりが明瞭で緩やかに直線的に立ち上がる。底面から0.19mのところで傾斜角が変化して緩く傾斜して立ち上がる。

埋土は全体的に炭化物・地山粒を含む褐色土であるが、地山粒の混入割合や土層の明暗から2層に分層した。2層は、遺構に対しほぼ水平に堆積していることと遺構全体にわたり土器片や石器の製品や剥片が大量に埋まっていた。このことから1層・2層共に人為的に遺物と共に埋め戻されたと推定される。

遺物は1層からは、土器片18点、石匙を含む剥片67点、敲石と打製石斧を含む礫6点が出土した。2層からは土器片11点、石鏃を含む剥片163点、石皿を含む礫7点が出土した。1層から出土した遺物の多くは、遺構の中心部ではなく壁に沿って出土する場合が多い。また、2層から出土した遺物は1層との境界面から深さ約0.15mぐらいまでに集中し、それより低い位置で出土したものはほぼ遺構の中心部から出土した。剥片石器は石鏃3点（第31図S 3～5、図版23）、石匙1点（第32図S 10、

図版23)、削器1点(第32図S11、図版23)、小型両面加工石器1点(第32図S12、図版23)を、礫石器は打製石斧(未分類)1点(第65図S78、図版24)、石皿(A類)2点(第65図S79・80)を図示した。土器は3点を図示した(第27図28~第28図30、図版21・22)。28~30は胴部に「S」字状追跡沈文を施している。29は口縁部片で、口縁部に沿って1条の隆線を貼付し、その上に刻目を施しているものである。遺構の構築時期は土器から縄文時代前期中葉と推定される。

S K 109土坑(第18図)

MK41・42グリッドに位置する。I層除去後、IV層(地山)面にて褐色土の円形プランを確認した。規模は長径1.10m、短径1.01mの円形である。確認面からの深さは0.07mで、底面標高は188.14mある。断面形は大変浅い皿状で、底面はほぼ平坦である。埋土は炭化物粒・地山粒を含む單一層で、掘り上げ地山土を主体とした人為的埋め戻し土の可能性がある。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S K 110土坑(第18図)

MN43・44グリッドに位置する。III層掘り下げ後、IV層(地山)面にて黒色の楕円形プランを確認した。規模は長径0.94m、短径0.89mの楕円形である。確認面からの深さは1.14mで、底面標高は187.54mである。底面は緩く湾曲し、壁は南西側は緩く湾曲して立ち上がり、北東側は一度湾曲した後、さらに外側に外傾しながら立ち上がる。埋土は4層に分層した。4層は若干地山土を含み、開口部の旧表土を主体とした埋め戻し土の可能性がある。3層は埋め戻しの際の壁面崩落土。2層も4層に類似し、一連の埋め戻し土と考えられる。1層は埋め戻し後に沈降した窪みに自然に堆積した流入土である。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

4 フラスコ状土坑

S K F 26フラスコ状土坑(第19図、図版18)

MC45グリッドに位置する。I層の重機によって搅乱された土の除去中に窪んだプランが見え、搅乱された土を取り除いていたところ、プラン内から大きな円柱状の礫が出土したため土坑と判断した。その後、埋土を掘ったところ上端のラインよりも下端のラインの方が広がる形になりフラスコ状土坑と判断した。規模は上端長径1.02m、上端短径0.79m、下端長径0.98m、下端短径0.94mの不整円形を呈す。確認面からの深さは0.30mである。底面はほぼ平坦である。壁は、南東側では外側に湾曲しながら立ち上がり、真上の上端に向かい多少外側に膨らんでいる。北西側は底面から緩やかに外側に湾曲しながら立ち上がるが、底面より10cm付近で傾斜が変化し上端に向かって括れている。埋土は地山粒・炭化物を含む單一層であり、礫と一緒に人為的に埋め戻されたと推定され、その埋め戻しの土の上に搅乱による黒色土が覆っていたと考えられる。

埋土から礫石器が1点出土している。時期は縄文時代と思われる。

S K F 31フラスコ状土坑(第19図、図版3・19)

L S 55グリッドに位置する。I層掘り下げ後、IV層(地山)面にて暗褐色の不整楕円形プランを確認した。北東側急斜面に位置しており、東側の一部が不明であるが、確認出来る範囲で開口部長径1.52m、短径1.0m、底面長径1.27m、短径1.32mである。確認面からの深さは0.47mで、底面標高は

179.2mである。底面はほぼ平坦であるが、西から東へ緩やかに傾斜している。壁の東側は削平されている。西側は僅かに内湾し、確認面より0.2m程下で外反する。埋土は5層に分層した。4・5層は天井・壁面崩落土と考えられ、1～3層は自然に堆積したと考えられる。

埋土から縄文土器4点、石器2点、礫石器の破片3点と石器剥片23点が出土した。土器は3点を図示した（第24図3、第28図31・32、図版21）。3は口縁部が小破状となる鉢形土器である。地文は斜縄文で口縁部には、口縁に沿って5条の沈線で区画し、沈線以外を磨消縄文手法によって無文帶としている。31・32は縄文や撫糸文を施している土器である。石器は小型両面加工石器1点を図示した（第33図S13、図版23）。帰属時期は出土土器から縄文時代後期中葉である。

S K F68 フラスコ状土坑（第19図、図版3・19）

L S54グリッドの北東側急斜面に位置する。I層掘り下げ後、IV層（地山）上面にて、褐色・黄褐色の円形プランを確認した。その後、掘り進めて西側の下端がオーバーハングしていることからフラスコ状土坑と推定した。規模は上端長径2.04m、上端短径1.84m、下端長径1.96m、下端短径1.76mの不整円形を呈する。斜面に位置するため、確認面からの深さは斜面の上部と下部で大きな差があるが、上部の最も高低差があるところでは1.16mであった。底面はほぼ平坦であるが、擾乱があり一部底面がえぐられている。壁は、東側では直線的に緩やかに立ち上がり、西側は外側に大きく湾曲しながら立ち上がり、上端から深さ0.60mの位置で傾斜が変化し、底面に対してほぼ垂直方向に直線的に立ち上がる。埋土は土層の色や混入物の違いによって7層に分層した。

埋土中から土器片14点、製品を含む剥片64点、礫1点が出土した。剥片石器は尖頭器2点（第33図S14・15、図版23）、鎹状石器1点（第33図S16、図版23）、削器1点（第33図S17、図版23）、小型両面加工石器2点（第33図S18・19、図版23）、異形石器1点（第33図S20、図版23）を図示した。土器は5点を図示した（第28図33～37、図版21）。33・34・36は連鎖状沈線文を施す土器で、36は口縁部で、口唇部下に竹管状工具による連続刺突文を2段巡らしている。これら土器の文様施文の特徴から縄文時代前期中葉に属すると思われる。

S K F72 フラスコ状土坑（第19図、図版19）

M C44・MD44グリッドにまたがって位置する。I層除去後、IV層（地山）上面においてS K33のプラン確認の為、周辺を広めに精査したところ、黒色の円形プランを確認した。その後、埋土除去を進めていく過程で、底面に近づくにつれ壁が上端よりも広がったためフラスコ状土坑と判断した。規模は上端長径1.42m、上端短径1.29m、下端長径1.66m、下端短径1.65mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.61mである。底面はほぼ平坦である。壁は、南側では外側に緩やかに湾曲しながら立ち上がり、底面から0.07mで内側へ比較的急角度で直線的にすばまり、底面から0.48mになるとほぼ垂直に上端に向かう。一方、北側は外側に緩やかに湾曲しながら立ち上がり、底面から0.12mで傾斜方向が変化し、内側へ比較的急角度で直線的に立ち上がる。埋土は土層の色や炭化物粒の有無、混入物の混入割合などから8層に分層した。6層は遺構の外側にしか堆積していないことなどから土坑内の天井崩落土であると考えられる。6層を除くと遺物が多く出土した炭化物の多く混入している層と地山由来の明黄・明褐色土が交互に堆積していることなどから、このフラスコ状土坑は埋め戻しを繰り返しながら数回程度使用されていたのではないかと推定される。

埋土から土器片57点、礫1点が出土した。土器片は2層と6層を除く全ての層から出土したが、

比較的炭化物粒の混入度が高い1・3・5・8層からの出土が多い。また礫は遺構の中央部底面直上から出土した。石器は敲磨器類（D1類）1点を図示した（第65図S81、図版24）。土器は6点を図示した（第28図38～第29図43、図版21・22）。いずれも地文が縄文で、41・43は口縁に沿って沈線を施し、沈線と口唇部間を磨消縄文手法によって無文とし、区画している。これら土器の文様施文の特徴から縄文時代後期中葉の時期に属すると思われる。

S K F99フラスコ状土坑（第19図、図版17・20）

M J40グリッドに位置する。I層掘り下げ後、IV層（地山）上面にて暗褐色の円形プランを確認した。規模は上端長径1.24m、上端短径1.21m、下端長径1.40m、下端短径1.33mの不整円形を呈する。確認面からの深さは0.59mで、底面はほぼ平坦である。開口部の中央が凹んでいるのは確認時にやや掘りすぎたためである。壁は、北側では大きく外側に湾曲しながら立ち上がり、底面から10cmで緩やかに内側に湾曲しながら上端に向かう。一方、南側は立ち上がりは明瞭でほぼ垂直に立ち上がり、底面から26cmでやや内側にすぼみながら上端に向かう。

埋土は7層に分層した。黒褐色・暗褐色基調土を主体とし、地山粒のブロックが多い層と少ない層が互層をなしているため、人為的に埋め戻された土と考えられる。また1層は基本土層のⅢa層に若干似ている。

遺物は1層から礫1点、4層から石器の剥片4点、6層から剥片2点出土した。石器は敲磨器類（A3類）1点を図示した（第65図S82、図版24）。

時期については縄文時代と思われる。

5 焼土遺構

S N66焼土遺構（第20図、図版20）

M C46グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて赤褐色の焼土梢円形プランを確認した。規模は長径0.74m、短径0.42mの不整梢円形を呈する。確認面からの深さは0.08mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は炭化物・地山粒を含む單一層であり、埋土全体が被熱している。

遺物は土器片が1点・剥片が2点出土している。土器は1点を図示した（第29図44、図版22）。44は小破片で風化しているが胎土・焼成から縄文時代の土器と考えられる。

S N79焼土遺構（第20図、図版20）

M F43グリッドに位置する。I層除去後、IV層（地山）面にて不整形の焼土粒と炭化物粒の分布を確認した。規模は長径0.64m、短径0.48mの不整形を呈する。確認面からの深さは0.08mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は焼土粒・炭化物を含む單一層であり、焼土粒と炭化物がほぼ同じ分布状況で密集して見つかった。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S N88焼土遺構（第20図、図版20）

M I50グリッドに位置する。III b層掘り下げ中に焼土を確認し、周辺を精査したところ不整梢円形プランを確認した。規模は長径0.72m、短径0.42mの不整梢円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.08mである。遺構の中心よりやや東側に被熱の強い部分がある。掘り込みは確認できなかった。埋土は被熱の程度から2層に分層した。1層は被熱の程度が強く、2層は程度が弱い。1層が被熱の

中心であると考えられる。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S N92焼土遺構（第20図）

M I 48グリッドに位置する。III c 層にて焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径2.88m、短径1.40mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.10mである。遺構のほぼ中心付近に強い被熱土が集中している。掘り込みは確認できなかった。埋土は被熱の程度と混入物から3層に分層した。1層が被熱の程度が強く、2層は1層と比較すると程度は弱い。3層は炭化物と焼土を含む。1層付近で燃焼作業を行った可能性がある。

埋土から縄文土器6点、不定形石器2点を含む剥片27点、礫1点が出土した。土器は2点を図示した（第29図45・46、図版22）。45は「S」字状連鎖沈文を施文した縄文時代前期中葉の土器である。46は撚糸文を施文しており、色調は黄橙色で硬質である。縄文時代中期後半の土器かと推定される。

S N93焼土遺構（第20図）

M J 47グリッドに位置する。III c 層にて焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.70m、短径1.21mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.13mである。掘り込みは確認できなかった。埋土は2層に分層した。1層は被熱の程度が強く、2層は被熱の程度が低い。

埋土から縄文土器9点、不定形石器3点を含む剥片109点が出土した。S N92と隣り合っており、剥片などが多く出土していることから火の周りで石を加工していた可能性がある。

剥片石器は削器1点を図示した（第33図S 21、図版23）。土器は3点を図示した（第29図47～49、図版22）。47は外面にススの付着が著しく、文様が判然としないが、「S」字状連鎖沈文を施文しているものと思われる。48は小波状口縁に沿って1条の浅い沈線を巡らす土器である。沈線下の胸部には不整撚糸文を施文か。49は撚糸文を施文している。47・48は縄文時代前期中葉に属すると考えられる。

S N102焼土遺構（第20図）

M G 53グリッドに位置する。III b層掘り下げ中、炭化物粒と焼土粒の広がりを確認し、周辺を精査したところIII c 層面で焼土の不整楕円形プランを確認した。調査中に設定したトレーニチにより、北西側が失われているが、残存する部分の規模は長径0.40m、短径0.30mで不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.05mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は黒褐色で、炭化物粒・焼土粒が少量含まれている。

埋土から遺物は出土しておらず、帰属時期は不明である。

S N105焼土遺構（第21図）

M I 42グリッドに位置する。III層掘り下げ中、褐色と暗褐色の焼土の広がりを確認し、周辺を精査したところIV a層面で焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.50m、短径0.23mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでる深さは0.04mである。掘り込みは確認されなかった。埋土は被熱状況から2層に分層した。1層は被熱の程度が強く、2層は被熱の程度が低く焼土粒を多量に含んでいる。1層は西側に分布し、東側に2層が分布する。1層で燃焼作業を行った可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S N106焼土遺構（第21図）

M J 42グリッドに位置する。I層掘り下げ後、倒木痕上に炭化物と焼土の不整楕円形プランを確認した。遺構は二つに分かれているが、本来一つの遺構と判断される。西側は長径0.24m、短径0.15mの不整楕円形を呈し、被熱が及んでいる深さは0.04mである。東側も不整楕円形を呈し、長径0.38m、短径0.33m、被熱の及んでいる深さは0.09mである。いずれからも掘り込みは確認できなかった。また、東側の焼土の北側で炭化物が集中して出土した。埋土は3層に分層した。1・2層は被熱の程度が強く、3層はやや弱い。遺構が倒木痕上にあること、二つに分かれていることから、本遺構は倒木痕によって二つに分かれた可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S N107焼土遺構（第21図）

M J 41グリッドに位置する。I層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.44m、短径0.26mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.11mである。掘り込みは確認出来なかった。埋土は3層に分層して炭化物と焼土を含んでいた。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S N108焼土遺構（第21図）

M J 42グリッドに位置する。I層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.15m、短径0.89mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.08mで、掘り込みは確認できなかった。埋土は炭化物・焼土粒を含む単層で、被熱の程度が低いものの可能性がある。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S N111焼土遺構（第21図）

M J 41グリッドに位置する。I層除去後、倒木痕上に焼土の不整楕円形プランを確認した。規模は長径1.53m、短径1.20mの不整楕円形を呈する。被熱が及んでいる深さは0.13mである。掘り込みは確認出来なかった。埋土は2層に分層した。1層は被熱の程度が強く、2層は被熱の程度が低い。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

S N112焼土遺構（第21図）

M J 42グリッドに位置する。I層除去後、倒木痕上に焼土と炭化物の不整楕円形プランを確認した。規模は長径0.54m、短径0.36mの不整楕円形を呈する。焼土と炭化物が不整楕円形に広がり、北東と南西付近に楕円形の被熱の強い部分がある。被熱が及んでいる深さは0.07mである。埋土は3層に分層した。1層と2層は確認できた被熱の程度が強い部分で、3層は炭化物と焼土粒を含んでいる。4層は被熱の程度が強い部分である。

埋土から遺物が出土しなかったため、帰属時期は不明である。

6 柱穴様ピット

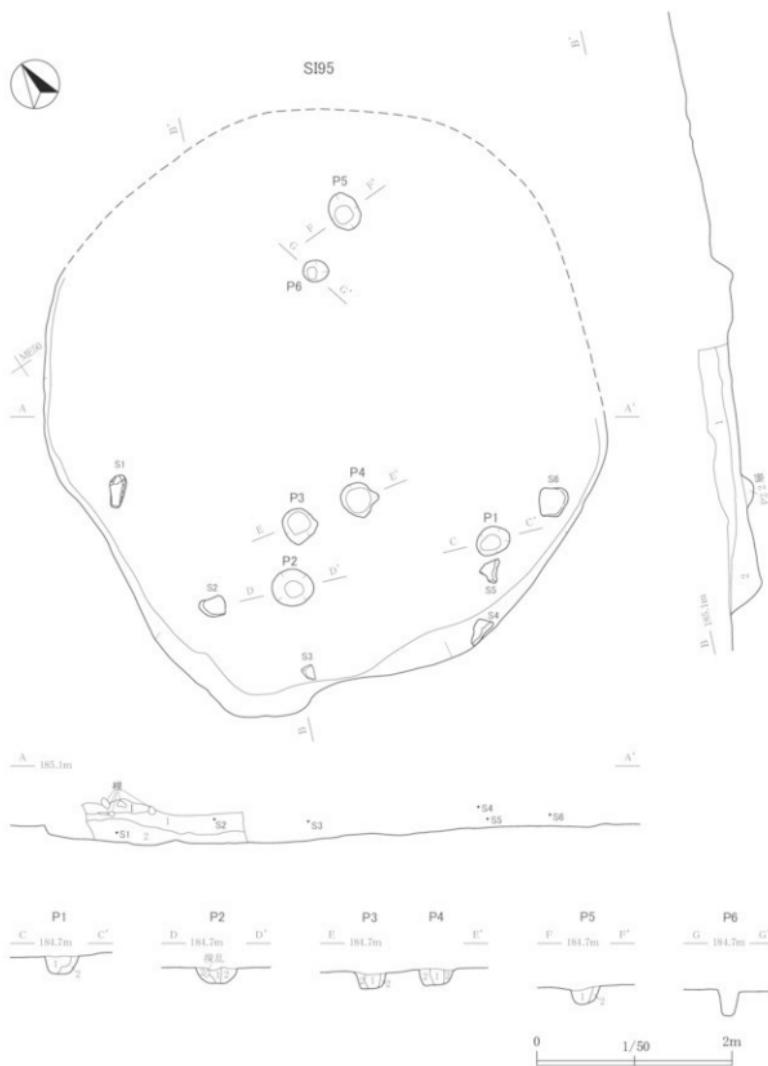
22基を確認している。位置は付図に、詳細は第2表に示した。

第2表 柱穴様ピット一覧

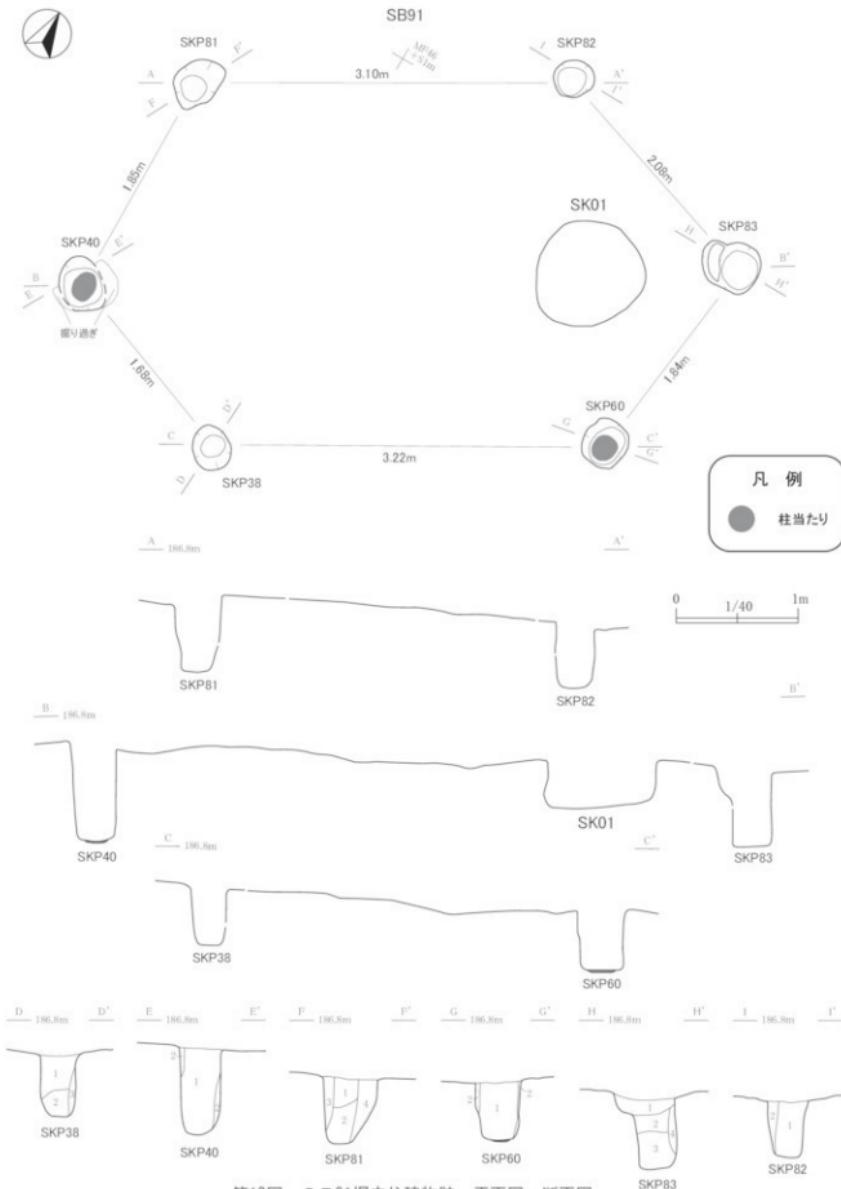
No	グリッド	確認面	長径	短径	深さ	底面標高	重複関係(新>旧)	附属建物等
			(cm)	(cm)	(m)	(m)		
06	MA46	IV層	34	28	7.6	183.51		
07	MA47	Ⅲ層	32	25	5.2	183.45		
08	MB47	IV層	28	25	3.3	183.59		
09	MB48	Ⅲ層	33	27	38.4	183.20		
10	ME45	IV層			24	186.02	SKP10 > SK01	
18	ME44	IV層	30	22	34.7	186.20		
34	MB46	IV層	39	22	41	184.25		
36	MF44	IV層	29	28	18.1	186.45	SKP36 > SKP37	
37	MF44	IV層	(47)	38	22.9	186.44	SKP36 > SKP37	
38	ME44	IV層			51.4	185.99		SB91
40	MF44	IV層			72	185.74		SB91
45	MF45	IV層	35	24	29.7	186.16		
55	MC55	IV層	(21)	34	21.6	181.39	SKP56 > SKP55	
56	MC55	IV層	41	36	29.8	181.47	SKP56 > SKP55	
58	MD54	IV層	40	32	22.8	181.41		
60	ME45	IV層			52.2	185.78		SB91
71	MH43	IV層	36	28	29.7	186.76		
75	LT49	IV層	25	19	41.2	180.67		
81	MF45	IV層			56	185.80		SB91
82	ME45	IV層			46	185.65		SB91
83	ME45	IV層			62	185.59		SB91
98	MD57	IV層	30	28	10.6	178.73		

柱穴様ピット一覧凡例

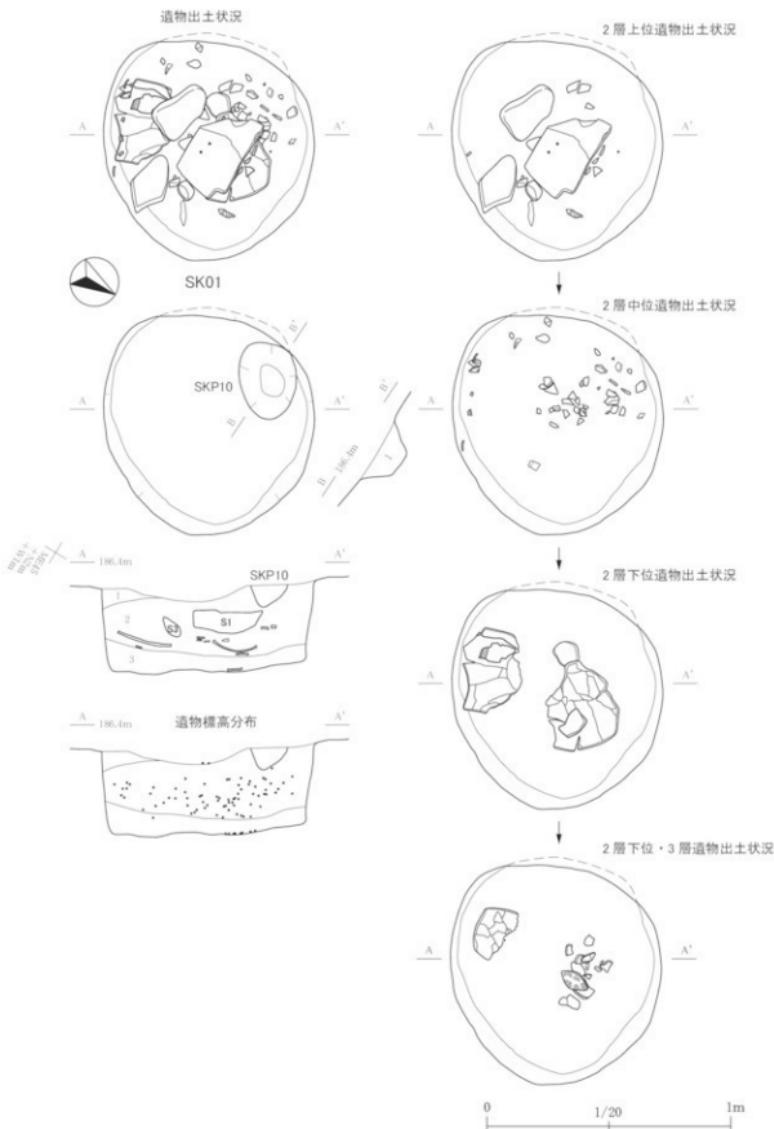
車「長径」・「短径」が切り合ひなどにより不明の場合、() 内に推定値を示した。



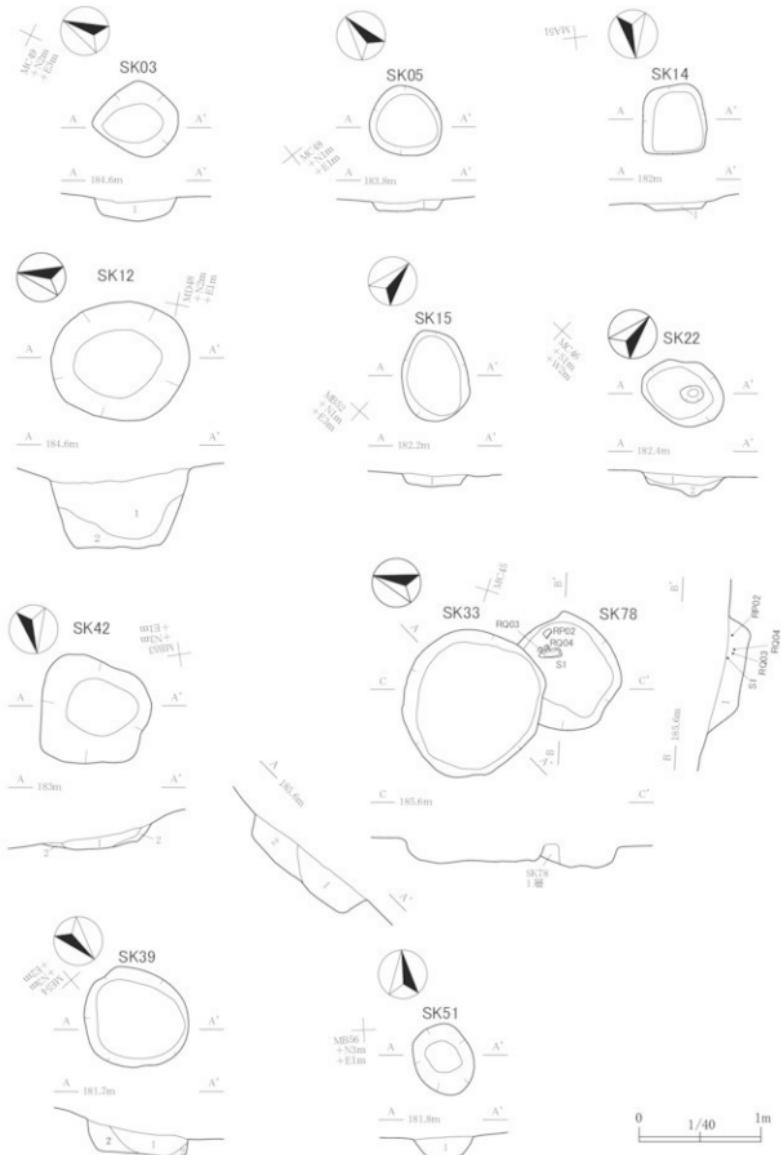
第11図 SI95堅穴建物跡 平面図・断面図



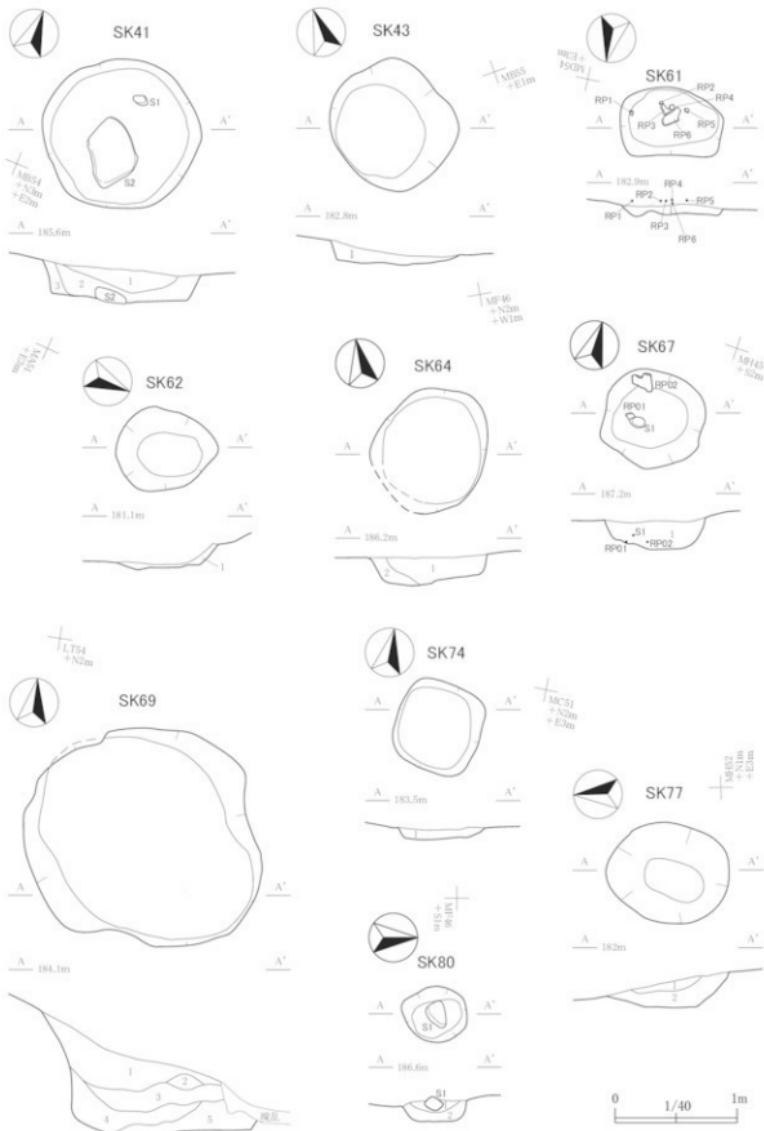
第12図 SB91掘立柱建物跡 平面図・断面図



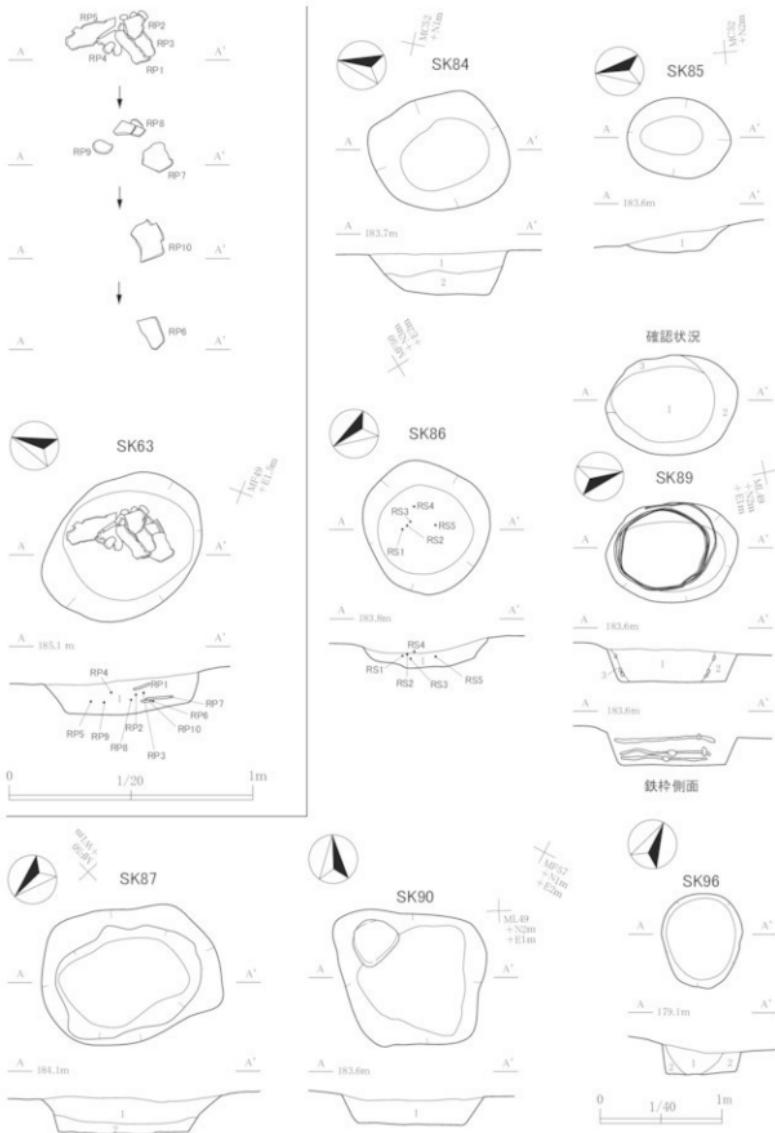
第13図 SK01土坑 遺物出土状況図



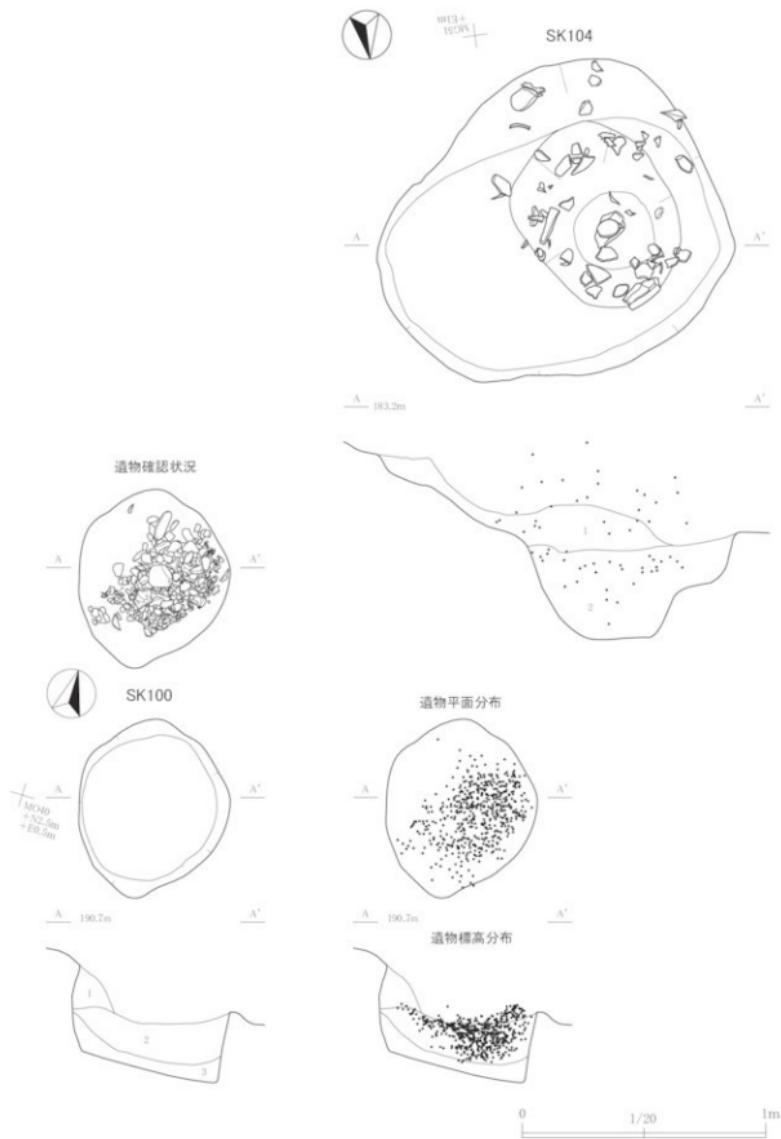
第14図 SK3・5・12・14・15・22・33・39・42・51・78土坑 平面図・断面図



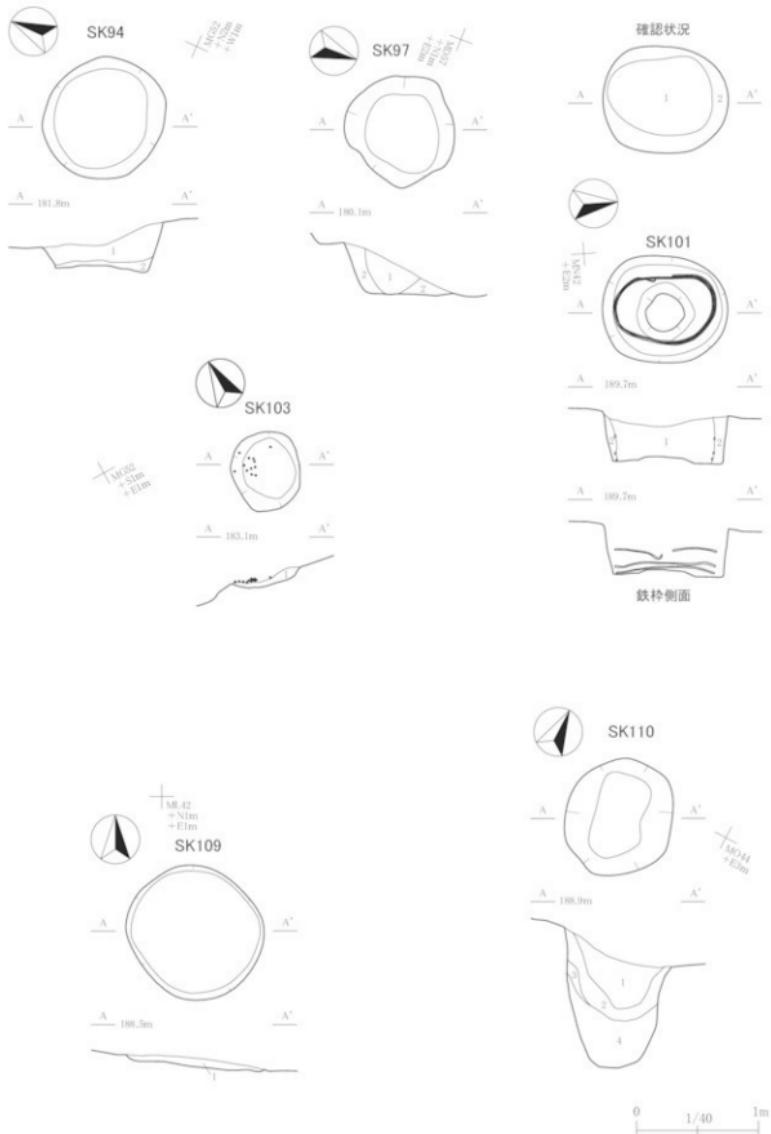
第15図 SK41・43・61・62・64・67・69・74・77・80土坑 平面図・断面図



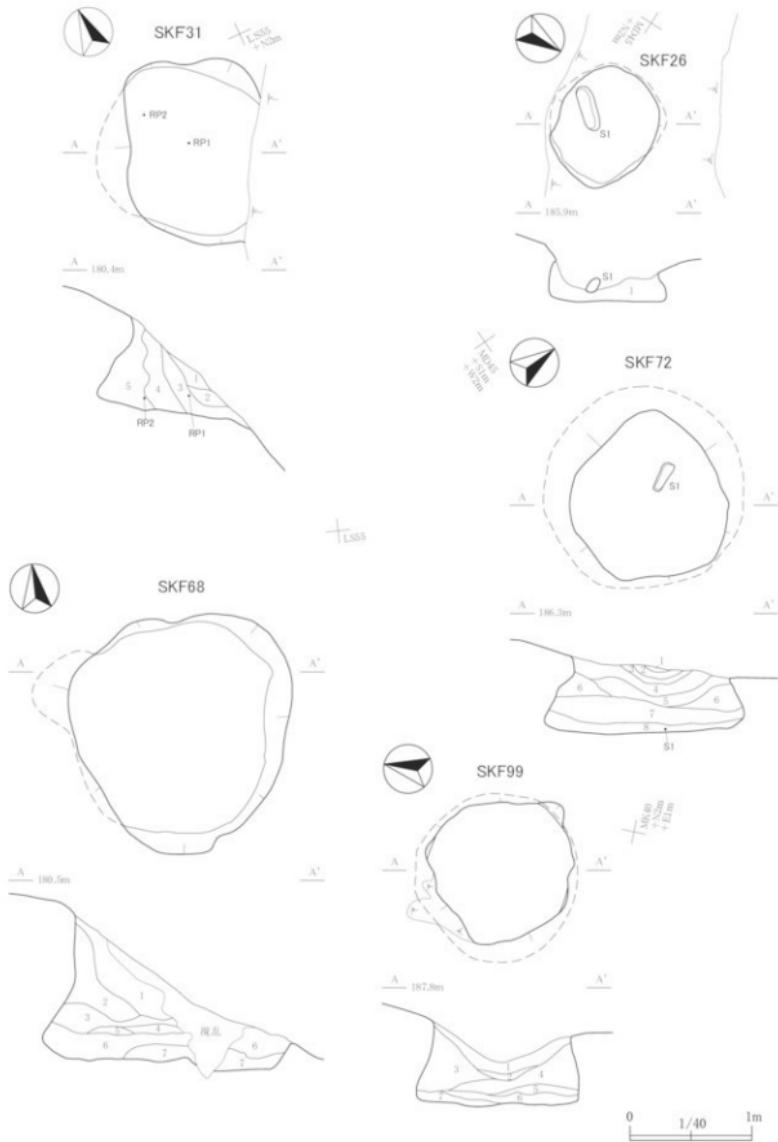
第16図 SK63・84・85・86・87・89・90・96土坑 平面図・断面図



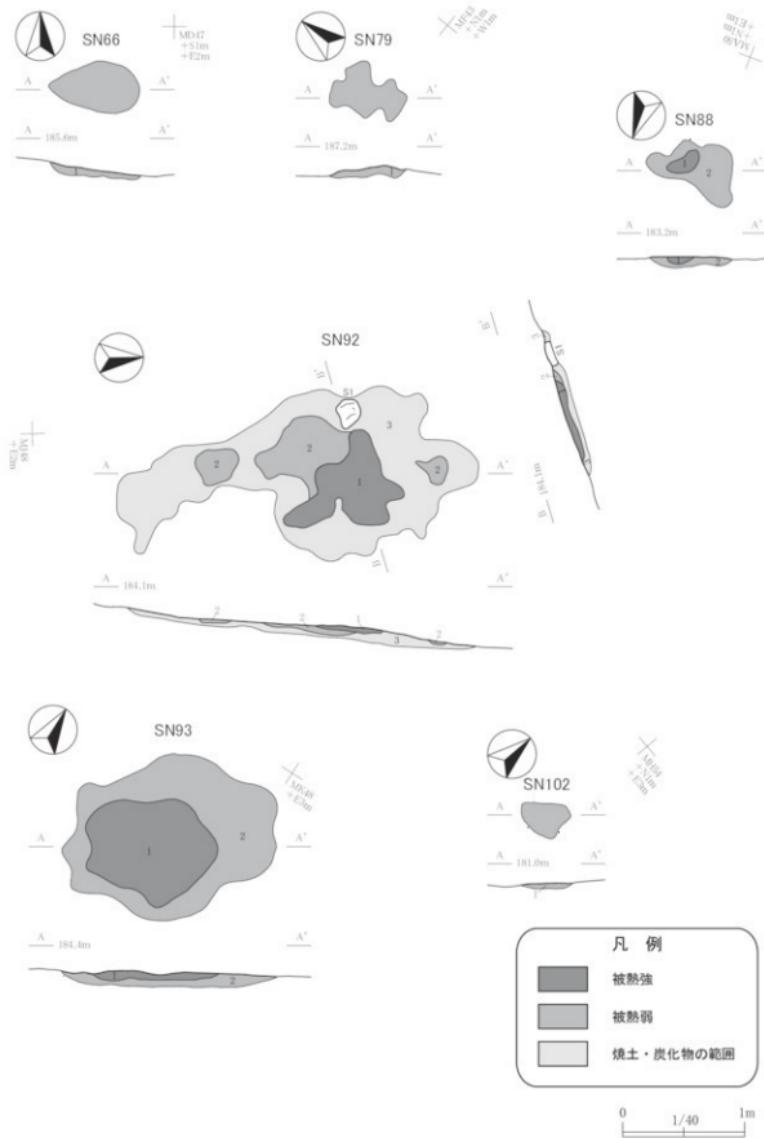
第17図 SK100・104土坑 遺物出土状況図・平面図・断面図



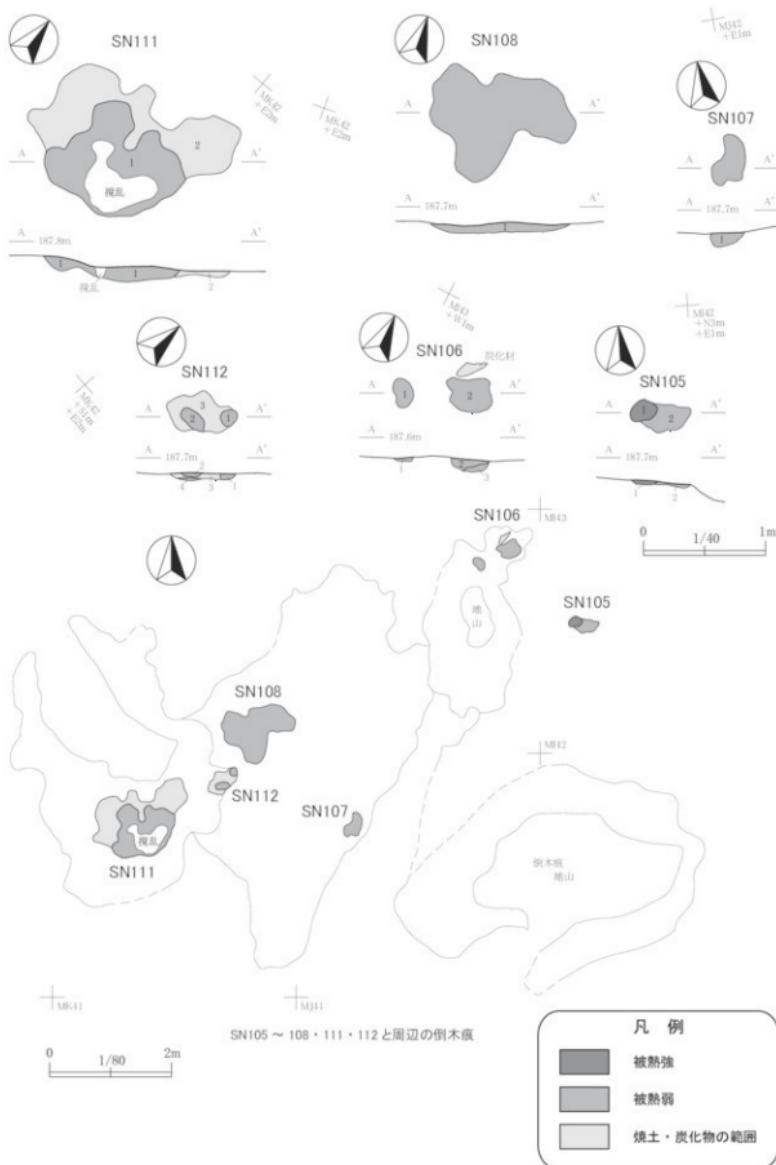
第18図 SK94・97・101・103・109・110土坑 平面図・断面図



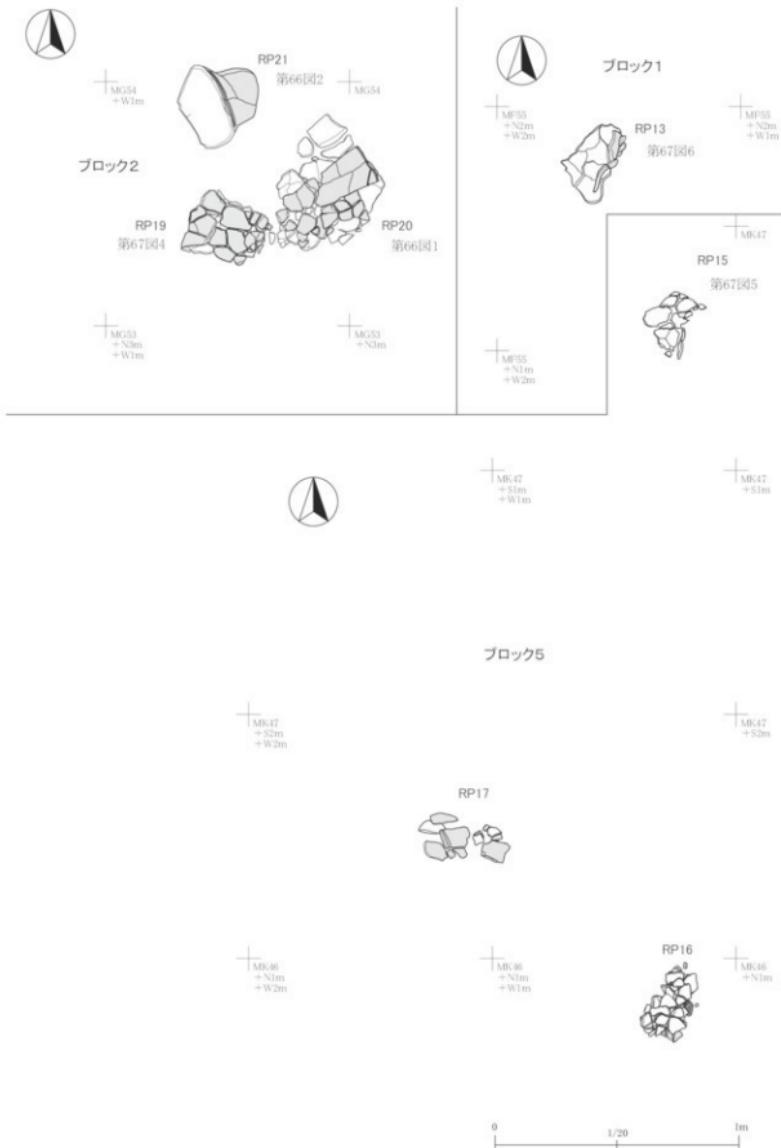
第19図 SKF26・31・68・72・99 フラスコ状土坑 平面図・断面図



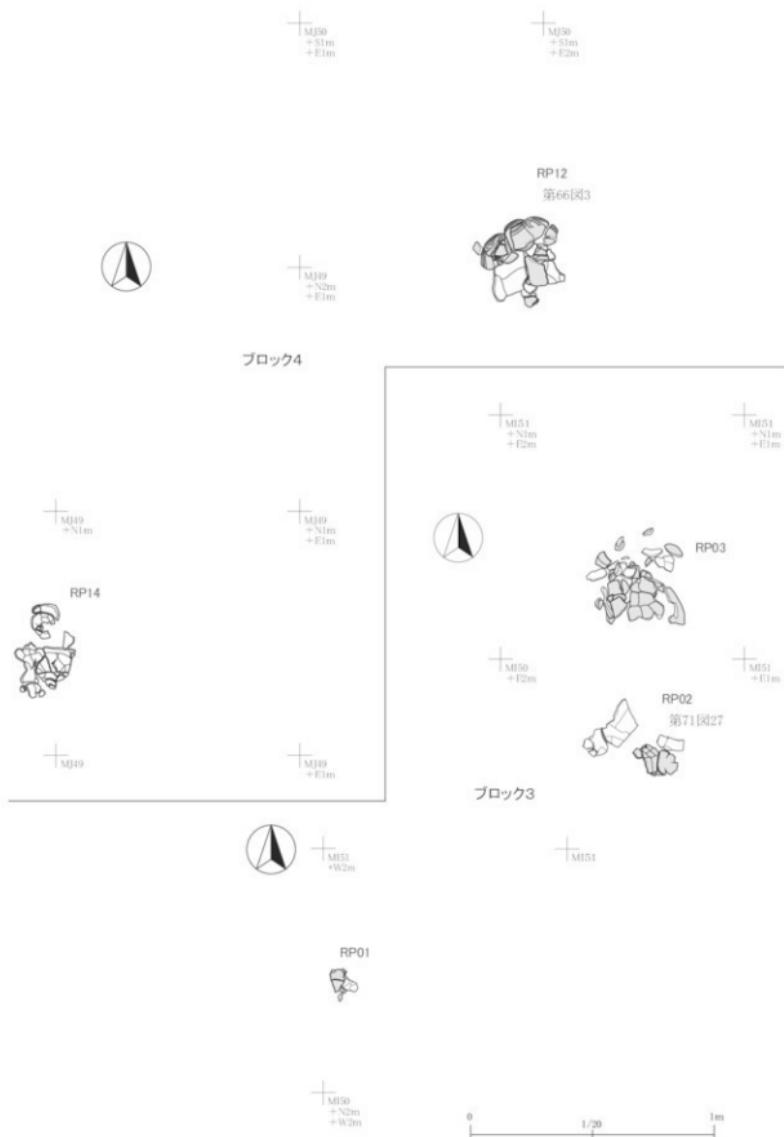
第20図 S N66・79・88・92・93・102鏡土構造 平面図・断面図



第21図 SN105～108・111・112焼土遺構 平面図・断面図



第22図 遺構外土器出土状況図（1）



第23図 遺構外土器出土状況図（2）

第3表 遺構土層注記一覧（1）

番号	%	地質	土色	目立	上部	下部	割合	割合	記述	記入人物
SI	95	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	3	炭化物質 (径2~5mm) 1%, 地山 (径1mm) 5%, 黑褐色土 (径1mm) 7%			
	2 黄褐色	7.5YR4/4	SICL 2	3	4	炭化物質 (径2~5mm) 2%, 地山 (径1mm) 20%				
SI	P1	1 黄褐色	10YR4/3	SICL 2	3	4	地山 (径1mm) 3%			
	2 黄褐色	10YR6/8	SICL 2	2	4	地山 (径1mm) 15%				
	3 黄褐色	10YR3/2	SICL 2	2	3	なし				
	4 黄褐色	10YR6/8	SICL 3	3	5	なし				
SI	P2	1 黄褐色	10YR6/6	SICL 3	3	5	地山 (径1mm) 8%			
	2 黄褐色	10YR6/6	SICL 2	5	5	炭化物質 (径2~5mm) 1%				
SI	P3	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 2	2	5	地山 (径1mm) 20%			
	2 黄褐色	10YR6/6	SICL 3	3	5	炭化物質 (2~5mm) 3%				
SI	P4	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 2	2	3	地山 (径1mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR6/8	SICL 3	3	5	なし				
SI	P5	1 黄褐色	10YR4/3	SICL 2	4	4	地山 (径1mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR4/3	SICL 3	4	4	地山 (径1mm) 20%				
SK	01	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 2	2	4	炭化物質 (径10mm) 4%, 地山 (径1mm) 5%, 明顯黄色 (径1mm) 1%			
	2 黄褐色	10YR3/4	SICL 3	3	5	炭化物質 (径10mm) 以下 1%, 地山 (径5mm) 1%				
SK	03	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 3	3	4	地山 (径1mm) 5%			
SK	05	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	4	炭化物質 (径3~5mm) 5%, 地山 (径5mm) 3%			
SK	12	1 黄褐色	7.5YR3/2	SICL 2	2	2	炭化物質 (径10mm) 1%, 地山 (径1mm) 1%			
	2 黄褐色	10YR3/2	SICL 2	2	3	地山 (径1mm) 25%				
SK	14	1 に少し黄褐色	10YR4/3	SICL 2	2	4	地山 (径1mm) 15%			
	1 に少し黄褐色	10YR4/3	SICL 3	3	3	地山 (径1mm) 8%				
SK	15	2 黄褐色	7.5YR4/6	SICL 3	3	3	炭化物質 (径3~10mm) 5%, 炭化物質 (径20mm) 8%, 地山 (径1mm) 20%			
SK	22	1 黄褐色	10YR3/4	SICL 2	2	4	炭化物質 (径2~10mm) 7%, 地山 (径1mm) 20%			
	2 黄褐色	10YR3/4	SICL 2	2	3	炭化物質 (径2~10mm) 1%				
SK	33	1 黄褐色	7.5YR4/4	SICL 2	2	2	炭化物質 (径3~10mm) 5%, 地山 (径1mm) 30%			
	2 黄褐色	7.5YR4/6	SICL 3	3	2	炭化物質 (径3~20mm) 5%, 地山 (径1mm) 20%				
SK	39	2 黄褐色	10YR3/2	SICL 3	3	2	地山 (径1mm) 20%			
	3 黄褐色	10YR3/3	SICL 3	3	2	黑色砂土 (径1~3mm) 20%				
SK	41	1 に少し黄褐色	10YR4/3	SICL 3	4	4	炭化物質 (径2mm) 5%			
	2 に少し黄褐色	10YR5/4	SICL 3	3	4	炭化物質 (径5mm) 3%				
SK	43	1 黄褐色	10YR3/4	SICL 4	2	2	炭化物質 (径1~2mm) 3%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 4	2	2	炭化物質 (径2mm) 3%				
SK	44	1 黄褐色	10YR3/4	SICL 4	2	2	炭化物質 (径2~10mm) 3%, 地山 (径2mm) 3%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 4	4	3	なし				
SK	45	1 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	2	2	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 地山 (径10~20mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	2	3	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 地山 (径10~20mm) 5%				
SK	56	1 黄褐色	10YR4/3	SICL 2	2	2	炭化物質 (径1~2mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	4	5~5	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 地山 (径1mm) 10%, 黄褐色砂・小石 (径3~15mm) 1%				
SK	64	1 黄褐色	10YR5/8	SICL 2	3	5	炭化物質 (径2~5mm) 5%			
	2 黄褐色	7.5YR4/4	SICL 3	3	4	地山 (径1mm) 7%				
SK	67	1 黄褐色	10YR4/6	SICL 2	2	2	地山 (径1~10mm) 7%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	2	2	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 黑褐色砂 (径1~20mm) 5%				
SK	68	1 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	2	2	炭化物質 (径2~20mm) 5%, 地山 (径1mm) 10%			
	2 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	2	3	炭化物質 (径2~5mm) 5%				
SK	69	1 黄褐色	7.5YR4/4	SICL 3	3	4	地山 (径1~10mm) 7%			
	2 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	2	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 地山 (径1mm) 20%				
SK	77	1 に少し黄褐色	10YR3/2	SICL 2	2	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径2~5mm) 2%			
	2 黄褐色	10YR3/2	SICL 2~3	2~3	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径2~5mm) 1%				
SK	78	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	4	炭化物質 (径2~10mm) 5%, 黑褐色砂 (径1mm) 7%			
	2 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	4	炭化物質 (径2~10mm) 5%, 地山 (径1mm) 5%				
SK	80	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	3	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1mm) 5%			
	2 に少し黄褐色	10YR5/4	SICL 2	3	3	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1mm) 15%				
SK	84	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2~3	4~5	4~5	炭化物質 (径1~3mm) 1% 地山 5%			
	2 に少し黄褐色	10YR4/5	SICL 2~3	4~5	4~5	炭化物質 (径1~2mm) 5%				
SK	85	1 黄褐色	10YR4/5	SICL 2~3	4~5	4~5	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~20mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR4/6	SICL 2~3	4~5	4~5	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~20mm) 10%				
SK	86	1 に少し黄褐色	10YR4/3	SICL 2~3	3~4	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径2~5mm) 2%			
	2 黄褐色	10YR4/3	SICL 2~3	3~4	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径2~5mm) 1%				
SK	87	2 黄褐色	10YR3/3	SICL 2~3	2~3	2~3	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~30mm) 2%			
	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 4	3	3	地山 (径1~5mm) 5%				
SK	89	2 黄褐色	10YR2/2	SICL 4	4	4	炭化物質 (径1mm) 5%, 地山 (径1~10mm) 20%, 砂1%			
	3 黄褐色	10YR6/8	SICL 4	3	3	黑褐色土 (径10mm) 3%, 地山 (径1~10mm) 15%				
SK	90	1 黄褐色	10YR2/2	SICL 2	2	3	地山 (径1~20mm) 10%			
	2 黄褐色	10YR2/2	SICL 2	4	4	炭化物質 (径1~2mm) 5%				
SK	94	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 2	4	4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 5%			
	2 黄褐色	10YR4/5	SICL 2	3~3	4~4	炭化物質 (径1~3mm) 1% 地山 5%				
SK	95	1 黄褐色	10YR4/5	SICL 2	4	5~5	炭化物質 (径1~2mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR4/5	SICL 2	4	5~5	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~5mm) 2%				
SK	96	1 黄褐色	10YR2/3	SICL 3	3	3	地山 (径1mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR2/3	SICL 3	3	3	地山 (径1mm) 5% ~ 6%				
SK	97	2 黄褐色	10YR4/4	SICL 3	3	3	地山 (径1mm) 5% ~ 6%			
	1 黄褐色	10YR2/3	SICL 3	3	3	地山 (径1mm) 5% ~ 6%				
SK	100	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2~3	3~4	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~10mm) 20%			
	2 黄褐色	10YR3/3	SICL 2~3	4~4	4~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~10mm) 20%				
SK	101	1 黑褐色	10YR2/3	SICL 4	3	3	炭化物質 (径1~3mm) 5%, 地山 (径1~20mm) 5%			
	2 黄褐色	10YR3/3	SICL 4	4	4	地山 (径1~10mm) 20%				
SK	103	1 黄褐色	10YR4/6	SICL 3	3	4	炭化物質 (径1~3mm) 5%, 地山 (径1mm) 10%			
	2 黄褐色	10YR4/6	SICL 4	4	5	炭化物質 (径1~15mm) 5%, 地山 (径1mm) 20%				
SK	104	1 黄褐色	10YR4/6	SICL 4	5	5	炭化物質 (径1~15mm) 5%, 地山 (径1mm) 20%			
	2 黄褐色	10YR4/4	SICL 3	5	5	炭化物質 (径1~20mm) 5%, 地山 (径1mm) 5%				
SK	109	1 黄褐色	10YR4/4	SICL 2~3	3~4	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~20mm) 5%, 地山砂・塊 (径1~20mm) 10%			
	2 黄褐色	10YR4/4	SICL 2~3	3~4	3~4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山砂・塊 (径1~20mm) 5%, 地山砂・塊 (径1~20mm) 10%				
SK	110	1 黑褐色	10YR7/1	SICL 3	3	3~4	地山 (径1~10mm) 7%			
	2 黑褐色	10YR7/1	SICL 3	3	3~4	地山 (径1~10mm) 7%				
SK	119	3 黄褐色	10YR3/2	SICL 3	2	2	なし			
	3 黄褐色	10YR3/2	SICL 3	2	2	なし				
SK	26	1 黄褐色	7.5YR4/6	SICL 2	3	3	炭化物質 (径10mm) 5%, 地山 (径1mm) 5%			
	1 黄褐色	10YR3/3	SICL 2	2	2	炭化物質 (径2~2mm) 1%, 地山 (径1mm~以下) 2~3%				
SK	31	2 黄褐色	10YR3/4	SICL 2	2	3	地山 (径1mm) 1%			
	4 黄褐色	10YR4/4	SICL 2	2	3	地山 (径2~5mm) 5%				
	5 黄褐色	10YR5/6	SICL 2	4	4	炭化物質 (径1~2mm) 5%, 地山 (径1~5mm) 10%				

第4表 遺構土層注記一覧（2）

施設	No.	層位	土色	調査日	上土	粘性	含水量	遺構		地人物
								地物	地物	
SKF	68	1 黒褐色	1/10/R4-4	SCL1	3	泥質物質 (径1mm以上) 1%, 地山砂 (径1~5mm) 10%				
		2 黄褐色	1/10/R3-3	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 2~3%, 地山砂 (径1~5mm) 5%				
		3 黄褐色	1/10/R3-8	SCL1	3	泥質物質 (径1~5mm) 10%				
		4 黄褐色	1/10/R3-4	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 1%, 地山砂 (径2~5mm) 2~3%				
		5 黄褐色	1/10/R4-6	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 5%				
		6 黄褐色	1/10/R3-8	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 2~3%, 地山砂 (径1mm) 10%				
		7 黑褐色	1/10/R2-3	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 1%, 地山砂 (径1mm) 1%, 黄褐色 12%				
SKF	72	1 黒色	1/10/R2-1	SCL1	2	泥質物質 (径1mm) 10%				
		2 黄褐色	1/10/R5-6	SCL1	2	泥質物質 (径1mm) 10%				
		3 黄褐色	1/10/R4-6	SCL1	2	泥質物質 (径1~10mm) 5%, 地山砂 (径1~5mm) 10%				
		4 黄褐色	1/10/R5-6	SCL1	3	泥質物質 (径1~3mm) 3%, 地山砂 (径1mm) 10%				
		5 黄褐色	1/10/R4-6	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 20%, 地山砂 (径1mm) 10%, 黄褐色 (径1mm) 10%				
		6 黄褐色	1/10/R5-6	SCL1	3	泥質物質 (径1~2mm) 15%, 地山砂 (径1mm) 10%, 黄褐色 (径1mm) 10%				
		7 黄褐色	1/10/R4-6	SCL1	2	泥質物質 (径1~2mm) 12%, 黄褐色 (径1mm) 10%				
SKF	99	1 黄褐色	1/10/R3-3	SCL1	3~4	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (径1~5mm) 5%				
		2 黄褐色	1/10/R2-2	SCL1	2~3	泥質物質 (径1~3mm) 2%, 地山砂 (径1~5mm) 2%				
		3 黄褐色	1/10/R3-3	SCL1	3	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (径1~5mm) 30%				
		4 黑褐色	1/10/R3-2	SCL1	3~4	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (径1~5mm) 25%				
		5 黑褐色	1/10/R2-5	SCL1	3	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (径1~5mm) 5%				
		6 黑褐色~一暗褐色	1/10/R3-2.5	SCL1	3~4	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (徑1~5mm) 30%				
		7 黄褐色	1/10/R3-3	SCL1	3	泥質物質 (径1~3mm) 15%, 泥質物質 (徑1~5mm) 5%				
SN	66	1 黑褐色	5/YR4-8	SCL1	5	泥質物質 (径0.5mm) 5%, 地山砂 (径3mm) 1%				
SN	79	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL1	1	泥質物質 (径1~10mm) 5%, 地山砂 (径1~8mm) 15%				
SN	88	1 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL1	3	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 地山砂 (徑1~3mm) 2%				
SN	92	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL1	4	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 地山砂 (徑1~5mm) 10%				
SN	93	2 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL1	2~3	泥質物質 (徑1~3mm) 2%, 泥質物質 (徑3~5mm) 25%				
SN	102	1 黑褐色	1/10/R3-2	SCL1	2	泥質物質 (徑1~5mm) 2%, 地山砂 (徑1~5mm) 2%				
SN	105	1 黄褐色	7.5/YR4-6	SCL1	3	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 泥質物質 (徑1~5mm) 30%				
SN	106	2 黑褐色	1/10/R2-3	SCL1	4	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 地山砂 (徑1~5mm) 10%				
SN	107	1 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL1	3	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 泥質物質 (徑1~5mm) 10%				
SN	108	1 明黄色	7.5/YR4-4	SCL1	3	泥質物質 (徑1~3mm) 20%, 地山砂 (徑1~10mm) 5%, 黃褐色物質 (徑20~30mm) 5%				
SN	111	1 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL1	4	泥質物質 (徑1~3mm) 15%, 地山砂 (徑1~2mm) 2%				
SN	112	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL1	5	泥質物質 (徑1~5mm) 5%, 地山砂 (徑1~10mm) 1%				
SKP	06	1 にじみ・黄褐色	1/10/R3-3	SCL2	2	泥質物質 (徑2mm) 5%, 地山砂 (徑1~20mm) 10%				
SKP	07	1 黑褐色	1/10/R3-2	SCL2	2	地山砂 (徑2mm) 10%				
SKP	08	1 黄褐色	1/10/R4-2	SCL2	4	泥質物質 (徑2mm) 3%, 地山砂 (徑2~3mm) 15%				
SKP	09	1 黑褐色	1/10/R3-3	SCL3	3	泥質物質 (徑2mm) 3%				
SKP	10	1 黑褐色	1/10/R3-2	SCL2	4	泥質物質 (徑2mm) 3%, 地山砂 (徑1mm) 30%, にじみ・黃褐色 (徑1mm) 1%				
SKP	11	1 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL1	5	泥質物質 (徑2mm) 3%				
SKP	18	1 黄褐色	1/10/R3-3	SCL2	2	泥質物質 (徑2mm) 20%, 地山砂 (徑1mm) 5%				
SKP	34	1 黄褐色	1/10/R3-3	SCL2	3	泥質物質 (徑2mm) 20%, 地山砂 (徑1mm) 5%				
SKP	36	1 黄褐色	1/10/R3-3	SCL2	4	泥質物質 (徑2mm) 20%, 地山砂 (徑1mm) 5%				
SKP	37	1 黄褐色	7.5/YR4-3	SCL3	3	泥質物質 (徑3mm) 5%, 地山砂 (徑1mm) 5%, 黃褐色 (徑1.5mm) 1.5%				
SKP	38	2 黄褐色	7.5/YR4-4	SCL3	3	泥質物質 (徑3mm) 5%, 地山砂 (徑1mm) 15%				
SKP	39	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL3	3~4	泥質物質 (徑2~5mm) 2%, 地山砂 (徑1~5mm) 20%				
SKP	40	2 黄褐色	1/10/R5-6	SCL3	3	泥質物質 (徑2~7mm) 2%, 地山砂 (徑1mm) 15%, 黃褐色物質 (徑3~6mm) 15%				
SKP	45	1 黑褐色	1/10/R2-3	SCL2	3	泥質物質 (徑3mm) 5%, 地山砂 (徑1mm) 10%				
SKP	55	1 黄褐色	7.5/YR4-6	SCL3	3	黒褐色 1 (徑20mm) 30%				
SKP	56	1 黄褐色	1/10/R3-3	SCL3	3	地山砂 (徑10~20mm) 15%				
SKP	58	1 黑褐色	1/10/R2-2	SCL4	2	泥質物質 (徑1mm) 5%				
SKP	60	1 黄褐色	1/10/R4-6	SCL3	4	泥質物質 (徑2~10mm) 3%, 地山砂 (徑1mm) 1.5%				
SKP	71	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL2	2	泥質物質 (徑1mm) 1.5%				
SKP	75	1 黄褐色	1/10/R2-3	SCL2	3	地山砂 (徑1mm) 3%				
SKP	81	1 黄褐色	1/10/R4-4	SCL1	3	泥質物質 (徑2~10mm) 5%, 地山砂 (徑1mm) 30%, 黃褐色 (徑1mm) 5%				
SKP	82	1 黄褐色	1/10/R6-6	SCL2	5	泥質物質 (徑2~5mm) 1%				
SKP	84	4 明黄褐色	1/10/R6-6	SCL3	3	地山砂 (徑1mm) 3%				
SKP	87	1 黄褐色	1/10/R3-4	SCL1	2	泥質物質 (徑3~10mm) 1%, 地山砂 (徑1mm) 1.5%, 黃褐色 (徑1mm) 30%				
SKP	98	1 黑褐色	1/10/R2-3	SCL10	3	地山砂 (徑5mm) 1%				

遺構土層注記一覧凡例

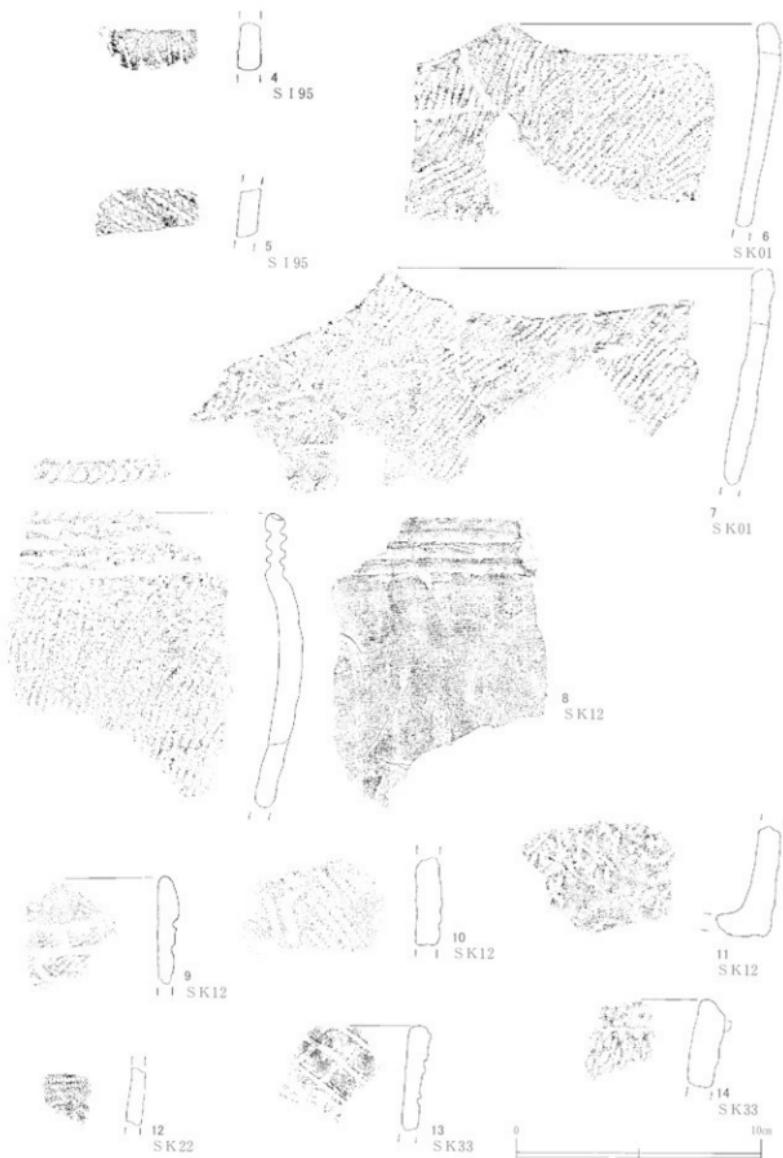
1. 一般地層注記：地層標示上位層、(地層名+地層番号)地層、(地層名+地層番号)地層標示上位層。

2. 「粘性」の表示は、度合いの無い方側から1~5の数字を用いて示した。

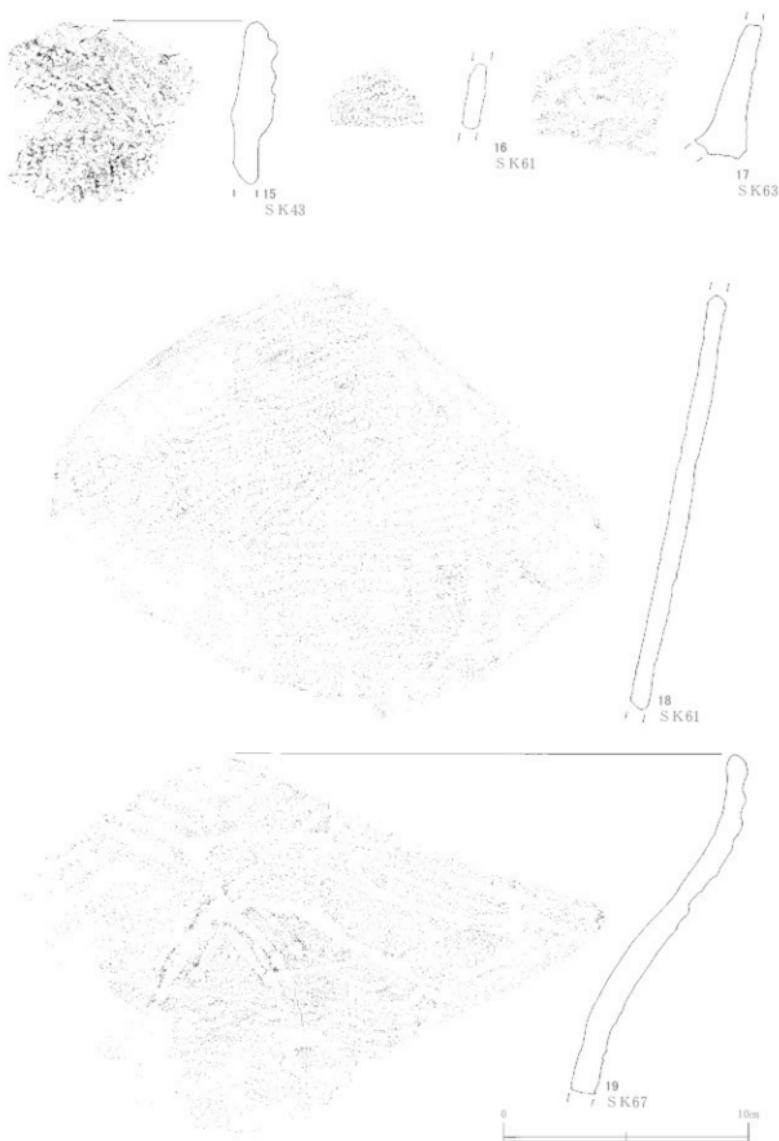
3. 記述欄ににより不明の場合、「-」もしくは「(?)」の記号を用いて示した。



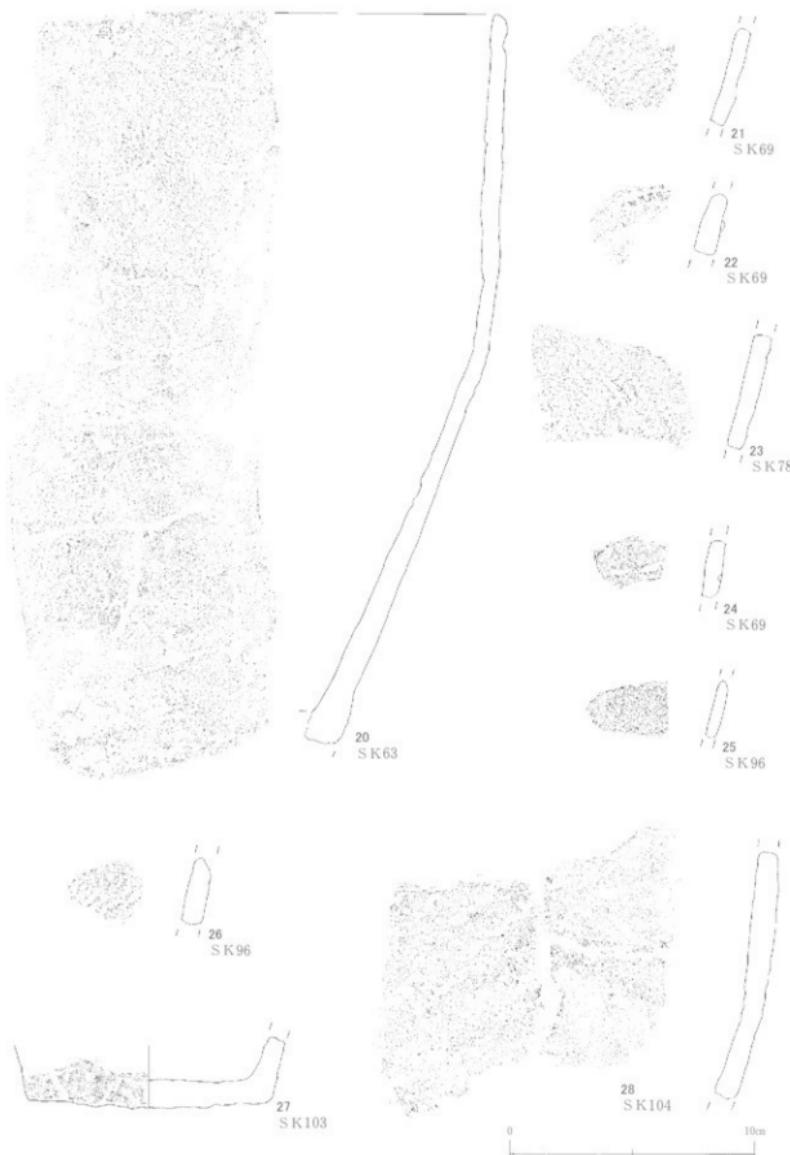
第24図 造構内出土土器（1）



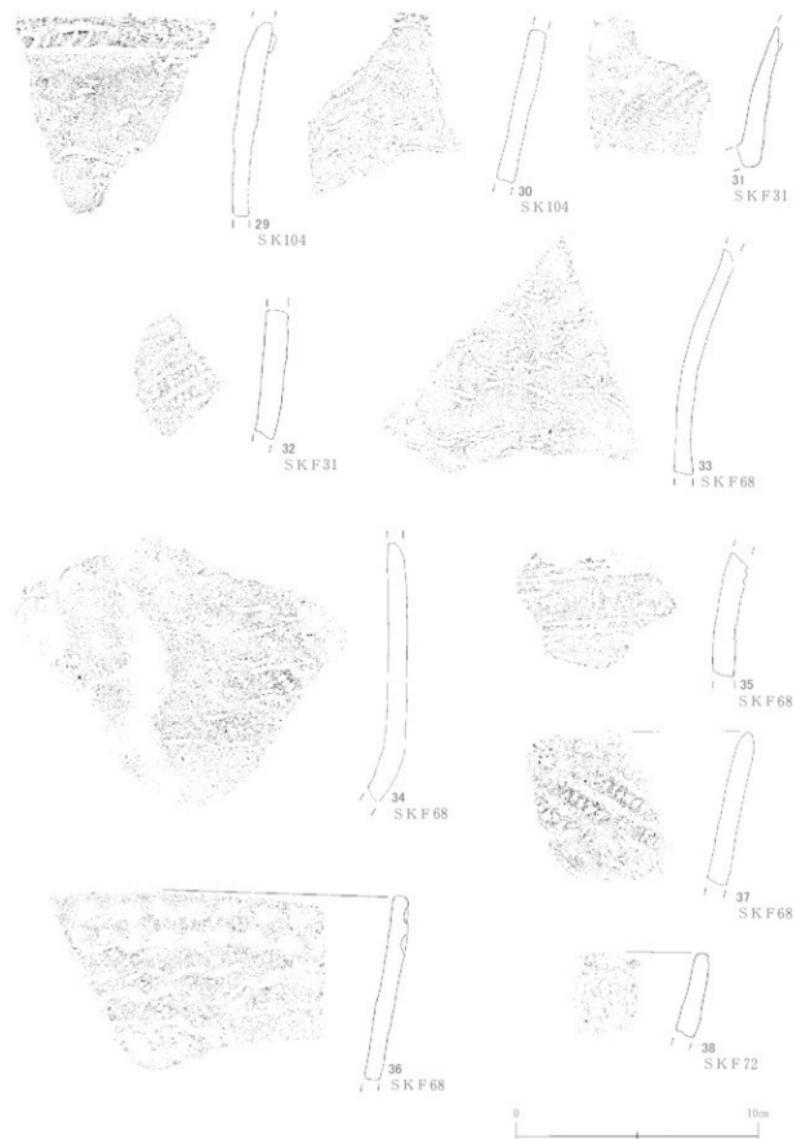
第25図 遺構内出土土器（2）



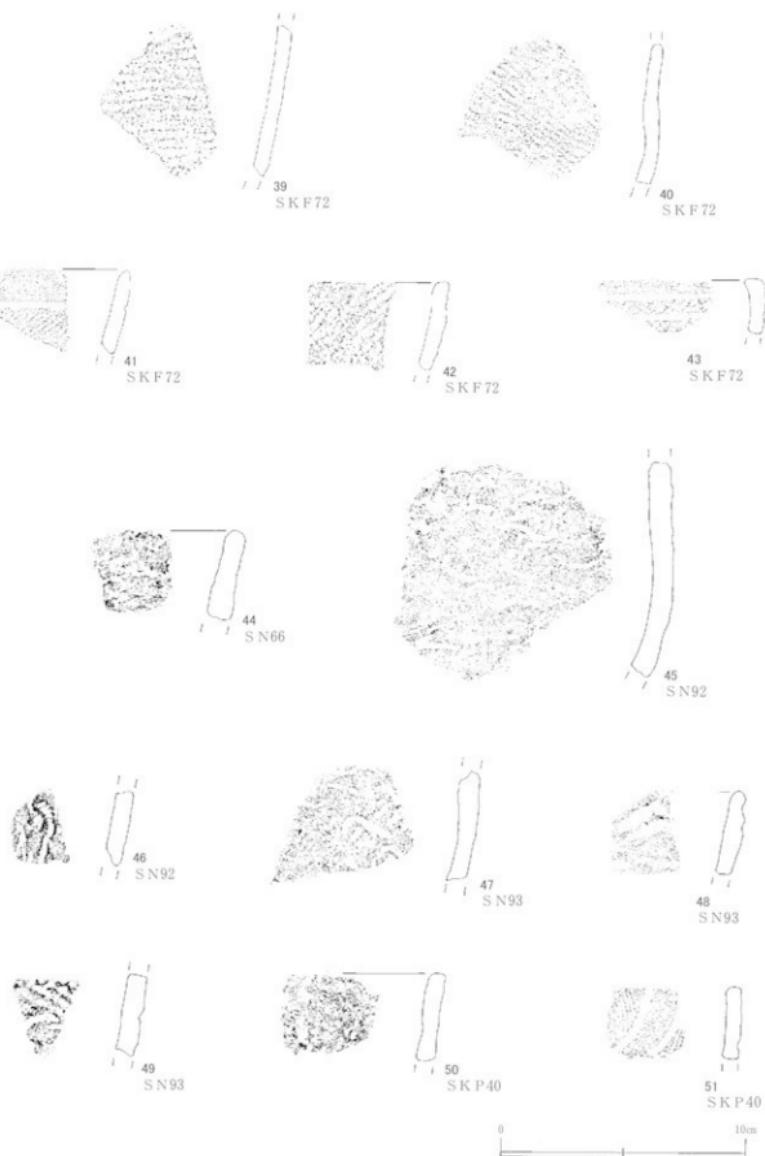
第26図 造構内出土土器（3）



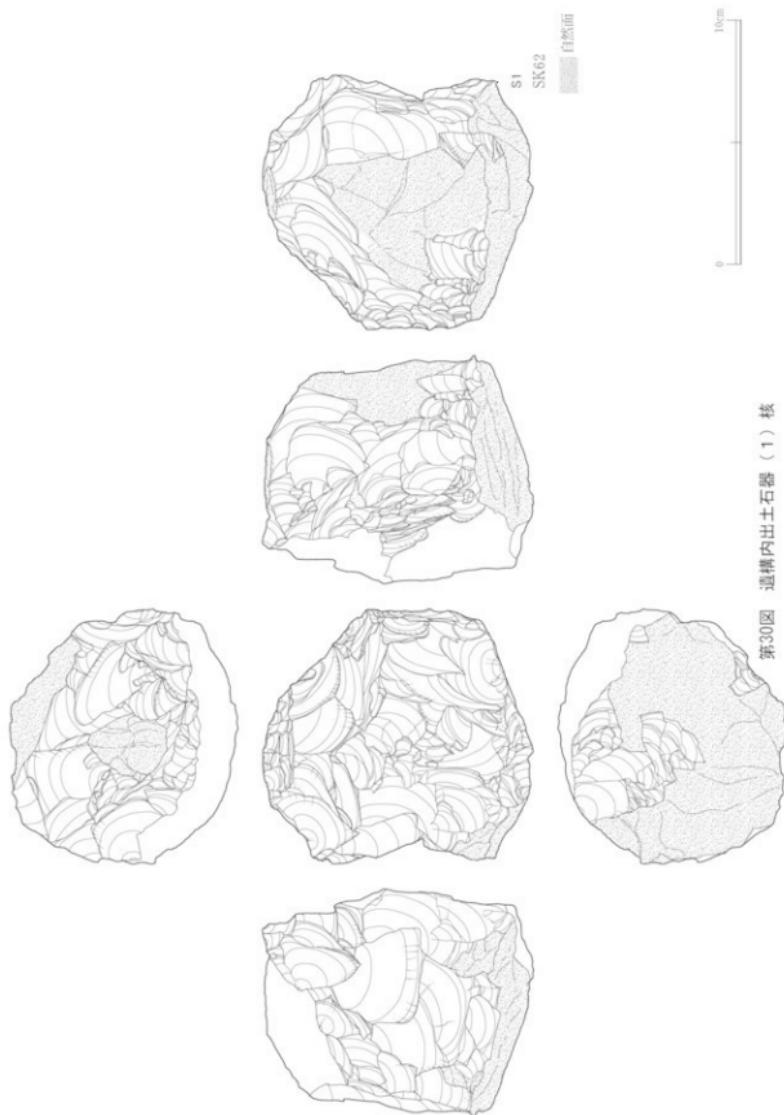
第27図 遺構内出土土器（4）

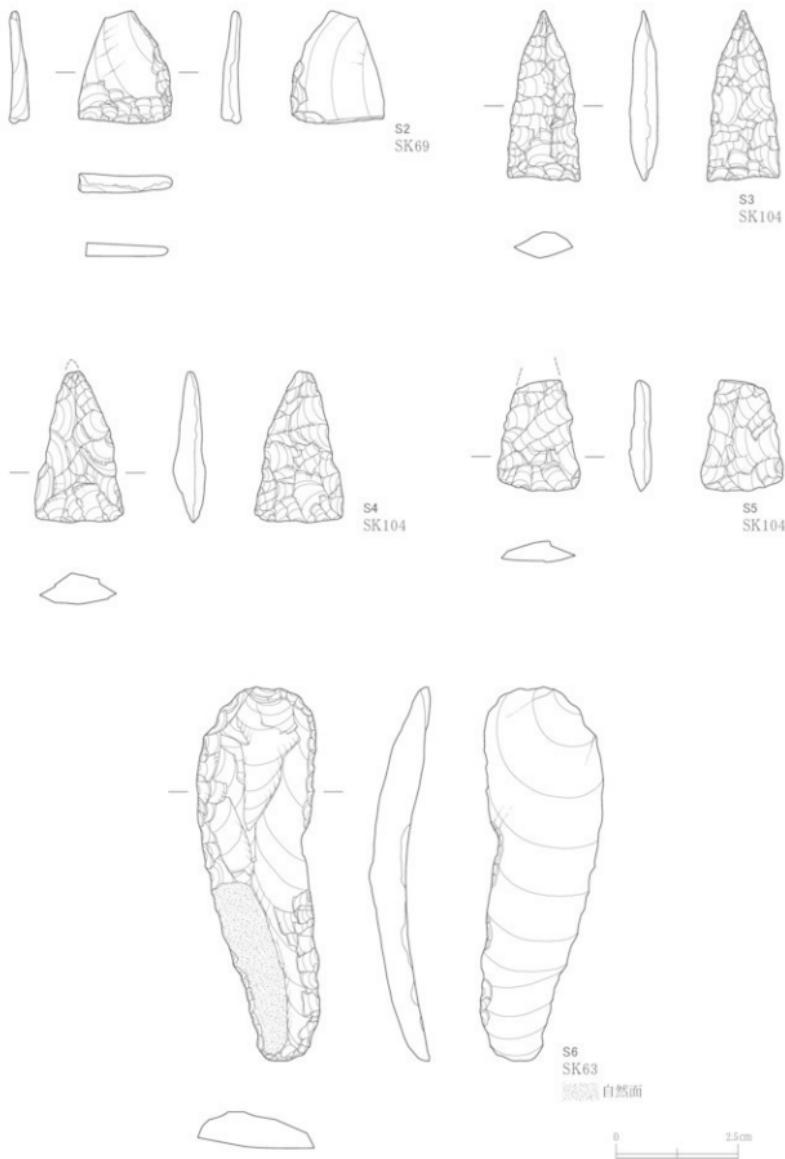


第28図 造構内出土土器（5）

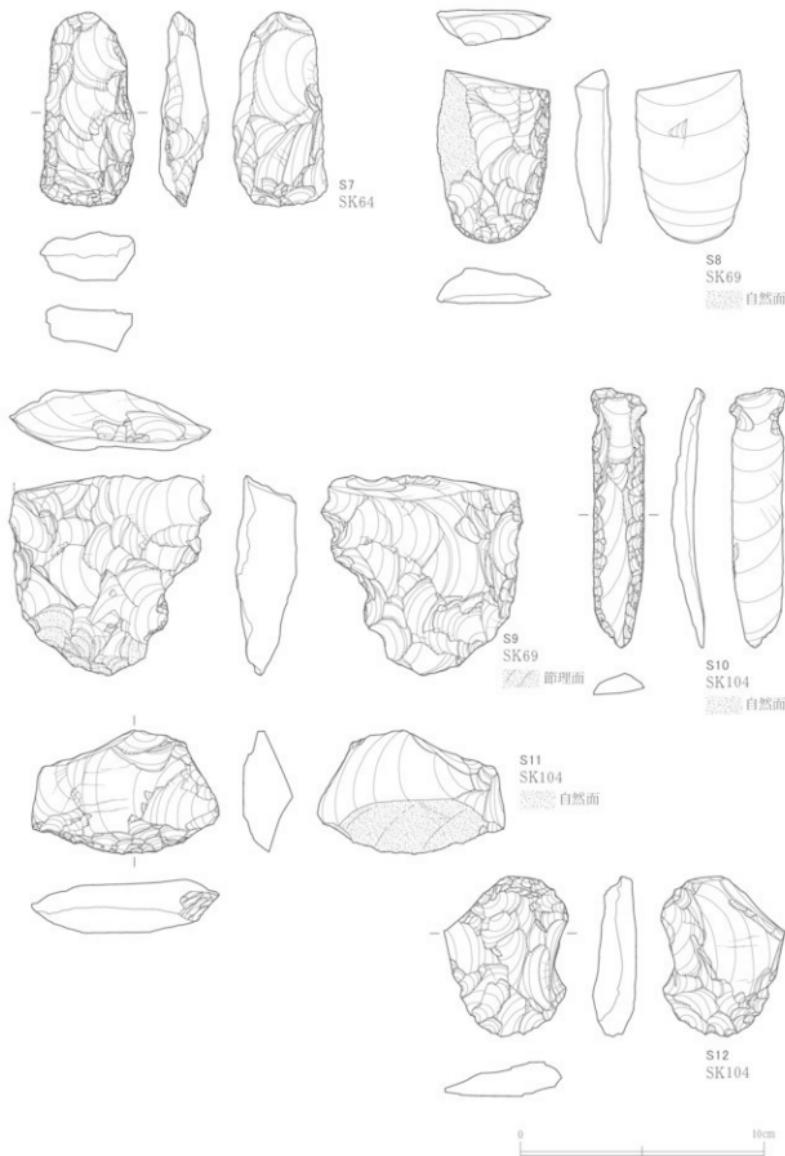


第29図 遺構内出土土器（6）

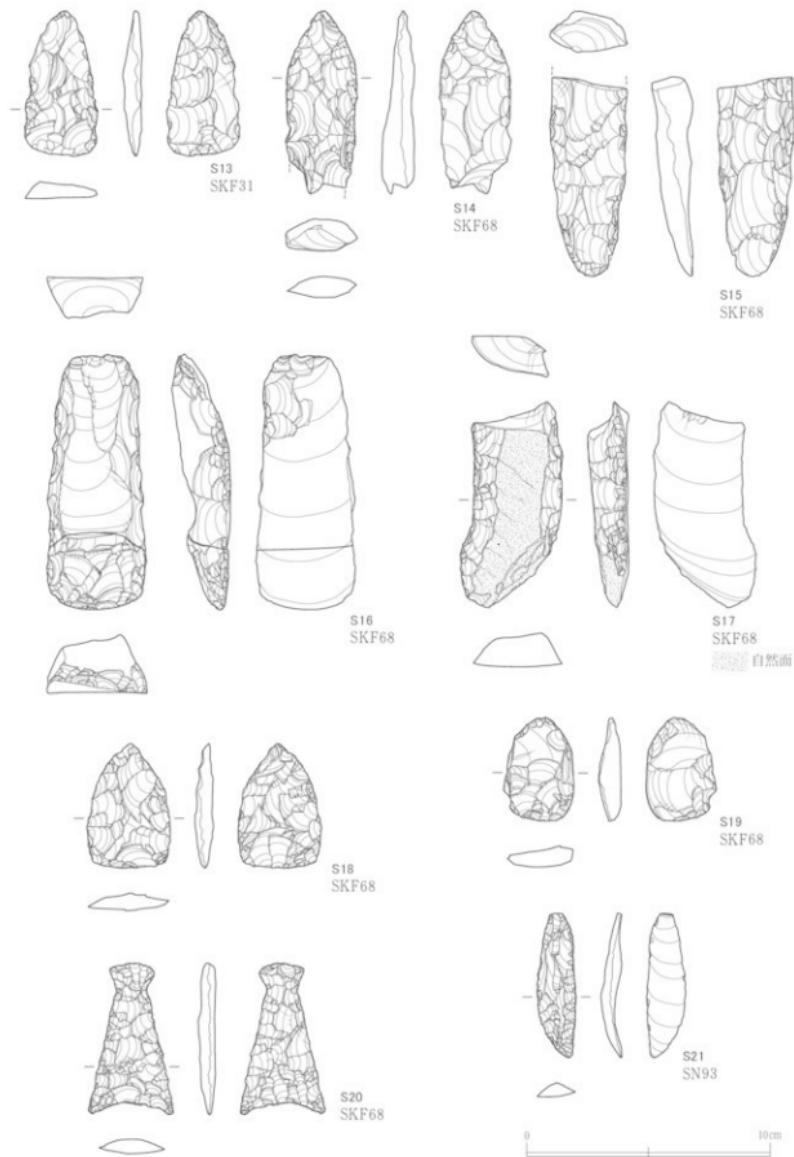




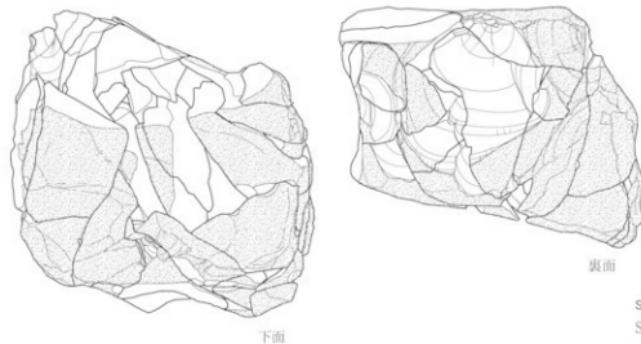
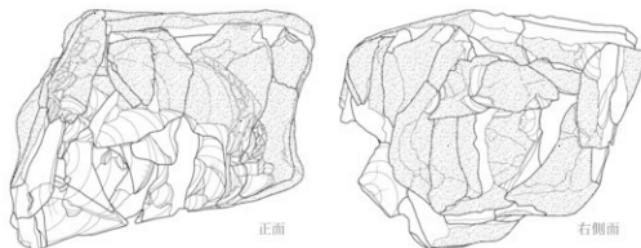
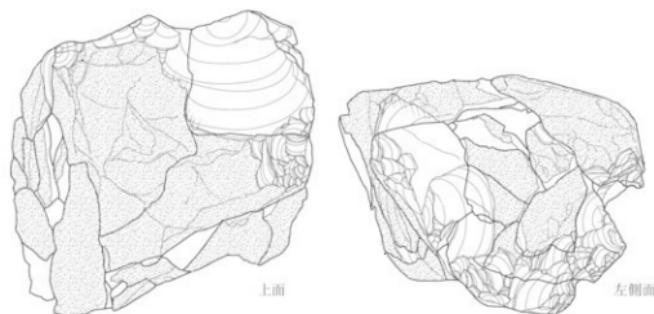
第31図 遺構内出土石器（2）剥



第32図 遺構内出土石器（3）剥・他



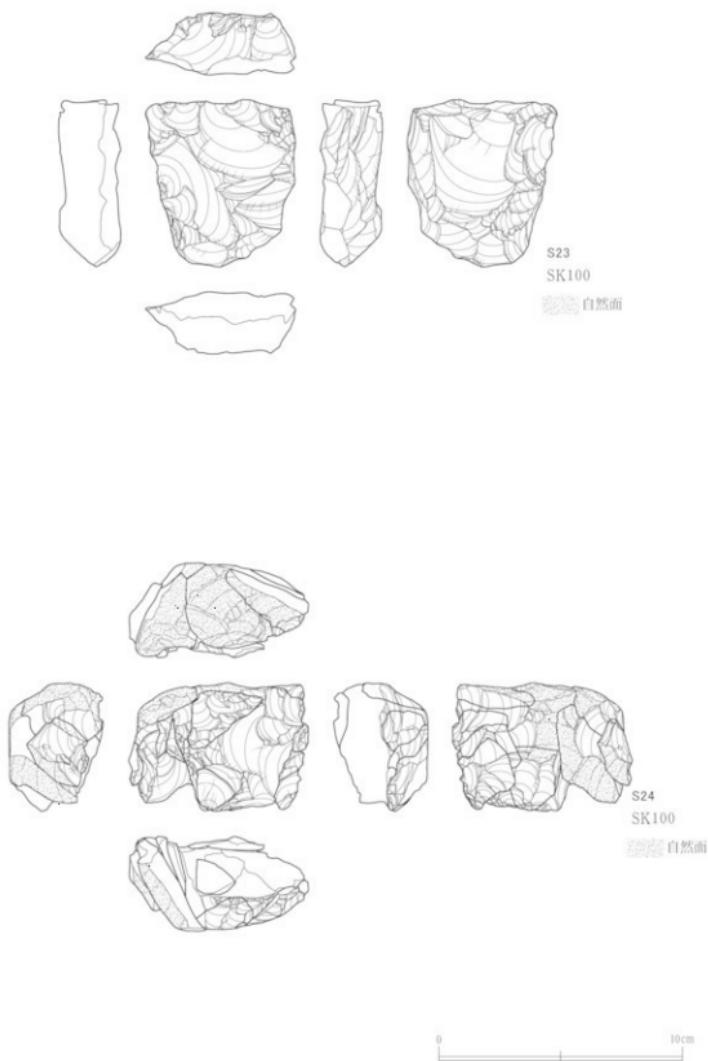
第33図 遺構内出土石器（4）剥・他



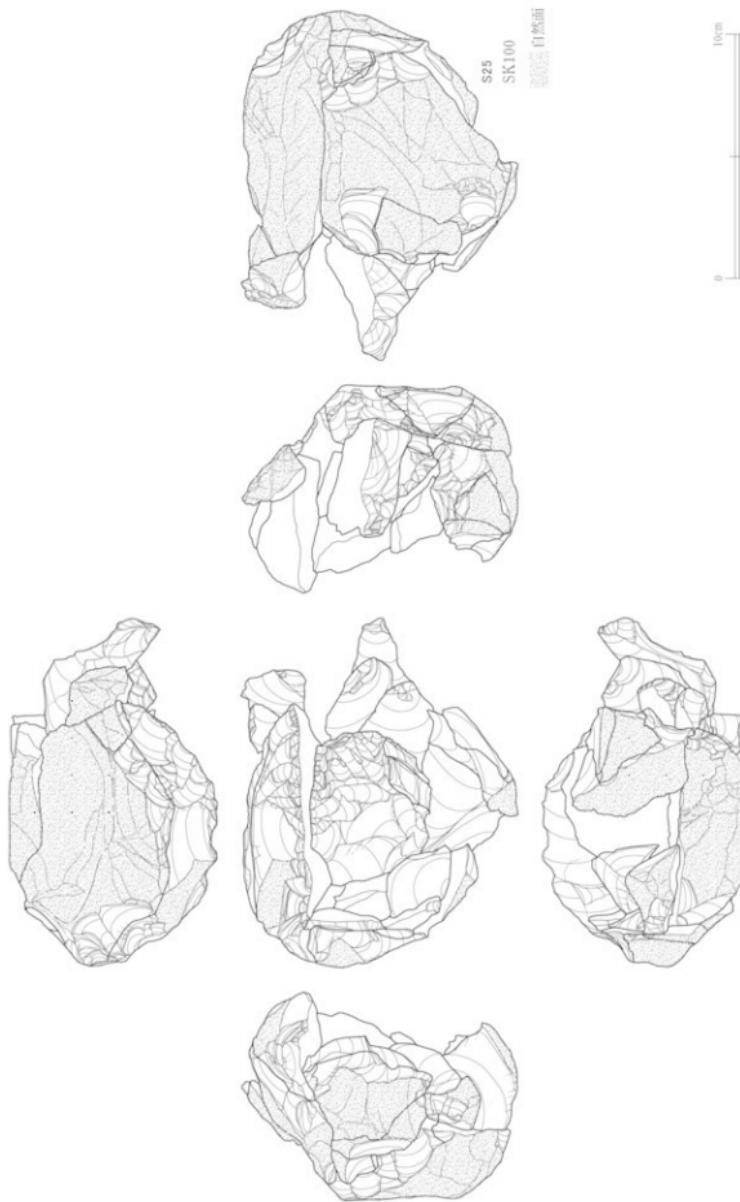
S22
SK100
自然面



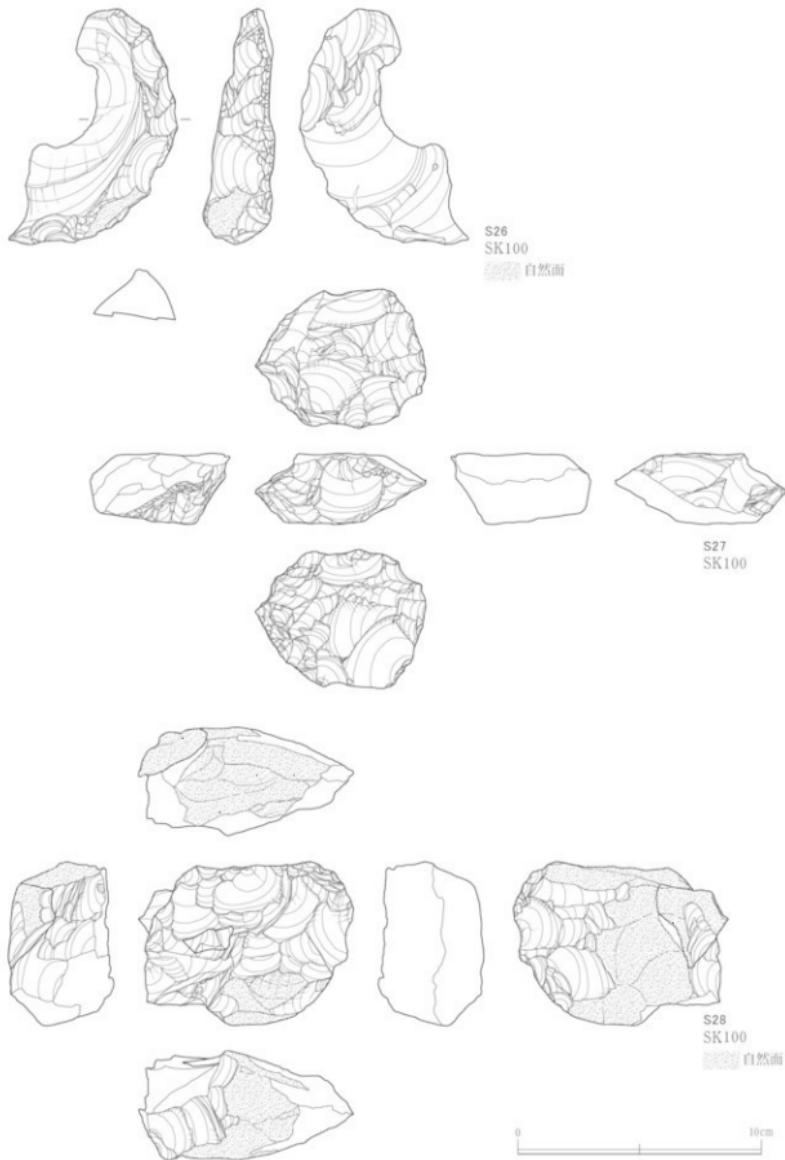
第34図 遺構内出土石器（5）接



第35図 遺構内出土石器（6）核・接

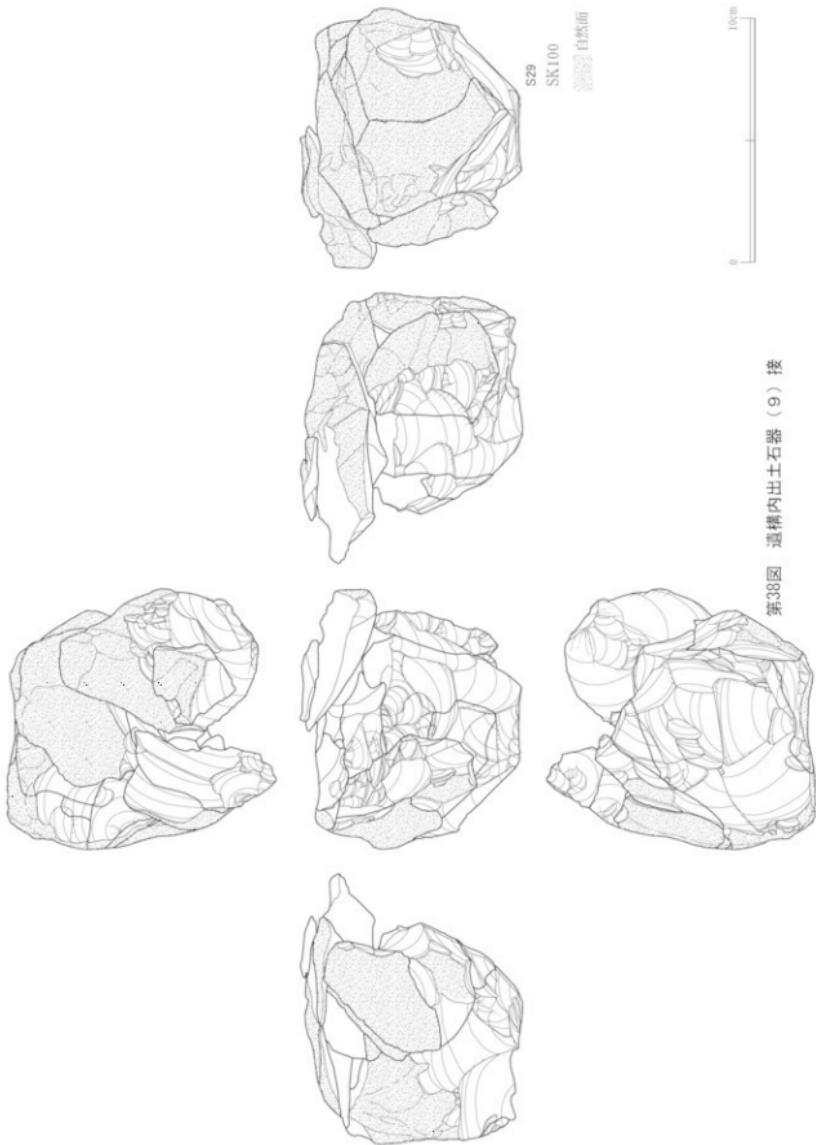


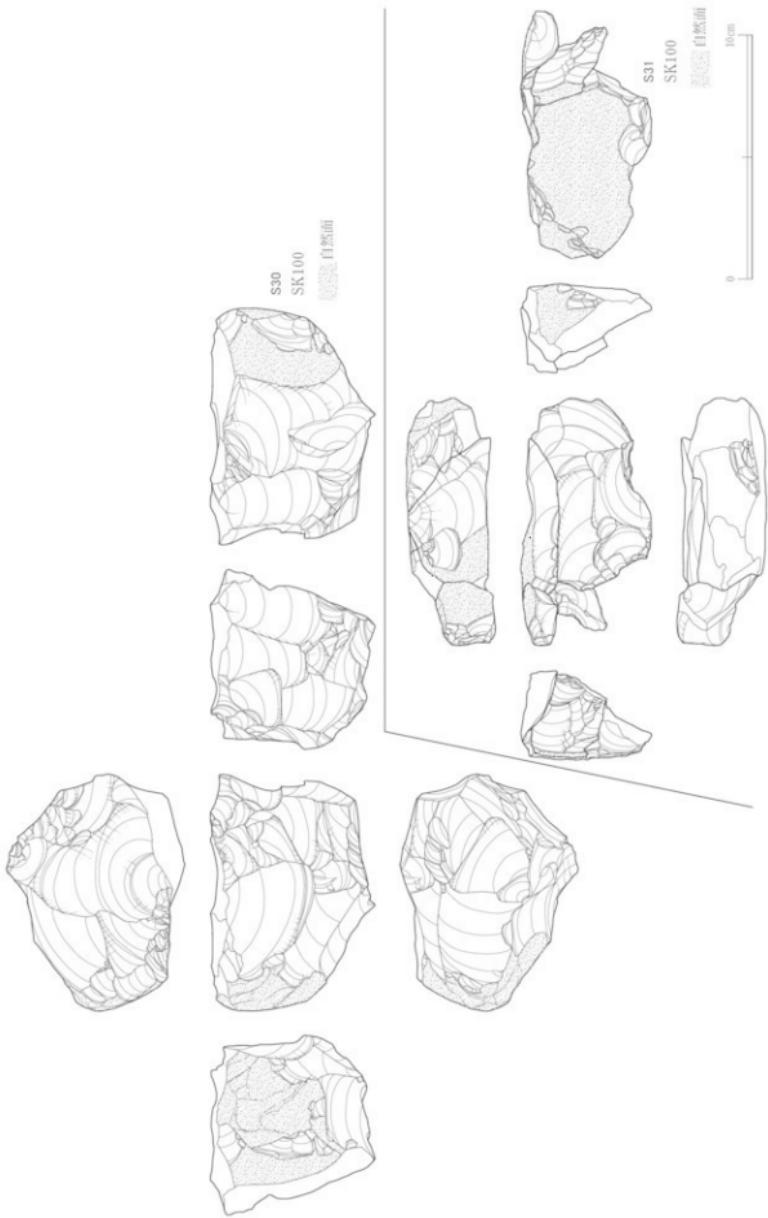
第36図 遺構内出土石器（7）接



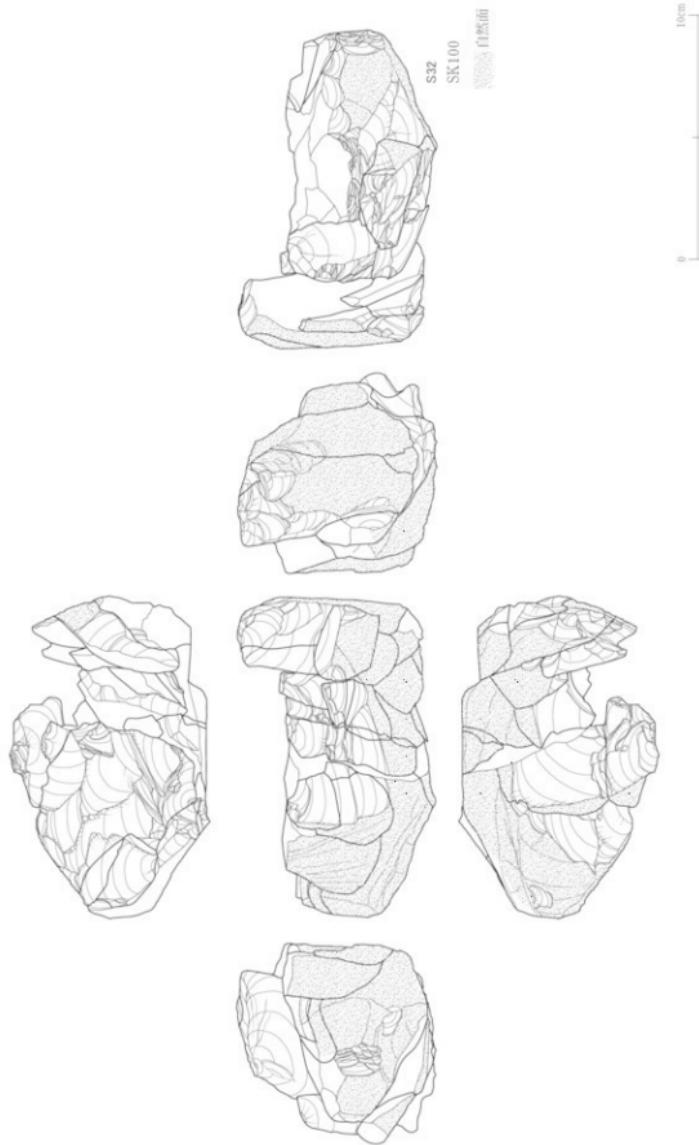
第37図 遺構内出土石器（8）剥・核・接

第38図 遺構内出土土石器（9） 接

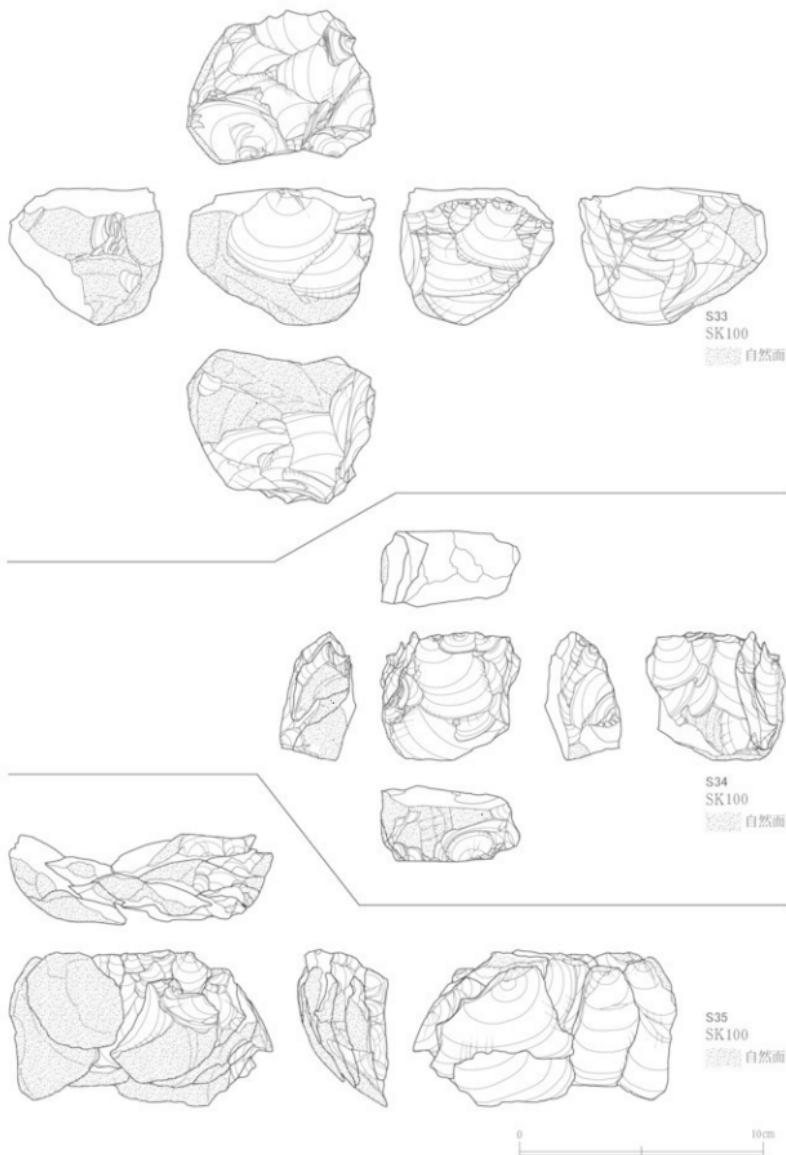




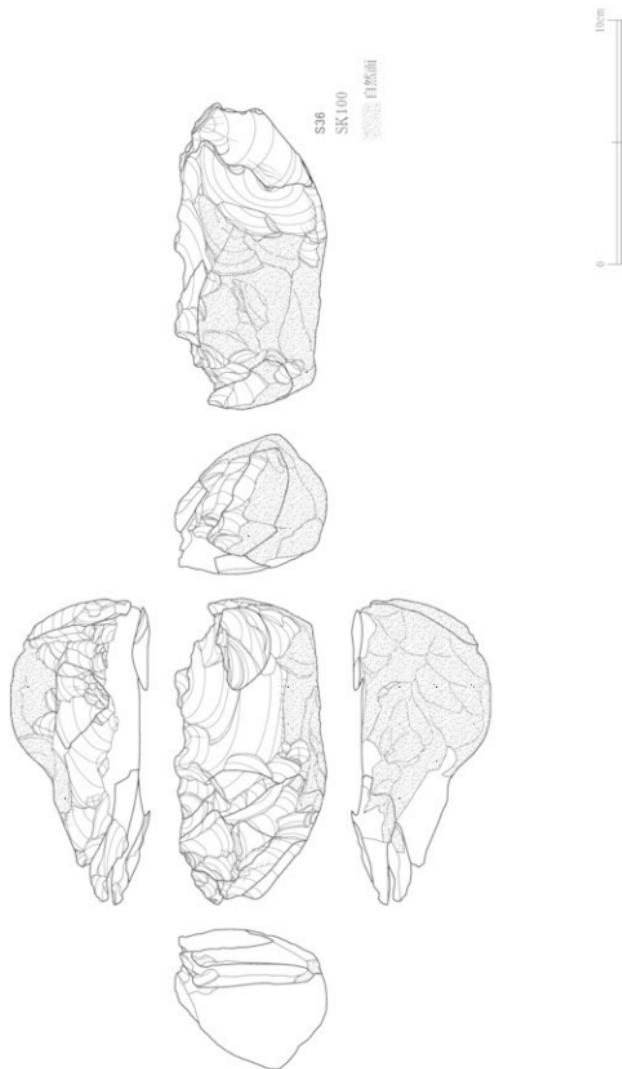
第39図 遺構内出土石器(10)核・接



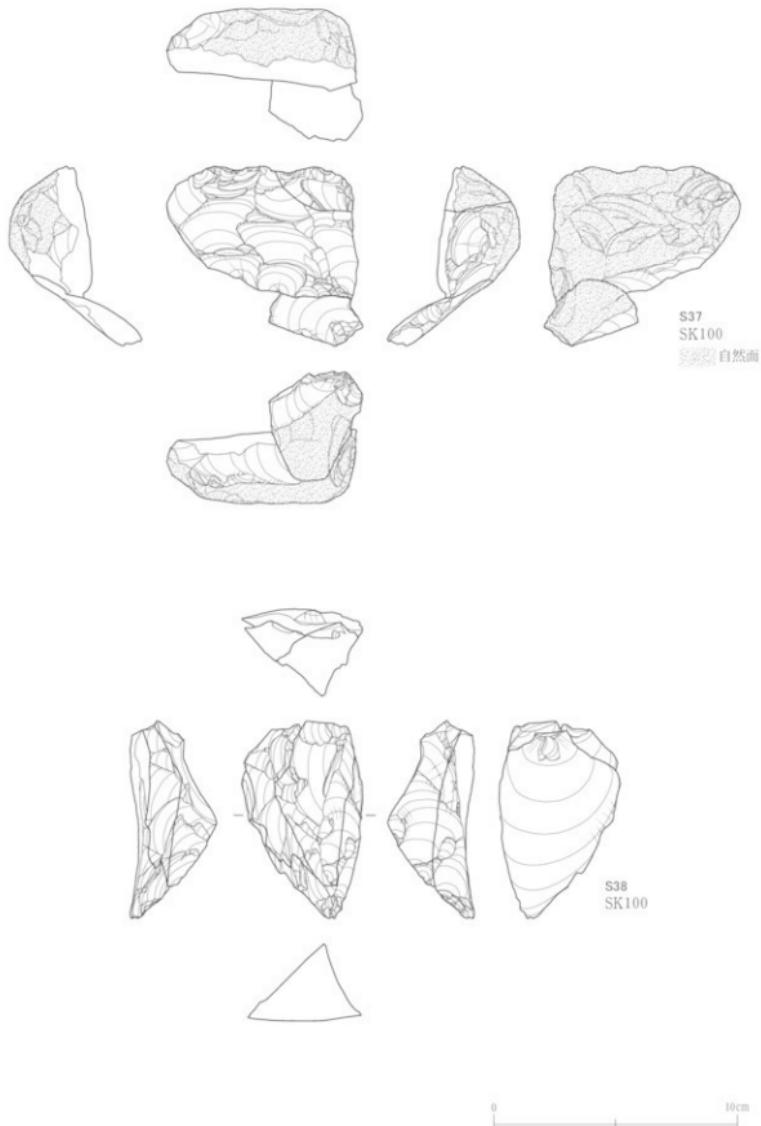
第40図 遺構内出土石器（11）接



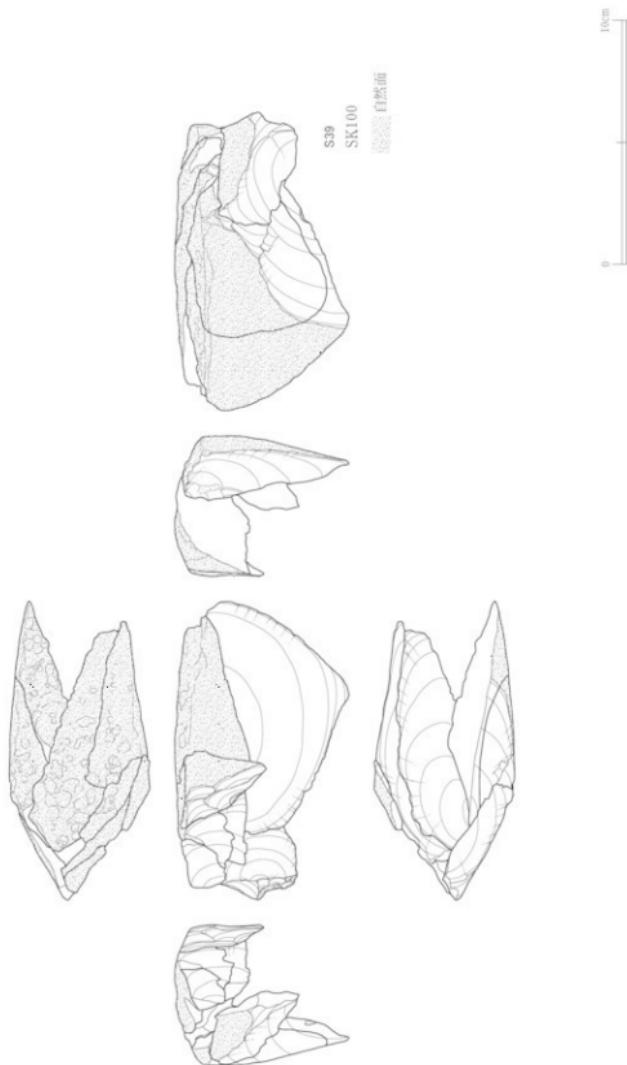
第41図 遺構内出土石器（12）核・接



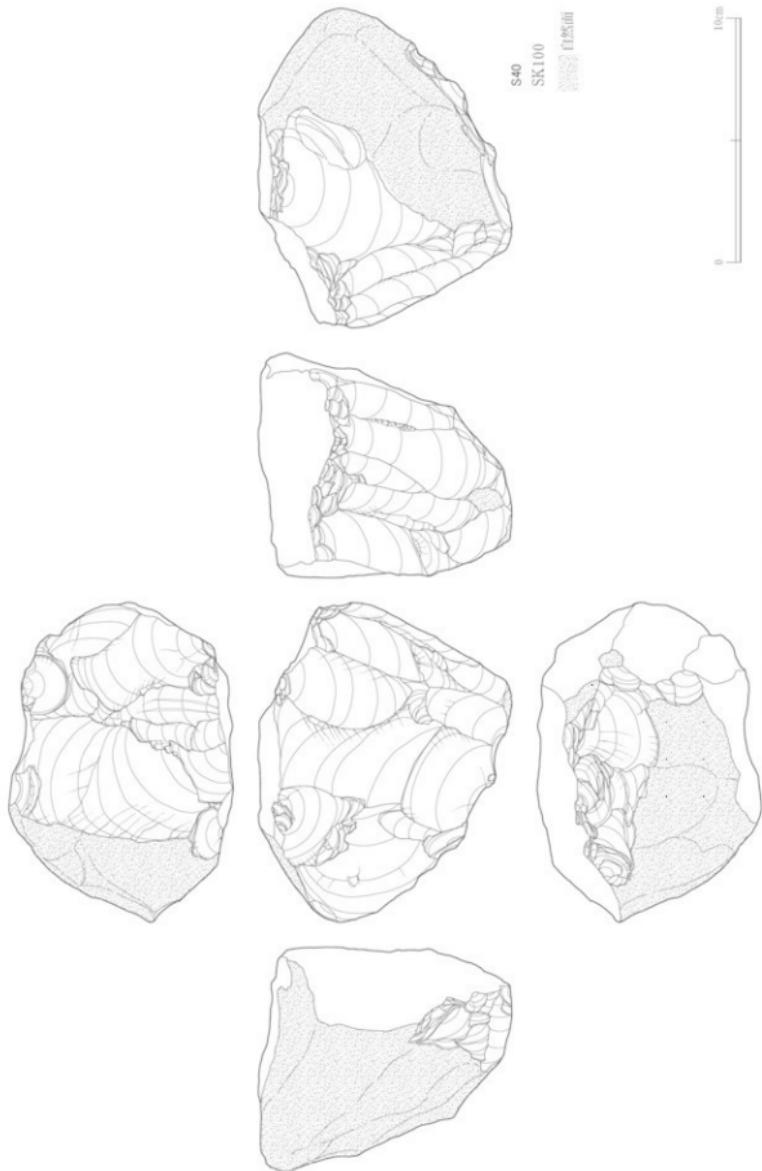
第42図 遺構内出土石器（13）接



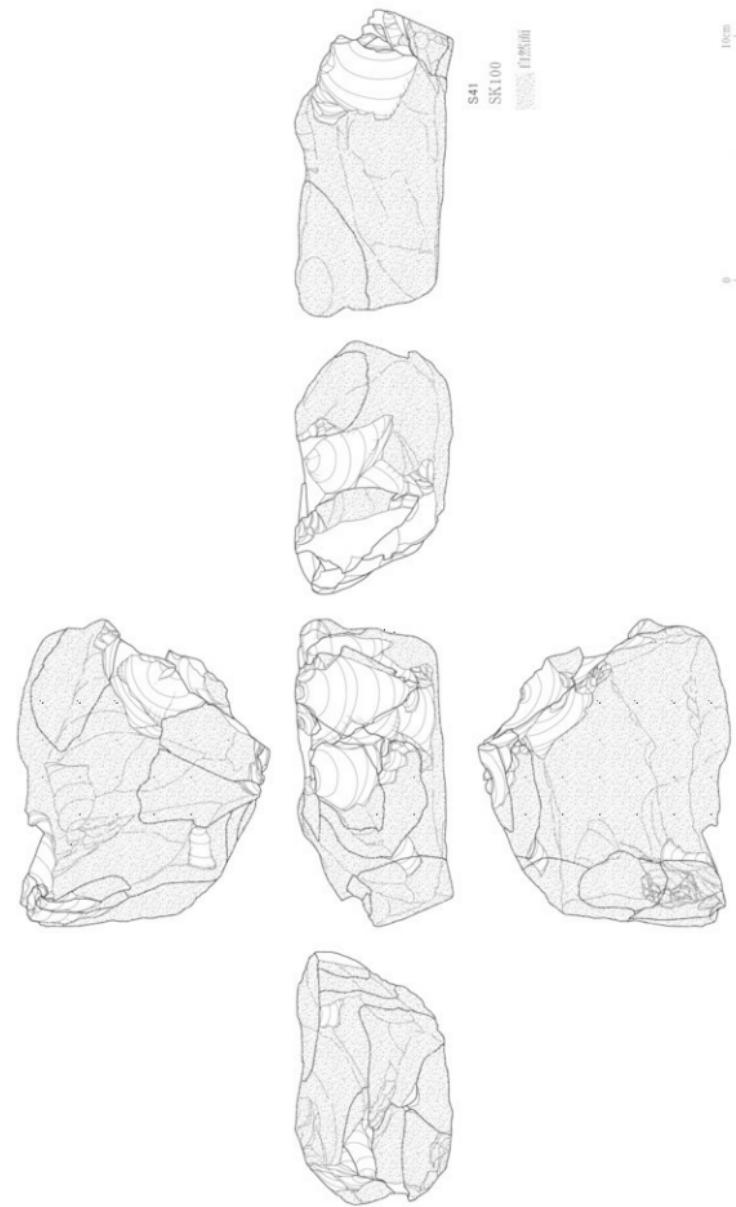
第43図 遺構内出土石器（14）接



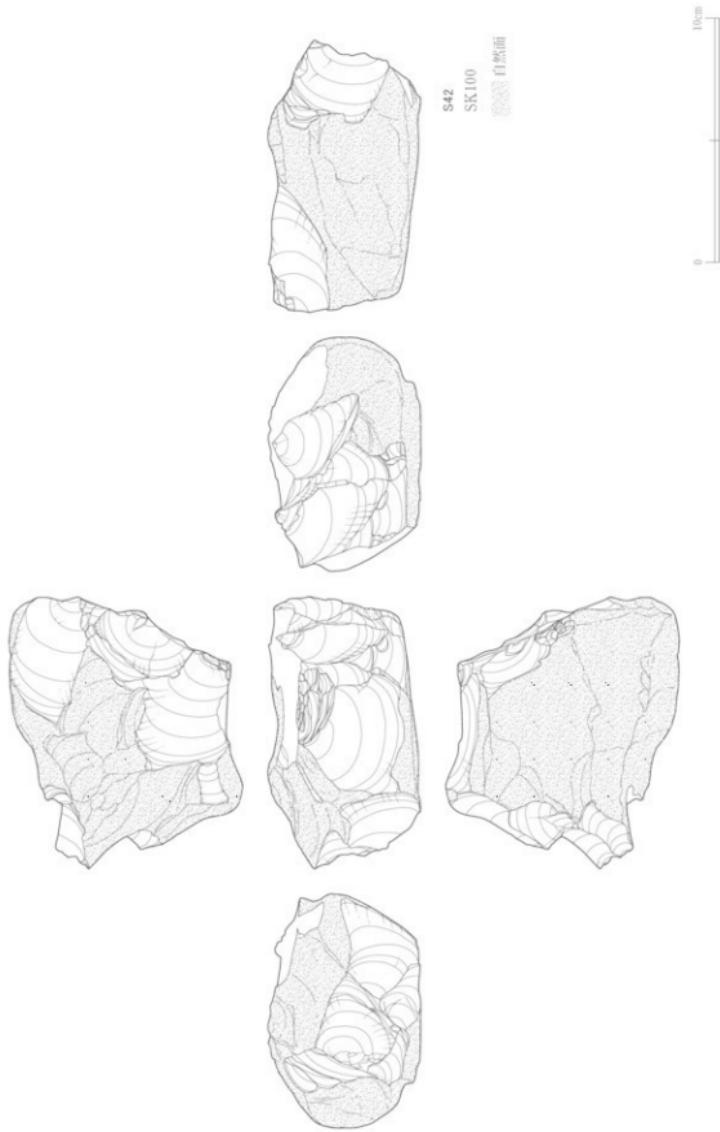
第44図 遺構内出土石器（15）接



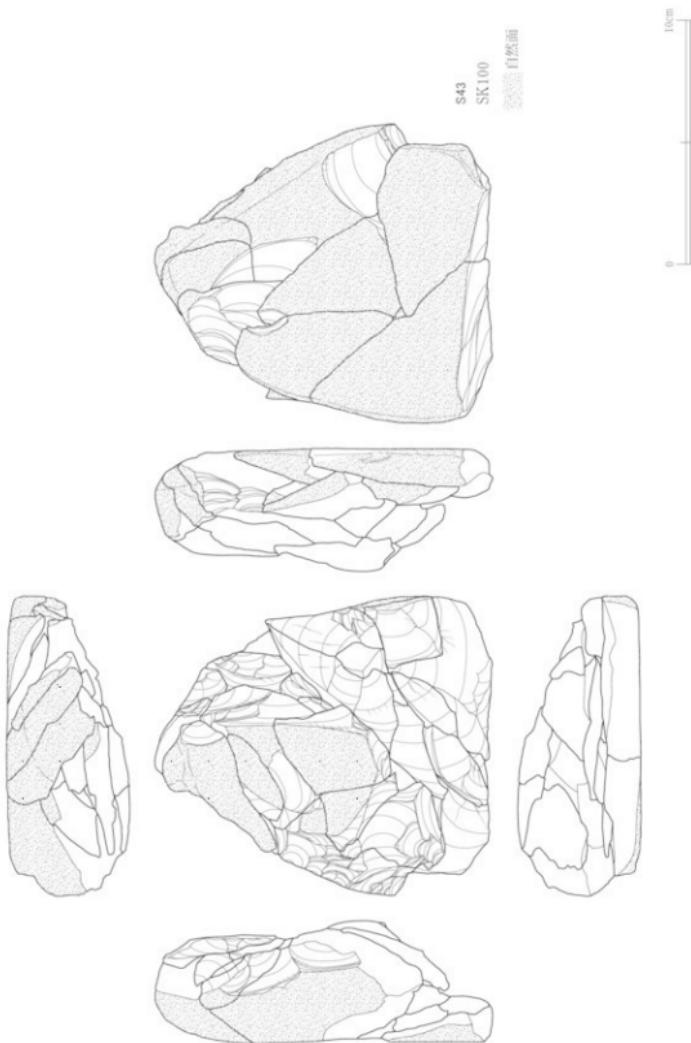
第45図 遺構内出土石器 (16) 核



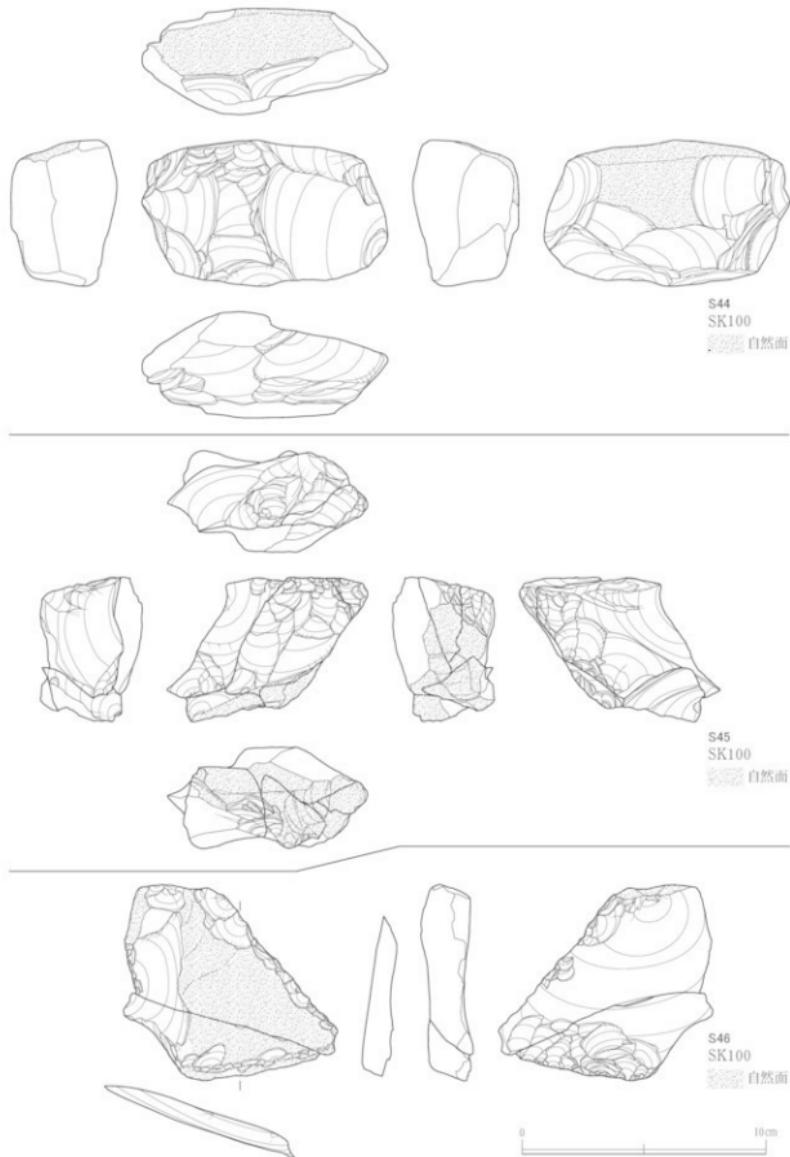
第46図 遺構内出土石器 (17) 接



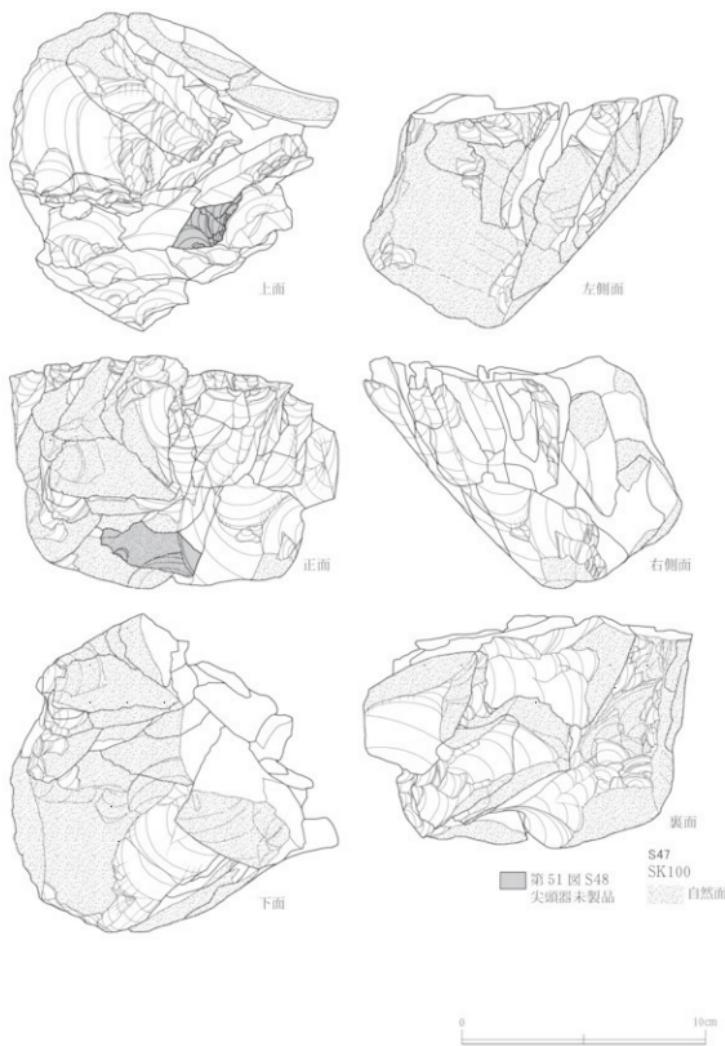
第47図 遺構内出土石器 (18) 核



第48図 遺構内出土石器 (19) 接



第49図 遺構内出土石器 (20) 核・接



第50図 遺構内出土石器 (21) 接